

うしとらのまちの 花ちるさとの住  
文殿 ぶどのにてあるを 源の家のぶどの前は前の巻にもあり

てそれに書を納めおく殿と見えたり

忍びやかに 花散里

うちかたらひて 玉鬘花ちる里と

紫 うへにも今ぞ かく事成て後聞え給ふは源の心おきて

なりあらかじめいひて事のさはりとなる事も常なり

さればたいづこともなく御子尋出たる事をのみ前

には語りて昔のことは今ぞ委しくのたまふなるべし

むかしのよの 夕顔の

かく御心に 紫上

わりなしや 源のたまふ

世に有人の はやくなくなりし人の事を世にありがほ

にわざとめかしくとはすかたりにせん事となり

人にはことに 紫を

おぼしいでたり 夕顔を

人のうへにても 先他の事をいひてみづからの事にお

よぶなり

女といふ物の心ふかきを 六條御息所などのまうねき

恨などの事を云ならん

さらにすぎくしき心は こりおそれて

さるまじきをも 恨など深からずわらひたるをいふ

又たぐひなく 夕がほ

よにあらましかば ながらへて

北のまちに物する人の 明石上

人の有さまとりくくに 是はかのさるまじきがあまた

なる中にてのとりくくのころをいふ

かどくしう 夕がほ

さりとも 紫

姫君の 明石

又ことわりぞかし 細此姫君の母上なれば源の捨がたく

思ひ給ふはことわりとおもひ給ふなり

かくいふは九月の事なりけり こは玉かつらの上りて

秋にも成行まゝにといひしよりほどありて今は九月

になりさて此十一月に六條院へ移り給ふまでの事を

知せん料にかく書たるべし源氏三十四の九月といふ

説はこゝに據るなり

よろしきわらは 玉かつらの方に

まどひいで給ひし にげのぼりし時の

いちめなどやうのもの 今の世にもつかへ人などをば

物うる商人などあなたこなた行かよふほどにおのづ  
から聞付てなかだちするたぐひおほく侍るなり

あてく 將來

その人の 玉かつらをみやづかひに

十月 一本十一月と有かた右にすがくともえわたら

ぬよしをいふに合せばよく侍らん

源 おとひひんがしの御かたに 花ちるさと

哀と思ひ 夕顔

物うじ玄て 源のと絶などを思ひ倦じをして

をさなき人の 子のありしとなり

おうなになるまで 玉かつらは源の御子と云からにこ

との外にとしたけて廿二にしもあれば事を甚しくの

たまふとて老女になるまでとは云なりさておうなと

云は老女の事にておいをんなの略語なりをんなと書

は麻績女の意にて女なり假字によりて理たがへりこ

ははおうなと書て老女の意なり其理萬葉和名などに

みゆ今本女と書は誤れりおうなと書ぞ正しき

おぼえぬかたより おもひがけぬなり

だにとて 遅くてだにの意なり

うつろはし 西對へ

は、もなく成にけり そのかくれし山里のまゝに死た  
るとなり

中將を聞え 夕霧こゝに初て中將と書き 花散へなり

あしくやはある 花散の御爲にも

おなじごと 玉かつらを

げにかゝる人の 花散里

姫君の 明石

おひらかに 花散本性

かのおやなりし人は 源夕顔上をのたまふ

御心もうしろやすく 花散里

つきくしく 花散里の身に似つかはしくうしろむべ

き人も少くてつれづれなれば玉かつらの事はうれし

きとなり

ことおほからで 中將一人なれば少くて事も多からぬ

となり 殿のうちの人は 源の御方の人々

むづかしきふるものあつかひ 源のもとあひ給ひし人

を尋出られしこと、思ふ故に古ものとはいふならん

御車三ばかりして 玉のわたり給ふ日

の中びす玄たり 玄たてたり

殿よりぞ 源より  
 その夜やがて 玉かつらの渡りし夜  
 おとりのきみ 源氏西の對へ  
 むかしひかる源氏 是はむかし五條わたりに住し頃聞  
 しめのとなどの心をいふ既夕顔の卷に有し事なり  
 としごろのうひくしき かの五條にもかりのすまひ  
 し又つくしへ行などもしつゝ年頃へてかたぐにう  
 ひくしくてのみ在ければ源の御名は昔きつれど  
 も入たちてはおもはざりしと云ならん  
 はつかにみたてまつる はつゝとも云てわづかと同  
 じ  
 わたり給ふ 源の  
 右近かいはなてば 妻戸のかぎをはなつなりかいは辭  
 なり  
 このとぐちに こは金戸カネドといひて鎖ツブさしかたむる戸口  
 なれば繁想火の事なりさるならでは入まじき戸故に  
 心ことにこそと戯のたまふなり次にけさうびたると  
 いふもこゝよりの詞なり  
 ひさしなる 即入て  
 わりなく 玉かつらは

ひかり見せんや 火をけざやかにせよとなり  
 かゝげて 灯を  
 おもなの人や 面はぢせぬをかくいふさて是は玉かつ  
 らの心なるを灯ちかくかゝぐる人にいふは轉この用  
 ゐかたの前にも多し  
 げにとおぼゆる さまぐの說の中に夕顔のみみはづ  
 かしげさに似たるをいふてふかたに心よれり  
 いさゝかも 源の少しも他人めかずし給ふなり  
 かうて かくしてなり  
 すぎにし 夕がほ  
 えなん聞えられざりける 涙すゝみてものゝいはれぬ  
 おぼし出らる 昔の事  
 御としのほど 源  
 かくとしへたる 隔つゝ  
 契りつらくも 前世の  
 わかひ給べき 既におうなとさへのたまひしなり  
 聞えんこともなく 玉の  
 まづみ給へりけるを 入をなり或説玉かつら足たゝすま  
 づみとのたまへるにつけて日本紀竟宴の歌に蛭子を  
 「かぞいろはいかに哀と思ふらんみとせになりぬあ

したゝずしててふをうけてのたまへるなり  
 昔人に 夕がほ  
 ほゝゑみて 源  
 あはれとも今は又 かぞいろはいかにあはれといふこ  
 と源の身にうけてのたまふ  
 御いらへと 玉の  
 わたり給ぬ 源  
 めやすく 玉の  
 うへにも 紫  
 かゝる物ありと 玉かつらのこと  
 兵部卿の宮などの 或云源氏の弟登兵部卿なり  
 まがきのうち 内ゆかしうかい間見まほしむ心にて書  
 り  
 心みだりにしがな 心を亂らしにてがなを略せり  
 すきものどもの よそにては好色なる君達などの源の  
 御あたりへは實々しくてのみ見え來るは繁想すべき  
 女のなきころなればなり今よりは此人あれば人々の  
 なまめくをもみんなり  
 うるはしだちて まめだちといふが如し  
 かゝる物の 玉かつらを云

くさはひの 繁想種なかりし間なりとなり  
 もてなしてしがな 玉かつらを  
 うちあはぬ人の 入かのすきものどものうるはしがほに  
 てはえあられすなまめくめる様をみんなり  
 或説玉かつらをもてなす様明石姫君かしづき給ふと  
 はことなるさまなりといへり  
 あやしの人のおや 紫上  
 まことに君をこそ 源のたはむれ詞なり  
 いとむしんに 心なきわざを云  
 おもてあかみて 紫  
 すいりひきよせ 源  
 戀わたる 夕顔を戀わたる身は吾も此女君も同じ事な  
 れど吾子として尋來んには實の父のかたへこそいた  
 りてめわが方へかくより來しはいかなる縁ぞやとさ  
 てかくあるをおぼすに昔の無たまの心よせてやとお  
 ぼさるればあはれとなるべし且此玉かつらは草のか  
 つらにてはひひろされるが末より筋を尋て本へいた  
 るに譬へたり後撰に「いづくとか尋來つらん玉かつ  
 ら我はむかしのわれならなくにと云をもてよみ給へ  
 るなり後撰のも即玉かつらならでは尋ね來てふ心詞

のかなはぬなり或説に玉鬘の事と云は誤れり  
 げにふかくおぼしける 紫  
 中將の君にも 夕霧  
 かゝる人を 玉かつら  
 よういして 兄弟なれば  
 こなたに 玉鬘の方へ  
 かゝる物さぶらふと 御兄弟に  
 まつめしよすべく おのれをこそ此御かたへ  
 御わたりの程にも 玉の六條院へ  
 かたはらいたき 夕霧は實のせおと、おぼしてのたま  
 ふを心去りたる人はかたへぐるしく思ふなり  
 心のかぎりつくし 玉かつらの人々の思ふ 豊後介國  
 にて吾心のかぎりつくして玉かつらをあがめたりし  
 事も只今此すまひをみればかぎりもなくゐなればた  
 る事にてありけるよとなり  
 おやはらからと 源夕霧など  
 今ぞ三條も大貳を 前に初瀬にて祈りし事あり  
 いきざし 花氣調 (遊仙窟)  
 おほぞうなるは 玉かつらのかたによしなき大よそな  
 る人を家司とせば事怠ぬべしとてさるべき人を定め

らるゝ中に此介もなれるなり  
 おきてさせたまふ 源  
 豊後のすけもなりぬ 家司  
 いかでかかりにても 細此介などはかりそめにも此殿中  
 には出入まがたきを今家司に成て心安く出入して結  
 局人を去たがふるとなり 孟ぶごのすけ孝心ありて  
 遺言をたがへず忠貞にて玉かつらを京にぐし奉りし  
 にこたへて面目をほどこしけるなるべし  
 おほとのゝうちを 源氏の御所  
 おとゝの君の 源  
 御去つらひのこと 玉のかた  
 御つらにおぼし 紫明石花散などと  
 かゝりともゐ中びたる やんごとなきつらに云々を直  
 に受たる詞なり 玉かつらのさうぞく紫花散などと  
 一つらにみやびかに調じてまゐらせらるゝは源の御  
 おぼしもことに御かたちもよきまゝに似合たまふべ  
 きとてなりかくはありとももし猶田舎びたる所のお  
 はさんにやさらば中にそれらは似合まじければとて  
 む中めきたる色あひにも調じ給ひてそれをも添てま  
 ゐらせらるゝとなり是は次にきたる物の人のさまに

似ぬひがくしくも有かしと紫のゝたまふと同じ意  
 にてもしかのあき人のよきゝぬきたらんが如してふ  
 如くもやとての源の御心やりなり  
 てうじたるも 是も右のやんごとなき装束に添てまゐ  
 るなり  
 おりものどもの 是より細くばりてふ所なり  
 われもくゝと 織殿よりなるべし  
 御らんするに 源  
 うへに 紫  
 みくしげ殿に 是は源の家の装束をすべて調せる所な  
 り  
 こなたにせさせ 紫の私に調らるゝがごとし  
 とうでさせ 取出  
 かゝるすちは 紫  
 いとすぐれて 勝  
 ありがたし 源  
 こゝかしこの 二條院六條院其うちにも中宮紫上の御  
 かたゝなど別にうちのあるをいふならん  
 うちどの きぬをうちもほりもする所なり  
 こきあかき 紅紫などをいふべし朱にもこき淺き有べ

し  
 御そびつころもばこ 御衣櫃 衣篋  
 これはかれはと 色あひとり合するなり  
 たてまつれ らせの反れ  
 にぬは 似合ぬなり  
 おとゝ 源  
 つれなくて 玄らぬがほして云意なり  
 さていづれをとか 紫白の料には  
 それもかゝみにては 鏡に向て見るのみにては自の様  
 は知がたしとなりこは時にのぞみての御いらへなが  
 らげに鏡にては惣てのすがたは見定がたきものなり  
 こうばいのいともんうきたるゑびぞめの 花ゑびぞめお  
 もてすはうら花田なり今やう色とは紅梅のこき方  
 によれる色なり紅梅のもんうきたるはうはぎ今やう  
 色がさねのきぬのことなるべし紅梅はきぬいまやう  
 色はうすぎぬの事なり皆かくのごとく心得べし  
 いまやういろの ちかく出来たる色  
 この御れう 紫  
 さくらのはそながに 花さくらはおもて玄ろくうらゑび  
 ぞめなりかいねりはうすき紅のあやのはりたるなり

つやゝかるとはうつくしき心なり

姫君の 明石の

あさはなだのかいふのおりもの 海賦は大波にみるや

貝のものなどおりたるなり「あさ花田なればにほひ

やかならぬなりこきかいねりは紅のかいねりなり

いとこきかいねり 源蘇芳の打衣なり

夏の御かた 花散里

くもりなくあかき 細うはぎなり

山ぶきのほそながは 山吹色の細長なり 花おもてく

ちばうら紅梅なるをいふ

かのにしのだいに 細玉かつらなり

うへはみぬやうにて 紫

うちのおとや 紫のおぼす 此君まことは内大臣の子

なりと既にかたり給ひしなるべし未にその事あり

にたるなめりと 玉鬘

色にはいだし 紫の

殿みやり給へるに 源氏 紫を

たいならず 源の紫の方を見やり給ふに且たいならず

てふ意なりいかになれば紫の色にこそ出さね玉か

つらの姿のおしはかりよりして實の御子ならねば是

もいかにかなどおぼすべしと源のたいならずおぼす

なり末に心がけ給ふ事は今よりも有べければ源の心

の鬼なるべし故に事の様をあらためて衣の色より人

のかたちにとりそのかたちはよからぬも心こそとま

めなるかたにいひおとしたり

いで此かたちの 源

よしとても 色あひの

かのすゑつむ花の 此句よくうつれり

柳のおりもの 柳はおもて白うらあをし夏は卯の花と

いふなり

人まれずほゑまれ にあはじとおぼせばなり

梅の折枝云々 花まろきうきものおりものにこきうち

きをかさねたるなりこき紫のうちたるは光色ありて

うつくしきなりそれを白きにかさねたればけだかく

みゆべきなり河海に紅梅のうすぎぬといへるはあや

まれるかとおぼえ侍る

てふとり 蝶鳥

うへはめざまし 紫

あをにびのおりもの 花青にびは尼のきる色なりくち

なし染のきぬも尼君のためまかるべきによりて源の

料に用意し給ふをそへられたり又ゆるし色は紅のう

すきなり出家の人も重ねのきぬに用る例あり河海に

黄なるゆるし色とのせられたりかならずしも黄がち

なるべからずたいゆるし色はうす紅と心得べきなり

御料にある 源の御料

ゆるしいろ 薄紅なり

おなじ日 皆元日の御料

げににげいたる 願おのゝき給へるをみて似合たりけ

りと去り給はんためなりマニについたる是は常なり

似氣付たるてふ詞はめづらしかれど猶いひもすべし

たゝならず 心あるといはんが如し

御使のろく 源よりの使に

今すこしさしはなれ 末摘は隔て二條院におはすれば

艶なるまざまも有べきをたゞ事をたがへぬのみのこ

ちゝくしさをいふ

うるはしく 古體に正しき方なり

うつばにて 豊のきぬもなきなり

御ふみには 御返

みちのくにがみの 檀紙

いでやたまへつるは 或説源の此數に入て衣を給へる

はうれしかるべきが中々うらめしきとなり御とだえ

の故なるべし

きて見れば 入源のとひ給はぬをうらみて此衣をかへし

やりてんかへすともたゞにはかへさじ恨の涙をそへ

てぬらしてかへさんとなりうらみかへしやりてんみ

な衣の詞なり

あふよりにたり 此は某の亞府てふ昔の能書の有しを

それが手風によりて今様の女の手とはいと筋ことに

て艶ならぬをいふか猶此あふの事考べし 奥 内は

なるさまか

いといたく 源

うへなに事 紫

御つかひにかづけたる 源の心

いとわびしく すゝけてまかまかさねもなければ

すべりまかでぬ 御使

いみじくおのゝは 源の方の人々

かやうにわりなう 源のおぼす

さかしらに 萬葉情進と書り

はづかしきみなり 源のたまふ 今本まみと有はわ

ろし一本はづかしき君也と有ぞよき源のはづかしき

まみなりといは上をおぼすといひ切べからぬ事なり  
りさて末摘を啼しくはづかしき君なりとのたまひて  
さてそれにつけて物語し給ふ

かごとこそ かちごとなり

まろも其つらぞかし 我も此類なりと戯てのたまふ

ひとすちに 只古きすがたをのみよしとして

ゆるぎ給はぬ 心うつさぬなり

人の中なることを 譬ば人々の中に交るてふ事をよむ

にはなり

折ふし 月花などの節々のなり

わざとあるうたよみの 歌よみとて召れておもてむき

なる歌仕うまつる人々の交らひの時は

まどゐはなれぬみもじぞかし まどゐの三文字をよみ

入る こゝは下にいふ髓腦のむねを宜ふ成べしそれ

に人の中に交る時の意をばかくよめ中にも御前など

へ歌よみとて月花など様のをりふしに召るゝほどの

古へを知ららん歌よみの交りのをりは必古今の「お

もふどちまどゐせる夜はからにきたまをしきを

物にざりけると様によめとあるをうけていつもまど

ゐてふ三文字をゆるさずよみ入るなど様のかたくな

しさを宜ふならん次の繁想歌にあだ人てふ詞を腰に

いつもおきてよめば本末つづけやすしなどいふ事も

かのすいのように有成べし是みないと初めたる人の爲

のみなるをおろかに守り過すを笑ひ給ふなる故に次

にかく古へ今にわたりたる歌よみの事をいへり

あだ人といふ五もじを 是も右のごとくかたくなしき

をいふ

やすめ所に 中の五文字

よろづのさうし歌まくら 是よりはかの歌よみとある

様の人を云 萬葉古今後撰又古き物がたり家集など

其外にもむかしの歌のさうしども多かるべし歌まく

らとは歌よむべき名所又は詞など集めたるもの有つ

らん能因歌まくらといふ人あれどおぼつかなし

よくあないまみつくして 能案内知見盡

つようはかはらざるべけれ 古體今様とても事の意を

よく得ては強きかはりはなきとなり

ひたちのみこの 末摘の父宮

かうやがみ 紙屋紙

みよとておこせ給へりし 末摘の源へ

和歌髓腦 今和歌髓腦とて有は濱成式喜撰式孫

姫髓腦石見女すいのう新撰すいのうなどあれど皆古

へを知らぬ人の偽ごとにて一つも用にたらぬ物なり

から歌にもさる様の四病八病などいふ事の有をもて

皇朝の古へ迄でかれにならひて作れるものなりそ

れが中に此文の頃には皇朝の古學する人總て絶たれ

ばさる作りごと多かりけんまどふ人のためにいふ

なりけり

やまひさるべき所 八病など云をいふ

もとよりおくれたる 源才おくれたればと下りてのた

まふ

うごきすべくも 式の制禁多くて

かへしてき 末摘へ

よくあないしり さる父のすいなうなど古きふみ知給

ふらん末摘の歌にしては右の如くよみ出給ふ様はわ

がすいなう迄らぬ心にもめなれてまだしき口つきな

りと戯のたまふなり

めなれてこそあれとて めづらしからぬ歌書なり

いとほしきや 末摘の事

うへいとまめやかにて 紫の上は實によき書ならんと

おぼして

物の中なりしも 文庫などの中にありし成べし

みぬ人も心ことにこそはとほかりけれ 爰に有すいな

うは蟲ばみてかひなし凡是を見ぬ人は歌の筋にうと

きなりされば姫君に見せまゐらせん物となりげに

用の用ぬは心にあり一わたりまづみぬ人は心ばせし

てつく所なきものなり

ひめ君の 源詞

やうなからむ 益無

まうけてしみぬるは こは大かたの事をならひ得て後

の人にいふべき物なり此文の中にも女のたちぬひ染

いろ琴などをよく得たるをばほめたり歌などもわろ

きをば笑へり然るにかく心にしみて物せずその一と

もならじそれが中に今はほどくにつけて大かたに

ておくべきもあれど歌の返しなどいとよからねど本

末かなふほどにはよみおくべきを心にしめて一たび

入てはいかでかならんさればかの雨夜の物がたりに

いひしを本として末の巻々をば意得べきなり

こゝろのすぢを 既にもまづまらん心のおもむきあら

んをといへり 心たよひてつくかたもなくあらん

はよろづにわろしされどたてたる心を行はんはた女

にあらす  
かへしやりてんと 紫かの歌の詞をあげてのたまふなり  
末つむのうらみてかへしやりてんとまでよみ給へるをか捨て立かへり御返事もなくば餘にひがくしく人わろかりなんと紫の宜ふなり

これより 源の  
おしかへし 文のかへしに歌あるにはおしかへして其歌のかへりするは例ならぬにとなり  
なさけすてぬ 源

かき給ふ 歌を  
かへさんと すゑつむは恨の餘りにかへしやりてんとよみ給ふを人戀るには夜の衣をかへしてぬれば夢にみゆるてふ事に書かへてよみ給ふはなめげなるいひなしなり仍て右にいと心やすげなりとは書る成べし餘りに人わろげなれば今にわがうときよりこそあれことわりよと少しいひなほして詞をそふるなりよるのころもかへすは古今に「いとせめて戀しき時はぬば玉のよるのころもをかへしてぞきることわりやの詞も歌あらんか考べし

源氏物語新釋

初音

此卷の名も「年月をまつに引れてふる人にけふ鶯の初音きかせよ詞にも此返しはみづからきこえ給へばつねをしみ給ふべきかたにもあらずかしてふによれりさて玉かつらの卷のすゑの十二月にきぬくばりとしてありし其あくる正月の事にて源氏卅五のとしのはじめなること前の卷に或人のいふが如し且行幸の卷まで月次に書てゆけり

年立かへる 元日は人の心のおのづからことにおぼゆるものなればかくうちまかせて俄に春めけるやうに書けりさて此卷はかの鶯の初音をもとゝしたれば拾遺に「あら玉のとし立かへる朝よりまたるゝ物はうぐひすの聲と有をもてかきはじめたるならん  
名残なくくもらぬ 去年の雪氣の残りなく朝日ののどかなるをいふ

敷ならぬ 六條院を云たてん料に先いへり拾遺「野べみれば若菜つみけりうべしこそかきねの草も春めきにつれ

ましていとゞ 六條院は常だにきら／＼しきをましてとしの始めはよろづあたらしう引つくるはれたるなり

春のおとゞの 紫の方  
いける佛のみくにと 下に蓮の中の世界といへるが本なり

さすがにうちとけて 右のごとく世に類ひなげにはあれどそれにつけてほこりにいかめしうはあらでなだらかに打とけてめやすう住なし給ふなり源は惣てきら／＼しきことを賤しき方に爲給ふこと前にも後にもあり

姫君の 明石の  
なか／＼よし／＼しく 或人云若き人たちに對して中とはいふなり  
はがためのいはひして 元三の齒圓の圖など類聚雜要抄に委しこは女房おの／＼の局にてすべきを姫君の御前に侍る限りはそこを是をさへ局よりとりよせて祝ふをいふ

ちとせのかけにゑるきとしの内の云々  
こは先古今に有「萬代を松にぞ君をいはひつる千と

せの陰にすまむと思へば「あふみのやかみの山を  
たてたればかねてぞみゆる君が千とせはてふ歌をと  
なへてかゝみにむかふ事なればその詞を用ゐて書り  
もとより此御前の千とせの陰に住てはいとしく一  
年のうちの祝ひはいちじるきことなりといふなり  
そばれあへるに 下に此事を戯かはしつると書り  
おとどの君 源氏

ふところ手ひきなほしつゝ おのゝ心とけて祝ひそ  
ぼるゝほどなれば俄に容儀をなはずなり  
いとほしたなき みづからの祝ひするをはづるなり  
いと去たゝかなる 源詞そのほしたなげなるを見給  
ひてことよふのたまふなりことぶきは言祝なりその

おもふ筋につけてわれ祝ひ言ひひてんとなり  
中將の君 御心かけ給ふ女房なること上にみゆ  
かねてぞみゆるなどこそ 君が千とせの詞を略けり  
かゝみのかけにも 餅をいふ  
あしたのほどは 元日  
人々参りこみて 源へ参賀に  
夕つかた 源は

御かたぐの 花ちるなどの方々なり

さむぎ 参座  
御かけこそ 右にいふ千とせの陰又かゝみのかけなど  
をかけていふ  
けさ 源詞

此人々の 姫君の御かたの女房たち  
うへには 榮花物語にうへ若宮にもちひかみ見せ奉  
らせ給ふといへり鏡といふより見せといふならん  
みだれたる事どもすこしうちませつゝ 戯ごと前々  
ものたまひし我にならひ給ふが有がたきなど様の事  
のたまふをふくむべし歌にてあるべし  
うす水 鏡餅を添て池のかゝみといひて影ぞならへる  
は源と紫とをのたまひ且たぐひなきとは紫をほめ例  
の御みづからをもほこり給ふなり是をいはんとてみ  
だれたる事どもうちませつゝと書り

げにめでたき 記者  
くもりなき 是も右と同じ意なれどさすがにともにな  
どの詞をいはぬなり  
すむべきかけぞ 源と共にの意こもれり次の詞にては  
みゆ  
なに事に 記者

えならぬ五葉の枝 枝にうつれる鶯と書しをおもふに  
松も鶯も造り物成べし且拾遺に大后の宮に宮内とい  
ふわらはなりける時大后御前にさぶらひけるほどに  
御まへなる五葉に鶯の鳴けるをかれよめとおほせご  
とありければつかふまつれる「松のうへに鳴うぐひ  
すの聲をこそはつねの日はいふべかりけれこれを  
思ひて書たり

うつれる鶯も 是よりは文の詞か又記者の語にても姫  
君のをさなゝがらこなたをおぼす心のあらんかとい  
ふなるべし  
明石歌  
年月を 姫君のそなたへうつり給ひて四とせ餘りにな  
ればたゞ見まゐらせん時を待心にひかれてのみ年月  
を經るわれにけふは昔づれをだにし給へとなり  
音せぬ里のと聞え給へるを 或抄に「けふだにも初音き  
かせようぐひすの音せぬ里はすむかひもなし此歌何  
に出しか物に見えず  
げにあはれと 明石上の心を源の  
事いみもえし給はぬ 源哀すゝみて元日なれど泪落し  
給ふべく見ゆるなり  
此御かへりは 源

元日子日 眞淵類聚國史を考るに皇朝に  
けふはねの日なりけり  
正月初子日の宴は平城天皇大同三年に初て見え嵯峨  
淳和迄あり又文徳の齊衡四年正月乙丑に宴ありて云  
昔者上月之中必有此事時謂之子日遊也今日之宴  
脩舊迹也と見えて後ほみえず扶桑略記寛平八年正  
月六日子日宴を雲林院にて行れしと見え菅家文章に  
もありさて松引事は土佐日記に今日は子日とて海松  
をだに引んといへれば早くより有し事なり右の文章  
に倚三松樹一摩腰習風霜之難犯也と有もそのよし  
かその後に関融上皇寛和元年二月十三日に紫野の小  
松多かるあたりに錦の平張などしてませし事後の記  
どもにみゆ其時籠物折びつ物楡破子など有しなり此  
度のひけこひわりこもさるよしかと人はいへり  
千とせの春をかけて 小松引もなればなり且次の事を  
ふくめり

姫君の 明石の  
わたり給へれば 源  
おき所なくみゆ 興に入しなり  
北のおとゝより 明石上  
奉れ給へり 姫君へ

源氏物語新釋 初音

源氏物語新釋 初音

源氏物語新釋 初音

源氏物語新釋 初音

源氏物語新釋 初音

みづから 姫君

いとうつくしげにて 姫君の事なり

おぼつかなき 御母は

つみえがましく かく引はなちておき給へば

ひきわかれ 姫君歌

御文の事なるべし  
をさなき御心にまかせてくだしくぞ 或説に歌の

くだしくしき事と思ひていへれど此頃の歌どもにて

は少しつふくと聞ゆる様にはさのみ侍らざるなり

或人こは歌をばいはず此歌にそひたるふみにくだく

だしく書給へるをおもはせていふならんといへるぞ

よきなり

夏の御すまひ 花散里

ときならぬ 夏ならぬ

あてやかに 上崩しきなり

ちかやかなる 同じ床にふし給ふ事無なり

いもせ 妹夫

おしやり給へば 夕つかたに問給ふにまだけふの儀式

のすがたにておはすをふと見ておぼすさまなるべし

次にかの贈り給へる色め且御髪の事あるもかむざし

やうのきとしたるさまよりうつりて髪のおとろへを

おぼすに及びしならん

或説に几帳おしやれどさりげなきさまにてる給ふ事

といへどさらばおしやり給へどと書べしおしやり給

へばと書しからはさる意にあらず

はなだはげに 花散里に年内あさ花田のかいふのもの

のきぬをおくり給へればそれをき給ふなり是より下

の御方にも源くばり給ふをき給へるなり

やさしきかたに いたく髪のおとろへたればえびかづ

らをだにしてつくり給へかしとはあらねどせめ

てもとなり

えびかづらしてぞ 或云伊非諾尊鬘をなげ給へば菟荷子

となるそれよりかつらをえびかづらといふといへり

われならざらん 是より下に物語云々と云までは前も

出し意なり

こまやかに 源

西のたいへ 玉かつら

すみなれ給はぬ こその十一月よりなれば

御志つらひ 一わたり漸調たるなり

さるかたに まだ調はぬにつけてもそのかたにてのま

なしのよきなり

をかしげと 愛

山吹に 或云西の對の姫君にはくもりなくあかきに山

吹のほそながを贈り給へり玉かつらはくもれる所な

く匂ひきら／＼しきを山吹の紺にいとよもてはやさ

れ給へりといへり

くもれるとみゆる所なく きぬくばりの時有し詞をも

て書り

思おもひにまづみ 田舎よりのほり給ふ程の事

さばらかに 小疎サツラト也萬葉に秋はぎのうへわくらばとい

ふわくらに同じまかれればさわらかとも書し又はの濁

はわに通へばさはらかともよし

かくて見ざらましかばと かく住せ置ても又わが妻と

してみずは口をしとおぼすにつけては終にたいには

過すまじとなり

えしも 記者

かくいと 源は

なほおもふに 玉かつら

へだたりおほく おもひめぐらすにもとかく實の父な

らねば心へだてらるゝ事の多くはたいかでかくて

すむ事などおもふがあやしきといふか又何とやら

む源のさま御心有やうにてあやしければまほに打と

けがたくもてなし給ふといふか此二つをかねて隔多

きなるべし

あやしきが いかでかくてこゝにをる事ぞなど

まほならず 玉かつら源になり

いとをかし 源の心に

あなたなどにも 紫の方へ

いはけなき 明石姫君も

うひごと 琴

のたまはん 玉かつら

さも有事ぞかし げにこなたよりよきついでして迎へ

ん事なりとの意なりよりて下の踏歌の時迎給へり

物より いせものがたりにその瀧ものよりも異なりと

もいひて物とはそれとさゝいでいふ語なり明石の住な

し様いとことにつかきをいふ

唐東京錦の 唐東京錦の茵の事めづらしか

からのとうぎやうきの 唐東京錦の茵の事めづらしか

らす類聚雜要抄に縁は綾にて中に東京錦を用ゆと見

ゆればこと／＼しきはこゝにては風流ならで正しき

を云なりはしきしたるとはたゞ縁つけたるといふの



みづから 姫君

いとうつくしげにて 姫君の事なり

おぼつかなき 御母は

つみえがましく かく引はなちておき給へば

ひきわかれ 姫君歌

をさなき御心にまかせてくだくしくぞ 或説に歌の

くだくしくしき事と思ひていへれど此頃の歌どもにて

は少しつぶくと聞ゆる様にはさのみ侍らざるなり

或人こは歌をばいはず此歌にそひたるふみにくだく

だしく書給へるをおもはせていふならんといへるぞ

よきなり

夏の御すまひ 花散里

ときならぬ 夏ならぬ

あてやかに 上崩しきなり

ちかやかなる 同じ床にふし給ふ事無なり

いもせ 妹夫

おしやり給へば 夕つかたに間給ふにまだけふの儀式

のすがたにておはすをふと見ておほすさまなるべし

次にかの贈り給へる色め且御髪の事あるもかむざし

やうのきとしたるさまよりうつりて髪のおとろへを

おぼすに及びしならん

或説に几帳おしやれどさりげなきさまにてる給ふ事

といへどさらばおしやり給へどと書べしおしやり給

へばと書しからはさる意にあらず

はなだはげに 花散里に年内あさ花田のかいふのもん

のきぬをおくり給へればそれをき給ふなり是より下

の御方にも源くばり給ふをき給へるなり

やさしきかたに いたく髪のおとろへたればえびかづ

らをだにしてつくろひ給へかしとはあらねどせめ

てもとなり

えびかづらしてぞ 或云伊非諾尊鬘をなげ給へば菟菟

となるそれよりかつらをえびかづらといふといへり

われならざらん 是より下に物語云々と云までは前も

出し意なり

こまやかに 源

西のたいへ 玉かつら

すみなれ給はぬ こその十一月よりなれば

御まつらひ 一わたり漸調たるなり

さるかたに まだ調はぬにつけてもそのかたにての玄

なしのよきなり

をかしげと 愛

山吹に 或云西の對の姫君にはくもりなくあかき山

吹のほそながを贈り給へり玉かつらはくもれる所な

く匂ひきらしくしきを山吹の紺にいとよもてはやさ

れ給へりといへり

くもれるとみゆる所なく きぬくばりの時有し詞をも

て書り

思おもひにまづみ 田舎よりのほり給ふ程の事

さばらかに 小疎サツト也萬葉に秋はぎのうへわくらばとい

ふわくらに同じ玄かればさわらかとも書し又はの濁

はわに通へばさはらかともよし

かくて見ざらましかばと かく住せ置ても又わが妻と

してみすは口をしとおほすにつけては終にたいには

過すまじとなり

えしも 記者

かくいと 源は

なほおもふに 玉かつら

へだたりおほく おもひめぐらすにもとかく實の父な

らねば心へだてらるゝ事の多くはたいかでかくて

すむ事などおもふがあやしきといふか又何とやら

む源のさま御心有やうにてあやしければまほに打と

けがたくもてなし給ふといふか此二つをかねて隔多

きなるべし

あやしきが いかでかくてこゝにをる事ぞなど

まほならず 玉かつら源になり

いとをかし 源の心に

あなたなどにも 紫の方へ

いはけなき 明石姫君も

うひごと 琴

のたまはん 玉かつら

さも有事ぞかし げにこなたよりよきついでして迎へ

ん事なりとの意なりよりて下の踏歌の時迎給へり

物より いせものがたりにその瀧ものよりも異なりと

もいひて物とはそれとさゝでいふ語なり明石の住な

し様いとことにけだかきをいふ

唐東京錦の苗の事めづらしか

からのとうぎやうきの 唐東京錦の苗の事めづらしか

らす類聚雜要抄に縁は綾にて中に東京錦を用ゆと見

ゆればことくしきはこゝにては風流ならで正しき

を云なりはしさしたるとはたゞ縁つけたるといふの

よしある火をけに　まだ寒ければ火桶を置て即それ

小松の御かへしを　姫君より

香をもたきしさまなり

かきませて　手ならひに

ものごとくまめたるにえびかうの　或説物語にの意と

めづらしや　或説に「人まれす待しもまゑるく鶯の聲珍

いへどこは正身は隠れて尚紙など様の類に入たるを

しきけふにも有かなてふを引たれど何に出たるにや

いへば物毎にといふべし和名抄裏衣香衣比と有は吾

花のねぐらに　紫のかたを添

朝にてえびといふ意なり然ればえびのかうは裏衣香

谷のふるすを　明石のみづからを云

にて焼物にあらずかけ香の事なり實こゝに侍従をく

聲まぢえたる　古歌を少しいひかへたるか歌考べし

ゆらかして物ごとといひて又えび香の香といへる

さける岡べに　こは萬葉卷十に「梅花さける岡べに家

は本よりは尚などかけ香もふかくまめたるをいふ

居者ともしくもあらず鶯の聲と有を六帖に家しあれ

なり末摘繪合梅枝の卷々にくはしくいへるが如しま

ばとて擧しをこゝには六帖より書るなるべし

かも此君は公忠朝臣より傳へたるえびかうの百歩の

ひきかへしなぐさめたる　姫君の住給ふ花のほとりに

法を焼物合にも出せし人なれば此えびかうのことな

我もすむからにけふ初音も待得初めれば今よりは乏

るべきなり

しからで聞らんとおもひなぐさめたるなり

うちとけたるも　よの常の人のうちとけたるとはかは

はづかしげなり　傍にて見る人の意か

れるとほめたるなり

筆さしぬらして　源も

さうがちに　物語にさうといふはかなをいへり然れば

さすがにみづからのもてなしは　明石上の心高き物か

こゝはもじがちなどにもと有つらんをもとさとしと

ら源へは心おきてうやくしうするなり

うと誤りしなるべしいかにもさうにては聞えず

まろきにけざやかなる髪の　明石上はまろきうき文の

ざえがらす　才有がましくせぬなり

絹を源のおくり給ふこと上の巻にみゆ

めやすく　見苦からぬなり

さばらか　上にも有し詞なり

御さわがれもやと　紫の御ねたまなり次のかたぐゝに

は心おくのみなり

猶おぼえ　明石を

みなみのおとゞには　紫の方

めざましがる人　此人々の中にもはらは紫もこもれど

今は昔の如くは怨給はぬをまらせて人々と書なら

ん

わたり給ひぬ　源のかへり給ふなり

かうしも　明石心

あるまじき夜ふかさぞかし　忍びありきがましきをお

もふか

まちとり給へる　紫上

なさけやけしと　物を急に甚しくするをけやけしとい

ふ然れば元日の夜しもかしこにねたまふよと紫のお

ぼすべきをいふ

心のうち　紫の

おどろかし　此かたより

りんじきやくの　正月三公おのゝ是をおこなふ其時

は請客の使などありて客人をことに招請なり臨時と

いふは正月二日三日の間に關白大臣の第一の客の不

慮にきたるをいふさて臨時客とは名付くるなりその

時は催馬樂朗詠かたぬきなどあり樂器をめさす笏拍

子にてうたふものなりまた云りんじきやくは攝關家

にての名目なり但六條院は大臣ながら攝政の職をも

かねたるほどなればなすらへていへるなり

おもがくし給ふ　夜べの事の面なきをまぎらはし給ふ

をいふ

になし　似

なすらひなるだに　源には似たる人もなきなり

とりはなちては　人々も源のそばならぬ時は

いうそく　有職の字なるべし有識と書て物しりの事と

するは後世のさた成べし

おまへにては　源の

けおされ　氣押

おもふ心など　玉燈のあれば

花の香さをふ夕風　かくいひて次に梅ひもときてとい

ふは句をわざと前後に書たるのみ

あれはたれ時　萬葉には曉の彼は誰時とよめり常は夕

を誰そがれ時といふをめぐらしみにかく書る成べし

ものゝしらべ　臨時客には樂器をめさす祿もかづけぬ

よいいへど此度引出物ろくなどあり然れば樂器もめ  
したるなるべし物のしらべどもと書からはうたひ物  
のみを云にあらす

このとの 催馬樂「このとはむべもとみけりさきく  
さのあはれさきくさの花二段さきくさのみつ葉よつ  
葉に殿造りせりやとの作せりや  
おとよも 源氏

さきくさ さき草は福草と書て紀に人の名にも式の祥  
瑞の事にも書たり和名抄にも出つ扱一莖の末三つに  
分れて葉々相當りて莖朱きよしにて朱草とも三枝と  
も書りその故に萬葉には三枝の中とつ々けたり此心  
にて三つともつ々くるなり且皇朝にては此代に百合  
花を用ゆ令義解古事記などの幸川祭にみゆれば四は  
とは殿の擔などかたがひなるをいふ注どもには例  
の偽事多し

さしいらへし給ふ御ひかりにはやさされて 源の手をそ  
へ給へばよくなるとなり  
ものへだて、 紫上の外は皆よそに聞給ふなり  
はちすの中の 或説に於蓮花中經十二大劫觀經下 紫上  
を生佛國に書り其餘の御方々は下品下生に准せり此

院の中に有ながら如此よそに聞給ふは彼蓮の中に劫  
をふに三不足あり一には佛を見ず二には説法を聞ず  
三には佛を供養せずてふに譬ふといへり上に春の殿  
を佛の御國と覺ゆといへるを照すべし

よのうきめ 古今に「よのうきめ見えぬ山路へいらん  
にはおもふ人こそほだしなりけれどふをうちかへし  
て書り源はつれなくて見え給はず且かゝるめでたき  
事をもよそに聞ども惣ては心になふやうにまなし  
て住せ給へば即世のうきめなき山住のごとし然れば  
おもふ人をほだしにてかく住ながらうき事もなけれ  
ば源を是ぞとがめん理もなしとなり

つれなき人の 源をさす  
そのほかの 源のみえぬのみにて  
おこなひのかたのひと うつせみ  
かなのよろづのさうし 蓬生に末摘のからもりはこや  
のとじを朝夕もて遊び給ひし事あり玉盞に和歌の髓  
腦に心をいれ給ふ事などあり  
ものまめやかにはかゝしき 源の掟にも人々の心に  
叶やうにし給なり  
心のねがひにしたがひ 御かたぐの

人のほどあれば おもき筋なれば

いにしへさかりとみえし 末摘

御わかかみ 若髮

瀧のよどみ 古今おち瀧津たきのみなみとしつもり

老にけらしな黒きすぢなしてふをととりて今は白髮の  
まじりたるをよどみとは書るなり

いとほしと 源

まほにも 真面

柳はげにこそ きぬくばりの時に柳色を末摘に參らせ  
しが似合じとはゝゑみ給ひしをうけてげにこそとは  
書きさて此下にかさぬべきをも源より參らせけんを  
たゞかの柳のみにて下はあらぬ衣どもなり仍てかさ  
ねのうちぎはいかにしつるかといふなり下にその理  
りみゆ

すさまじかりけれと 似つかすすさまじくみゆるなり  
人から 白ウツなり

かいねりの 搔ねりはうすき紅のはりたる紺なりはり  
敷いれば黒むものなり

さるくしく 萬葉に珠衣ウツのさるくしくと云は鳴音をい  
ふ

さるおり物のうちきをき給へる こゝは色合をいふは

更にて寒げに見え給ふさまをいひたつるなりかの張  
たる一かさねのさむげなるに又さる張たるうちぎを  
着給へばいよゝさむし然ればかさねのなごやかに有  
べき物はいかに失ひ給ひけんとなり下にうちとけた  
るさまにふくみなえたるこそうけれといひて御衣の  
事後見給へるをむかへ看べしさて此袿は鶴をいふと  
みゆ小袿にはあらじ

いとさむげに かの柳のうちぎばかりといふか  
御鼻の色ばかり霞にもまざるべからず

こは新撰萬葉又拾遺に「淺緑野邊の霞はつゝめども  
こぼれてにはほふ花ざくら哉てふ歌にて書たり花櫻は  
一種色深きよしによる歌ども六帖又詞花集にもみ  
ゆかのかばざくらといふに似たり

御心にもあらす 源  
中々女はさしもおぼしたらす さやうには恥給はぬと  
なり

あはれにながき 源の  
かゝるかたにもおしなべての人ならず 御顔かたちの  
人なみならぬうへに世の中の事もはかしくしからぬ

をいとほしくかなしくおぼすなり  
我だにこそはと われだに見捨ばこそはあらめいかに  
もふかく後見参らせんとの意なり故に心に深くおも  
ひといめ給ふ事の有がたきを云なり  
御こそなども 末つむ

みわづらひ給て 源

かく心やすき御すまひ うちとけたる内々に時の衣は  
ふくだみなよゝかなるぞよきとなりかの張たるを多  
く着給ひてかくさむくおはするをもてのたまふなり

あいなく 愛

こちんしく こちは骨の音にて不風骨なる笑さまな

るべし

さすがに うちわらひ

だいごのあざりの君 末摘卷兄の僧の事出

御あつかひし 衣をこゝより贈しとてなり

きぬども、 自の

えぬひ侍らで こはいひなし成べし

かはぎぬを 末摘卷に貂の裘をき給へる事あり其皮ぎ

ぬをもあざりへやりつるとなりこゝにかはぎぬをさ  
へといふは外のきぬどもゝやりしをまらせてけり然

れば上にかさねのうちぎなどはいかにまなしつるに  
かといふは此事なり

いとほなあかき御せうとなりけり 此兄人も貧にて衣  
うすくて鼻赤きをいふ成べし常人も寒きには赤むも  
のなり

こゝにてはいとまめにきすく人にて 源のこゝにおは  
しましては實體に情肅人に成て物ものたまひ事をも  
執なし給ふなり

いとよし よくぞあざりにまいらせられたるとなり

山ぶしのみのしろ衣 河世を遊て野にふし山に臥を山ぶ

し野ぶしと云みのしろ衣は襲の代に用たる意なり

後撰 「山里の草葉の露はまげからむみのしろ衣たゝ

すともきよ又雪のみのしろ衣ともよめり

まろたえの衣はなゝへにも 表着などはれなる衣はふ

くだみ給へるをいたはれど下の白き衣は常にいくへ

もあたゝか成ほど着べき事と也 七重萬葉二十防人

「さゝがにのさやぐ霜夜に七重なる衣にさせる子ら

が肌かもてふをとれるなるべし

もとより 源自をいふ

おれしく 愚

たゆき 隙なり

きほひにも 競

おのづから 忘るゝ事も有となり

むかひの院の 此東院より向は二條院の御倉なり

みはやす人もなきを 古今山高み人もすさめぬさくら

花いたくなわびそわれ見はやさんてふをとれり

ふるさとの 源今住給はねばふるさとゝはいふ且かの

霞にもまざるべからぬ花の意にてよのつねならぬと

はいへり

花をみるかな 鼻を添

うつせみのあま衣 下にある松がうら島てふ詞と贈り

給ひし尼の衣の事などとかねてかく書り且此君尼と

成て此東院に住よし關屋卷に出たり

うけはりたるさまには 用意ことなる人なれば承張て

わが住所ともせず佛の御前を専らとして自はかたへ

と成て住なり

つばねすみ 局住

あか 關伽

なほ心ばせありとみゆる人の むべ心あるといふ歌を

もて書り猶はとかくにまだく人よりも心あるとい

ふなり

あをにびの几帳 出家の几帳の帷は青鈍なるに贈給ひ

し衣も青にびなりしを着てまりもみかくれたれば帷

も衣もわかち見えす只下のくちなしのかさねの袖口

ばかりことに見ゆるとなり

なみだぐみ給ひて こは次の詞を以て見るべし

松がうら島 後撰おとにきく松がうら島けふぞ見るむ

べこころあるあまはすみけりてふ如く今日よろづに

心有尼の様をば見れど實に近づき給ふ事はかなほぬ

出家なればかの音にのみきゝてはるかなる松がうら

島の如くもやみぬべきよとなげき給ふなり

むかしより 源詞

さすがに 前々そこはたゞ我と隔てん事をおもひ給ひ

しかど

かばかりの 如是ばかり

むつびは 相親は

かゝるかたに 尼となりて佛にかしづく方なり

あさくはあらず 宿縁の契の

つねにをりく 源右の詞をうけて戯の様にとがめ給

ふ

心まどはし給ひしよのむくひ我にはたさでふしなきなどを佛にかしこまり開ゆ  
るこそ

是は下の詞をみるに猶源のおもひはなれ給はぬ心よ  
り理りを立ひてこゝろみ給ふなりされば右にかゝ  
る方に頼きこえさするも云々と云は御契の方ははな  
れて佛かしく方に頼てこゝろに有も浅からぬ御宿世  
なりと云なるを源の戯にとがめてそれは殊の外に我  
に思ひまどはせ給ひしつみをあらぬ佛に畏り給ふも  
の哉そのむくひは我にむかひてこそはたし給ふべけ  
れ佛に申給ふは迷惑し侍るとの意にてくるしけれと  
も書り

くるしけれ わが迷惑ぞとなり

おぼしめるや 紀伊守が紫想につけてかく尼になりこ  
こへも移り給へば世間の人直にのみもあらぬ物なり  
とぞおぼしめるやおぼしゑらば今だに心を我になよ  
び給へと下にはおぼすことゑるきなり

あさましかりし 關屋の巻に紀伊守がうるさき心故に  
尼になりし事を源の聞しめしてのたまふよとおもふ  
にはづかしきなり 尼君よくこたへたり

いにしへよりも 空蟬のさま  
かくもてはなれ 尼となりしをいふ  
おぼすしも 源の

みはなちがたく 上の文は此心なり  
はかなきことを けさうがましき語  
あなたをみやり 末つむの方なり  
かやうにても 右の外に  
みなさしのぞき 源

おぼつかなき 人々への源詞  
かぎりある わが命の限りはかはらじとのたまふなり

「限ある別のみこそかなしけれ誰も命はそらにしら  
ねば

いのちぞゑらぬなど 「ながらへば命ぞしらぬわすれじ  
とおもふ心はつきそはりつゝ、  
此二首何に出しやらん見えす次の歌は例の作り事か  
我はと 源

ところにつけ人のほどにつけつゝ、 右の所々の様を人  
に心づかしむる文なり

御心にかゝりてなん 前にも在し語なり  
をとこたうか 此事の始式は代々の事類聚國史日本紀

略など引て末摘巻に委しくいへりさて古への踏歌は  
只十六日なりたまゝ延喜三年正月十四日男踏歌の  
事見え竹川巻に十四日の月云々と書り然れば後に男  
女日を異にせられしなるべし

内より朱雀院に参りて云々 聖武紀天平二年正月十六  
日晩頭移奉皇后宮百官主典以上陪從踏歌且奏且行  
引入宮裏以賜酒食云々この様もかたぐへ行こ  
ととみゆ

つぎに此院に 下に后宮の御方などもめぐると有  
道のほどとほくて 六條京極なれば

夜のあけがたに 十四日なるべし  
月のくもりなく 入がたの月なり

にしのたいの姫君は 玉かつらなり  
こなたの姫君 明石  
うへも 紫

すぐく院きさいの宮の御方など 弘徽殿太后なるべし  
みづうまや 竹川にも有り 厩牧令に水驛と云は陸路  
の驛に對て道に江河有て船もて渡す所をいへばこゝ  
と事遠し萬葉卷十四の國所未勘歌の中に須受我禰の  
はゆ馬うまやの筒三井の水を給へな妹がたゞ手よて

ふは馬に水飼によしありさて行人驛亭に入ては人馬  
ともに飯菰の供給あるなり又所により目に隨ひて馬  
に水ばかり飼て過所あるを俗語に水うまやと云つら  
んを踏歌の人に酒肴ばかり給ひて過すをさはいひ  
けんかく轉していふ事常の事なり踏歌の諸人の入來  
て躍さわぎて即引て他へ行ば宿驛に旅人の俄に入込  
てほどなく過るに譬へてさもいふなるべし  
こそそがせ給べきを 物を略

雪はやうくふりつむ 河延喜十三年御記云晩頭風雪  
及成尅雪晴云々是踏歌折也今考天慶七年記云正月十  
六日云々宮人踏歌於殿上以雪落地濕也

あを色のなえはめるに 無文の麴塵也 西宮臨時抄踏  
歌條に王卿如例供奉者青色無文麴塵闕腋、白下襲、  
半臂、白石帶深履四扇、被綿花、白杖、高巾子、言吹  
振、六位者以綿裳面、近代童子著絲鞋、召人雖帶  
衛府、垂纓不帶、翳笏、被聽禁色者其日用無文  
衣、主典以下本位袍淺沓、又以衛府官人爲持袋者、  
裝束如常云々是近例也といへり或説に袋は熨斗袋  
といへり

えらがさねの 白下襲

なにのかざりかは ことなる装束ならぬなり  
かざしのわたは 或説に以<sub>レ</sub>綿造<sub>レ</sub>花差冠額<sub>一</sub>也といへ  
るはさも有べし此文にかざしのわたともわた花とも  
書たればなりさて萬葉に初瀬女の造る木綿花とも白  
木綿花に波立わたるなどもよみたれば古へ木綿もて  
造れる花常の事なり

にほひもなきものなれど 白きのみにて艶なる色なし  
殿の中將の君 細中將は夕霧なり君達は柏木など也こ  
の二人歌頭なり花延長七年踏歌左權中將伊衡左歌頭  
右權中將實賴右歌頭王記此例になすらへたり今考に  
竹川卷に物の上手多かる頃ほひなり其中にも勝れた  
るをえらせ給ひて此四位の侍從右の歌頭なり云々  
内の大との君たち 柏木などなり

竹川うたひて 河竹川催馬樂呂 竹川のはしのつめな  
るや花ぞのに二段花園にわれをばはなてわれをばは  
なてやめざしたぐへて、新儀式云次王卿以下勸盃侍  
臣所雜式以下行酒三四巡後漸調子唱<sub>三</sub>竹川云々  
かよれるすがた 萬葉に「秋の田の穂田の蒔ばかかよ  
りあは<sub>レ</sub>そこもか人のわを言なさん催馬樂にまろび  
あひにけりかよりあひにけりといひか黒きか青なる

かやすきかよはきなどもいへるかはそへたる語とみ  
ゆきて竹川の卷に竹川うたひて御階のもとにふみよ  
る程といふところの様同じければうたひて御前の方  
へよる時の姿をいふなり

るにもかきとめがたからん 細聲は繪にかきがたきとな  
り 孟畫<sub>レ</sub>花不<sub>レ</sub>畫<sub>レ</sub>鳥不<sub>レ</sub>畫<sub>レ</sub>壁東坡士季伯時陽  
關圖詩龍眠獨識殷敷處畫出陽關意外聲  
袖ぐちとも 簾の一間々々に兩方へ袖を出すものなり  
こちたき いと多きなり  
春のにしきたち出 ことは古今に「見わたせば柳さくら  
をこきませて都ぞ春のにしきなりける又「山櫻霞の  
間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれなどの  
歌をもて書り

かうごしのよはなれたる 古への巾子のさまなるを今  
は形のことなれば世はなれて神さびたりといふ意な  
るべし或説に禮記の縞冠表紙といふを引たれどかな  
はぬ事なり  
ことぶきのみだりがはしき 踏歌の人々御前に立て萬  
春樂の詩を唱ふるに句ごとに萬春樂といふ事を唱ふ  
るを云なり類聚國史に桓武の延暦十四年正月乙酉踏

歌條宴侍臣奏<sub>三</sub>踏歌<sub>一</sub>曰山城顯樂舊來傳帝宅新成最可  
恰郊野通平千里望山河檀美四周連新京樂平安この詩三  
首ありて其詩ごとに右の如く新京云々の十字を添た  
りこはかの萬春樂の様をうつしたるにてその一度事  
なり

をこめき 俳優  
なか<sub>レ</sub> 此詞は下へつけてみるべし  
聞えぬものを 中々に面白く覺ゆるといふを略せり  
わたかづきわたりて 花かづき綿内藏寮よりこれを奉  
を内侍藏人等東階の上に匣に綿を入れてもちてむかへ  
ば歌頭以下舞童以上次々に舞すみて階をのぼりて  
かの綿を給ふなり琴引以下のかづけわたは六位藏人  
の簾中より持傳て御庭にてこれをかづくめりこれは  
内裏の儀式なり

御かたぐ 物見給ふ人々  
おと<sub>レ</sub> 源  
中將の聲は 源のたまふ  
辨の少將に 賢木に高砂謠し人也後に紅梅の大臣と云  
いにしへの人は ひとつもさすべからず古人の賢さも  
とよりなり

なさけだつすぢは かくいふは女心にて侍り此頃こそ  
よろづわろくなりたれ  
おほやけ人に 政とる方  
みづからの 源  
あざれ 酒濃めき  
すきたる 好  
もてまづめ うはべばかりはとあれば凡の人下の心は  
すけどおもてのみつれなさつくる物なるをいふか又  
意は右の如にて直に夕霧の事をのたまふにも侍るべ  
し

萬春樂 西宮抄云踏歌<sub>一</sub>舞人起座唱<sub>三</sub>萬春樂云々今案  
萬春樂はすべて八句の詩なりそれを漢音にうたひて  
句ごとのあはひに萬春樂とうたふなり踏歌の舞人の  
たちさまに云事を源氏の御くちさみにのたまふな  
りくはしく二句を書付侍り  
御口すさびに 竹川卷にも冷泉院の是を御口すさびし  
給ひし事有

人々のこなたに 右に夜明はてぬれば御かたぐ歸り  
わたり給ぬと有はよはすすべての御かたぐ參らせ  
しを大かた歸りしをいひこはそが中にまだとま

り給ふもあれば人々云々といふか又かく集給ふまつらひなど事多きをそのまゝにて有ほどなれば即又御かたぐの参り給ふを委しくはかゝでいふにも有べしほどもなき間に文のたがひはきへからねばなりわたくしの後宴 公の踏歌の後宴と云は二三月の間にある時の結ツギの事なりそれにはあらで夜べの踏歌の後の日の樂を暫かくはいひなし給ふなりけりさてけふの御遊の事は竹川卷に故六條院のたうかのあしたに女がたにておそびせられけるいとおもしろかりき右のおとゝのかたられしとありまければけふの女がたの樂の事をばこゝには書ずしておもはせたるなり御ことどもの 日本琴ウクレレ箏ウクレレ琵琶などを惣ていふ

源氏物語新釋

胡蝶

卷の名は紫より中宮へ「花ぞの、胡蝶をさへや下草に秋まつむしはうとく見るらんでふ歌或は蝶鳥の舞にもよすがありさて上の初音の卷には正月の事をかき是には同じ春の三四月のことあり源氏三十五のおなじとしなり或説に今一とせ後の事の様にいへどかの中宮の心から春待そのとのたまひしを右の紫の御こたへは明る年の春こそ有べきなれば或説はろし

春の御前の 紫上

つくして匂ふ 花の限を

外の里には 彌生もいと末なれば大かたは花鳥も老ゆべき頃なるを此御まへのいつよりも物ごととに色音を盡くしてめづらしうおぼゆればいかゝ外のさとははまたよく春のふりせぬにやとおもひやらるゝとなり外をみぬ女房だちこゝの興のことなる餘りに立かへりおもひやるさまなり且こゝの詞どもは拾遺に「都にてめづらしとみる初雪はよし野の山にふりやまぬらんといふをうちかへして書る成べし

見え聞ゆ 花鳥

わかき人々 紫の方の人々なり

はつかに心もとなく 遙なれば纒にのみ見えて

からめいたる舟 下にて龍頭鶴首の船なるよし見ゆ

おろしはじめ 細船 此時は船樂一わたり有なり

うたつかさ 河雅樂寮

中宮は 細秋好

春まつそのは 幼女卷に「心から春まつそのはわがや

どのもみぢを風のつてにだに見よと秋好中宮よりの

たまひし御かへしを今こそはとおぼすなり

此ごろやおぼし 紫上

ついでなくてかろらかに 中宮は此同じ院の中におは

します時だに事と有ついでなくては渡り給ひがたし

となり

わかき女房だちの 中宮の御かたの女房

南の池は 秋好のかたの池なり

こなたにとほし 紫のかた

見せられたば 遠くて

こぎまひて東の釣殿 中宮の人々もこなたのも此同じ

釣殿にあつめ給ふなるをこゝには此二つの間に詞を

畧きたり下にてさる事の見ゆればなりかく詞をはぶきて外をてらし見て知べく書けるは此文の常にて後世人の及ばぬ事なり

わかき人々 をと意得へし

あつめさせ給ふ 是落着を先いふなり

龍頭鶴首 准南子龍舟鶴首註高誘云鶴水鳥也畫其象

着船首以御水思是右にいふおろし初の同じ日也既に先船樂一わたり有て後に二御方の女房たちをのせらるゝなりさて此船の様は台記の大饗に鶴舟を用ゐて装り宇治平等院に有を借たりとみゆ此度は新らしく造るといへばともかくも有ぬべけれど童の棹さすなれば大からぬ事など右の台記にておもひ合せらるみづらゆひて 角髪

もろこしだたせて 唐めかせ

まことのゑらぬ國 からめいたる船と云より實にとはいふ

さしよせてみればはかなき 上に心もとなく思ふといふに合はするなり

おまへのかたは 紫上の御かた

みやられて こゝのいろをましたるより二句は口調も

穩ならず文も拙く聞ゆ詩などの句をそのまゝの様に書たるにやその詩考ふべし且今強ていはば色をましたるの語よしなし若くは色をまじへたる柳と有し歟枝をたれたる花といはんよしもなければ柳枝をたれたりと有しか若くは又枝をたれたの下に字の落て何々したる花もと有しかさらば少し調ふべし

外はさかりすぎたる 花上の詞には外の里にはまだふりぬにやとかける此殿の中において外を見ぬ人の詞なりこゝの段は外よりきたる人のみて此御前の花はまださかりなりけりといへるなり

廊をめぐれる 文集。繞廊紫藤架、夾砌紅藥欄

こまやかに 色

ほそき枝どもをくひて 萬葉十に青柳の枝くひ持て鶯

鳴も又十六に白鷺啄木飛を白鷺のはこくひもちて飛

わたるとよめり

をしの波のあやに 花なみのあやに鴛の紋をおりませ

たるとみゆる水の面なるべし

をのゝえも 王質が故事

風ふけば こは紫の女房たちの船中にての歌なりなみの花さへは風にたつさなみなり色みえては山吹の

色に、ほふなり山吹のさきは近江の勢多の橋より石

山までの間にある事蜻蛉日記にみゆ

春の池や 井手は山しろの堰での里にて山ぶきの名所

なればこゝをほめていふのみ

かめのうへの 文集、不見蓬萊不致歸、童男卯女舟

中老てふを打かへして此御池ぞ命延る名は世にのこ

すべきといへり

行かたも 桃花源にいたりたる意か

わうじやうといふがく 皇曆平調こは御庭の平張にゐ

て奏する成べし

心にもあらず 日のくるれば棹さすものゝさしよせた

るを人々はあきたらず思ふなり

おりぬ おとゝの人々なり御説是も中宮の人々

こゝのしつらひいとことそぎ 寢殿對屋さまとはいと

ことにて風流洒麗に作れるをいふなるべし且御方の

人々は先にこゝにおりてゐたるを今おとゝの人々の

船よりおりて見たる意をいふ也 右の意にもあらず

おりたるを中宮の御方とする説もあれどさてはこゝ

に御方の若き人といふにことかきなりてわかちなし

御かたのわかき人ども 中宮の女房たちはやくこゝに

ゐたるなり

樂人めして 是よりは音樂のみなり

かんだちめ こは殿上なり

ひきもの 絃類の

ふきもの 竹の類

そうてう 双調は春の調なり

うへにまちとる 殿上

あなたふと 催馬樂呂なり安名尊けふのたふときや

云々 六條院の御門

みかどのわたり

たちど 立處

けちめ 分目

人々おぼしわくらんかし かの春秋のいどみを下に持

て終に春にまさる物なきを此樂につけても皆わきま

ふべしと也殊に樂の音につけていふは秋好み給ふ御

前へもきこえて御下心にはまけさせ給ふらんとてふ意

を含めり右に下に朝ぼらけの鳥の音をねたふきこし

めすと書たり

かへり聲 細律に成なり喜春樂は黃鐘調律なり皇曆平

調律呂也 花反音は呂より律にうつるをいふなり喜春



畧きたり下にてさる事の見ゆればなりかく詞をばぶきて外をてらし見て知べく書けるは此文の常にて後世人の及ばぬ事なり

わかき人々 をと意得へし

あつめさせ給ふ 是落着を先いふなり

龍頭鶴首 龍准南子龍舟鶴首並高誘云鶴水鳥也書其象

着船首以御水患是右にいふおろし初の同じ日也既に先船樂一わたり有て後に二御方の女房たちをのせらるゝなりさて此船の様は台記の大饗に鶴舟を用ゐて装り宇治平等院に有を借たりとみゆ此度は新らしく造るといへばともかくも有ぬべけれど童の棹さすなれば大からぬ事など右の台記にておもひ合せらる

みづらゆひて 角髪

もろこしだたせて 唐めかせ

まことのまらぬ國 からめいたる船と云より實にとはいふ

さしよせてみればはかなき 上に心もとなく思ふといふに合はするなり

おまへのかたは 紫上の御かた

みやられて こゝのいろをましたるより二句は口調も

穩ならず文も拙く聞ゆ詩などの句をそのまゝの様に書たるにやその詩考ふべし且今強ていはば色をましたるの語よしなし若くは色をまじへたる柳と有し歟

枝をたれたる花といはんよしもなければ柳枝をたれたりと有しか若くは又枝をたれたの下に字の落て何々したる花もと有しかさらば少し調ふべし

外はさかりすぎたる 花上の詞には外の里にはまだふりぬにやとかける此殿の中にありて外を見ぬ人の詞なりこゝの段は外よりきたる人のみて此御前の花はまださかりなりけりといへるなり

廊をめぐれる 文集 繞廊紫藤架、夾砌紅藥欄

こまやかに 色

ほそき枝どもをくひて 萬葉十に青柳の枝くひ持て鶯

鳴も又十六に白鷺啄木飛を白鷺のほくひもちて飛

わたるとよめり

をしの波のあやに 花なみのあやに鴛の紋をおりませ

たるとみゆる水の面なるべし

をのゝえも 王質が故事

風ふけば こは紫の女房たちの船中にての歌なりなみの花さへは風にたつさゝなみなり色みえては山吹の

色に、ほふなり山吹のさきは近江の勢多の橋より石

山までの間にある事蜻蛉日記にみゆ

春の池や 井手は山しろの堰での里にて山ぶきの名所

なればこゝをほめていふのみ

かめのうへの 文集 不見蓬萊不取歸童男卯女舟

中老てふを打かへして此御池ぞ命延る名は世にのこ

すべきといへり

行かたも 桃花源にいたりたる意か

わうじやうといふがく 皇座平調こは御庭の平張にゐ

て奏する成べし

心にもあらず 日のくるれば棹さすものゝさしよせた

るを人々はあきたらず思ふなり

おりぬ おとゞの人々なり御説是も中宮の人々

こゝのしつらひいとことそぎ 寢殿對屋さまとはいと

ことにて風流洒麗に作れるをいふなるべし且御方の人々は先にこゝにおりてゐたるを今おとゞの人々の船よりおりて見たる意をいふ也 右の意にもあらず

おりたるを中宮の御方とする説もあれどさてはこゝ

に御方の若き人といふにことかきなりてわかちなし

御かたのわかき人ども 中宮の女房たちはやくこゝに

わたるなり

樂人めして 是よりは音樂のみなり

かんだちめ こは殿上なり

ひきもの 絛類の

ふきもの 竹の類

そうてう 双調は春の調なり

うへにまちとる 殿上

あなたふと 催馬樂呂なり安名符けふのたふときや

云々

みかどのわたり 六條院の御門

たちど 立處

けちめ 分目

人々おぼしわくらんかし かの春秋のいどみを下に持

て終に春にまさる物なきを此樂につけても皆わきまふべしと也殊に樂の音につけていふは秋好み給ふ御前へもきこえて御下心にはまけさせ給ふらんとてふ意を含めり右に下に朝ぼらけの鳥の音をねたふきこしめすと書たり

かへり聲 細律に成なり喜春樂は黃鐘調律なり皇座平

調律呂也 花反音は呂より律にうつるをいふなり喜春

樂は黄鐘調の樂なり平調にもわたして用るや可<sub>レ</sub>尋  
あをやぎ 細<sub>レ</sub>律の類なり「青柳をかた糸によりておけ  
や鶯のおけやぬふといふ笠はおけや梅の花がさや催  
馬樂律おりかへしは返してうたふなり

ことくはへ 助音

鳥のさへづりを 右に中宮の御事をばか<sub>レ</sub>でこ<sub>レ</sub>に鳥  
の音につけていへるは心したるなり

いつも春のひかりを 此院は宮殿樓臺別置<sub>レ</sub>春てふ如  
く御方々花のごとく多けれど皆外より繁想すべき筋  
ならねばこ<sub>レ</sub>へまあり給ふ親王上達部だちも物すく  
よかにのみ有しを去年より玉かつらのおはすれば心  
げさうし給ふとなり

にしのたいの姫君 玉かつら

こともなき 萬葉に事無<sub>レ</sub>吾妹とよみて難なくよろしき  
をいふ

おぼしあがめ 玉かつら

おぼし<sub>レ</sub>もゑるく 花玉かつらの巻にいふ兵部卿宮な  
どの世にかきのうち好ましく去給ふ心みだりにしが  
なすきものどものいとうるはしだちて此わたりにみ  
ゆるはか<sub>レ</sub>る物のくさはひのなきほどなり云々

わが身さばかりと われはとおもふ人なり柏木髭黒の  
大將などなり

うちいでぬなかのおもひ 「さいれ石の中におもひは  
ありながらうち出ることのさもかたき哉

ことの心をまらで 實は兄弟なる

中將などは 柏木

すきぬへかめり すきなまめきよるなり

兵部卿の宮 入二條太政大臣の掣のよし<sub>レ</sub>菴宴卷にあり

うけばりて 外に心おくことなくてなり

そらみだれ 空酔

さうどき こはさわぐといふ語なれどこ<sub>レ</sub>はなまめき

みだるゝてふ意に用ゐたり

御かはらけのついでに 兵部卿

もてなやみ 土器を

おもふこ<sub>レ</sub>ろ 玉かつら

まかりにげ 退還

いとたへがたしや 強給ふ酒に堪

むらさきの 例のごとく紫を女にたとへてそれを思ふ

には身をうしなはんもをしからずとよみたるなり藤  
を淵にいひまするは古今集に池の藤なみ咲にけりと

よめるもその意なり

おなじかざし 我と同じかざしを源もさし給へとて藤  
の花に盃をそへてまゐらするなりかくするは我おも  
ひ入たる心も源も同じくおぼしてわれに臺の君をゆ  
るし給へてふ意なりさておなじかざしとは「我宿と  
たのむよしのに君いらばおなじかざしをさしこそは  
せめといふ歌なり

奉れ給ふ 御土器を源へ

ふちに身を 此ふちは却て宮にたとへてそこに女の身

をまかする事も有べきやとおもひて女の住むこ<sub>レ</sub>を  
立さらでいつまでも居給へとてと<sub>レ</sub>め給ふなり

えたちあがれ給はで 兵部卿のなり

中宮の御讀經 中宮に季御讀經有し例はいまだ考へず

内裏にては先は二月八月撰日て行はる又三月十月或  
は七月ありし事も日本紀略などにみゆ院にて有事は  
同じ書にたま<sub>レ</sub>見ゆさて四日の間大般若經をよむ  
なり論議もあり僧は諸寺より仰ありて參る江次第に  
は百僧ともいへり今考に今昔物語に一條攝政殿にて  
も季御讀經有しなりもとより中宮にてもあり

「内裏季御讀經は四ヶ日の間あり中宮も准べきか」

やがて 即 兵部卿

ひの御よそひにかへ給ふ 晝の裝束とは束帶をいふ直

衣宿衣は夜の服なり榮花物語まくらの草子その外に  
もひのそうぞくひのよそひなどいふは束帶のこと、

見ゆ

あなたに 中宮

みなつきわたり 座に

やんごとなく よき御後見あれば異に

いつくしき 法筵嚴重なるなり

春のうへの 紫上

とりてふ 鳥蝶 此とりてふの童やがて舞人なり

わらはべ八人 鳥四人蝶四人

まろがねのはながめに そのわらはべのさ<sub>レ</sub>げ持つな

り

山吹を さしを略くなり

にほひを けしきなり

みなみの 紫上の方なり

おまへの山ぎはより 隔に山ありて池はつゞけるよし

右にあり

おまへに 中宮

かめの櫻すこし まことのさくらなり  
 わざとひらばりなども 總て此御讀經のよろづも源の  
 御心なればかく紫より花がめさげん次でに鳥蝶の  
 童の舞人をも參らするは一つの珍らしめなり然れば  
 いつもは平張などして樂人舞人もをる事なるを此度  
 はそれをもわざとせさせ給はず御前の廊に俄に胡床  
 を召てをらせ給ふ是又此童の參れるにつけて俄に樂  
 をし給ふさまに設給へるなりいかさま公事ならねば  
 わざと事をきたる様にてなか／＼めづらしう物し給  
 ふなり  
 あぐらどもを 床机  
 きやうがうの人 公にて左右の行香に圖書官人香奩を  
 取て左は王卿に轉右は侍臣に轉じさて王卿侍臣僧に  
 轉せり中宮にても是に准ふべければ先さるべき宮の  
 官人瓶をとりて漸に轉じて從儀師などあるには加ふ  
 成べし  
 あかにくはへ 關伽の具に加ふ  
 御せうそこ 紫上の  
 殿の中將の君 夕霧  
 花ぞの、 下草に己が秋待むしは春の木末の花は元よ

りにて其花にすむてふをすらうとく見るらんとて  
 鳥蝶の童にそへてかの幼女の卷に「心から春待その  
 はわが宿の紅葉を風の傳にだに見よてふ御こたへな  
 りこてふをさへやうとくみるらんと句を隔てつゝく  
 なり  
 きのふの女房たち 御方の  
 とりの樂 迦陵頻なり  
 きゝわたされて 鶯の音と樂のこゑと通ふなり  
 水鳥もそこはかとなくさへづり 聲の調のとゝのへる  
 には鳥獸も堪ず鳴よろこぶは常のことなり  
 きうになりはつるほど 細鳥の急  
 胡蝶童  
 てふはまして とび立てとあるはわろし此舞飛ちがふ  
 ことあればなり又まひいづるをもとある本はわろし  
 まひいると有かたを用ゆ花のかけにとあればなり出  
 るならば花の陰より出べし又かづけ物は舞入時に有  
 ことなれば事の様もつゞけり河蝶樂宇多院御時被  
 造之由見李部王記  
 とびちがひて 實の蝶も飛出るといふ説は用す  
 宮のすけ 中宮の亮  
 かねてしもとりあへたる 色あひ共かの瓶の花にかな

ひたればなり  
 物のしども 樂人  
 去ろき一かさね 樂人に大桂は給はらじ白き衣なるべ  
 しこしざしは絹の卷たるなり是を給はりては腰にさ  
 して退ればいふなり  
 中將の君には 夕霧  
 女のさうぞく 女の裝束かぶくる事桐葉卷に在り  
 御かへり 中宮より  
 ねになきぬべき 細説古今「我やどの梅のほづえにうぐ  
 ひすのねになきぬべき戀もする哉てふ意にてきのふ  
 は其御方のゆかしかりしとなり  
 こてふにも かのうとく見るらんと有をうけて御もと  
 の心もて八重の山を隔としたまはずはこてふにさそ  
 はれて花ぞのを訪つべきものなりとなり  
 すぐれたる御らうども かく世にすぐれ給へる上らう  
 だちの御歌にとりてはかやうの事はえ堪給はぬもの  
 にやあるらんさしもなき御贈りこたへどもぞとなり  
 御くちつきども 紫の歌をまかねていふ  
 女房たち きのふの  
 むづかし むづかしうてかゝずとなり

にしのたいの御方は 玉かづらなり、  
 御たいめ 明石姫君紫上に  
 こなたにも 紫の姫君より西の對へも  
 ふかき御ごころもちるや 是よりかの心よせ給へてふ  
 迄記者の語也 記者の評して玉かつらは人うとから  
 ず御かた／＼へもいひかはし給ふは深き用意よと先  
 いひてたゞ實の方をおぼせば下の心は浅もいかにも  
 あれ打見る人のなつかしげに心へだつまじう見ゆれ  
 ばたれも心よせ給ふといふなるべし此下に實のおや  
 に去られればやと心にはおぼせとひとへにうちとけた  
 のみ給ふ事をいへるをむかへて見るべし  
 あさくもいかにあらん 下の心は  
 けしき そはともかくもあれ先うち見る  
 いとらうあり ての語を畧り 上臈めきたるさま有也  
 いづかたにも 姫君紫花散など  
 きこえ給人 紫想人  
 おぼろげに 大かたにて誰にゆるさんと  
 父おと／＼にも去らせやてまし こゝに内大臣にも去  
 らせてわがものとせんの意成べし  
 との、中將は 夕霧

みすのもと 玉の方の  
御いらへみづから 實の兄弟とおぼせば  
さるべきほどと 御兄弟と  
思ひもよらず 繁想のかた  
内のおほいどの 内大臣  
このきみにひかれて 夕ぎりに伴ひてをりく参るな  
り  
けしきばみ 玉かづらに  
そのかたの哀にはあらで 玉の心はかの繁想し給ふ方  
につきたるにはあらで  
心ぐるしう 實の兄弟なれば  
まことのおや 内大臣  
ひとへにうちとけ 源を  
らうたげに 勞  
なほはゞぎみの 夕がほの上に  
これはかどめいたる 玉かづら  
ころもがへの 四月になるなり  
そらのけしき 四月天氣和又清と云々  
のどやかにおはしませば 源氏  
たいの御かたに 西對

おもひし事と 源の  
ともすれば 玉かづらのかたへ  
ほどなくいられがましき 云よりてほどもなきになり  
はやうよりへだつる事なう 細兵部卿宮は源の御兄弟の  
中にてもことにむつび給へども好ましき方にては源  
に心隔給ふを今となりてその御心の色を見るこそを  
かしけれと源のたまふなり  
この君をなん 兵部卿  
たゞかやうのすぢのそなん 好給ふ事は源にかくし給  
ひしなり  
よのすゑに 齧  
猶御かへりなど さる人なれどまたうとくすまじき人  
なりとなり  
いとけしきある 風流ゆゑよしなど、  
つゝましく 玉  
右大將 細こは髭黒にて實めきたる人なり承香殿女御の  
御兄弟東宮の御伯父なり玉かづらに心をかけて終に  
得給へり  
くしの 孔子  
たふれ 戯

みなみくらべ 艶書共を  
からの花だのかみの 柏木の文  
むすばはれたるにかとて むすびしまゝに有なり  
おもふとも こは末に右衛門督にて柏木といふ人のな  
り今は中將なり且此歌をもて末に岩もる中將と書た  
り  
いまのかしうをばれたり いと心なまめきたるさま  
はかしくしう 玉かづらは實の兄弟の文なればえいひ  
がたき故のたまはぬなり  
右近めしいでて 源事とる女房に此末の事共をしへ給  
ふ  
をのこのとがにしも をのこはさる事常なるをたゞ女  
がたに心せぬつみのあるなりとなり  
其をりにこそ 此人のこゝろかろくはあやまちすべか  
りけりと立かへりては思はるゝも有しとなり  
む宏ん 無心  
もしはめざましかるべき おもかるまじき人の思ひあ  
がらんもはためざましくおほしゝらるゝとなり  
わざとふかゝらで 専らといふがごとし  
心ねたうもてないたる 女のさしてあへしらはぬさま

なり  
心だつやう 男のおもひ起して深くなるなり  
物のたより 男の  
心得たるもさらでありぬべかりける さる様なるには  
かゝはらで打捨たるぞよきなりと  
後のなんと 難  
そのつもり それが積りては  
宮大將 兵部卿髭黒  
おふなく 心の限りと云なり  
又あまりものゝほどをらぬ 玉かづらは皇女などにも  
あらず源の御女といひながら外ばらなればかの宮大  
將などへはほどををりて御返しなど有るもよしとな  
り  
そのきはよりしも 右のかたのほどより下  
らうをもちぞへ 繁想文の數其外の勞なり  
なでしこの なでしこはおもて紅梅うら青なり此ごろ  
の花の色は四月なれば卯の花がさねをいふにや卯花  
といふはおもて白うらもえきなり巴上花  
撫子卯花の衣の色とリ合  
あはひけたかうとは色あひのことなるべし  
さはいへど よけれども

人のありさまをも 六條院に住て  
 けさうなども けはひ  
 もてつけ給へれば けやけからず心高う  
 おかぬ所なく 不足  
 こと人とみなさんは よそのものにせんは  
 右近もうちゑみつゝ 源と玉かづらのさまを  
 さしならび 細源と玉かつらとは年は十三ちがひなり右  
 近が心には源のものになしたくおもふなり  
 さらに人の 右近が申  
 宏ろしめし 源の  
 みつよつは 三四  
 ひき返し かへさんもいかいなればなり  
 御文ばかり あなたよりの文  
 御かへりはさらに 源の殊更に返りごとあれど仰聞え  
 し時のみ御返しは待りしとなり  
 それをだに 仰有しをだに  
 くるしきことに 玉かづら  
 かれは 右近申  
 しょうねく 使の者が  
 中將の 柏木

見るこをもとより 海松子か  
 見しり給へり 柏木  
 つたへにて 其傳  
 また見いるゝ人も こは上に結びしまゝに有文の事な  
 り故に見いるゝ人もなかりしにこそと右近申すなり  
 人とは玉かづらの見給はぬをいへどかくひろく常に  
 もいふなり  
 いとらうたきこと哉 柏木の事をたまふなり  
 げらうなりとも 柏木のまだ中將にて有をいふ  
 公卿といへど かのなまゝの上達部より外參議の四  
 位五位といへるは是らなり  
 さる中にも まだ下らうにても覺え高き人も有が中に  
 まだく此中將は勝れて人がらんなりとなり  
 おのづから 兄弟なりけりと柏木のおのづから思ひし  
 る時も有なん今暫あらばさて只さることをこゝろえ  
 て何となくいひまぎらはし給へとなり  
 おぼす所やあらんとやゝまし やゝまはよゝましに  
 同じく口つむぐをいふならん然らば玉のした心には  
 いかにも實の御父にまられんこそとのみおぼすにやと  
 おもへば口よゝまれていひにくけれどと源のゝたま

ふなり  
 まだかうわかしくしう 玉かづらのる中にそだちて今  
 様になれ給はで物はかなげなるをわかしくしとはい  
 ふされば都にやんごとなくそだちなれたる兄弟だち  
 の中へまださし出給ひがたしとなり  
 猶世の人のあめるかたに さる田舎そだちの外ばらな  
 りといへどまたよき人の妻ときこえて人々しう成て  
 の後さるべきついでを得て名のり給ふぞよからんと  
 なり  
 宮はひとり 螢兵部卿 その妻となり給はん人をえら  
 むに兵部卿の宮は云々  
 めしうど 蜻蛉大和などの物がたりに見えてこはをり  
 ふし寢所へめす女をいふ今手かけものといふが如し  
 さやうならん事は せうはなりだちのおほからんに心得  
 てあへしらふ人はなだらかにもてけあてもありぬべ  
 しさはなくてねたましきくせあらん人は我もえこら  
 へす終には人にあかれぬべき事なり  
 みなほい 見直  
 もてけちてん 悪しとおもふわが心をも  
 心にくせありて 怨など

その御心づかひなん有べき さるものどもの事など今  
 より心をやりておもひ定め給ひて此宮の北のかたと  
 ならんとならばさすべしとなり  
 大將は年へたる人のいたうねびすきたるを厭ひがてらに  
 年へて北の方の今はねび過たるをいとほしく成て又  
 の人をもとめてこゝにもいひよれどさる事はわづら  
 はしき事と人のいふも理りなれば大將へとも思ひ定  
 めがたしとなりかの北の方は紫の姉君にておはせば  
 さはのたまふならんも  
 もとむなれど 玉かづらを  
 わづらはしかるや 有がうへにまたむかへんは  
 さもあべい事なれば 理りとおもへば  
 さまぐになん 源の心の中  
 かうざまの事は かく様の事は  
 おやなどにも 縁定る一筋などを父にはいひがたき物  
 なれどなり  
 さばかりの御よはひにも 恥てのみ有べき齡ならぬな  
 り  
 わい給はざらん 辨  
 まろをむかしざまに 即なくなりし御母に准てなり

は、君と 夕がほ  
 あかざらん事は 満すおぼさん  
 心ぐるしく 源の  
 いとまめやかにて 實々しく  
 くるしくて 猶わかしくしうもたしてのみ有も餘りし  
 とおもひ直して少申給ふをなり  
 何ごともおもひ去り侍らざりける 幼きよりめのとの  
 手にありて親をば總て見給はねば何事を親にいひい  
 はぬなどの事もよろづのこゝろづかひもえおもひわ  
 かすとのたふ故にげにさも有べしと源のたまふ  
 なり  
 世のたとひの後の親を こは死たるおやをおもは後  
 の親につかへよなど様の俗の諺有しにや  
 心ざしのほども 源の下の心をほのかに聞し給ふなり  
 けしきあることばは 右にいふ下の心など  
 みしらぬさま 玉の  
 すゝろにうちなげかれて 覺えず歎息し給ふなり  
 わたり給ふ 殿に歸  
 御前ちかき 西對の  
 ませのうちに 我家に心ふかめて生し立しかひもなく

こと人の物とせんが口をしきとなりおのがよゝとは  
 いせ物語におのが世々になりにつければうとくぞ成に  
 けるといふが如く夫に住て世をふるをいふこゝは後  
 撰に「なびくかた有けるものをなよ竹の世にへぬも  
 のとおもひける哉「ふえ竹のもと古根はかはると  
 もおのがまゝにはならずもあらなんてふ二者を以て  
 詞も歌もいへるか  
 おのがよゝにや 餘所によすが定め給はんことよとな  
 り  
 思へばうらめし 今ぞほころび給へるを猶女は見しら  
 ぬさまか  
 むざりいでて 女君いでこゝはいふべきものとおもふ  
 よりむざり出しさまなり禮有など云説は事たらず  
 いまさらには 源は人の物とせんがうらめしかるべきと  
 あらはしその給ふを女君は去らぬ顔にて實の父君へ  
 わかれんの御心と聞なせし様にとりなして今さらには  
 生はじめし方を尋んやは中々によからぬ事や侍らん  
 と去ばらくことよくいひ給ふなり  
 いとあはれと 前におふなく教給ふをよくうけて右  
 の歌も詞も聞ゆれば玉の下のこゝろは源のしり給は

であはれとおぼすと云ならん下に源のいとらうた  
 しと思ひてと有をあはせ見るべきなり  
 此おとりの御心ばへの 女君さまととおぼしわづら  
 ふさまなり  
 おやと 實の  
 むかしものがたり 或記に住吉ものがたりなどにも親  
 にもうとくなりしこと有と侍り又或人住吉物語の今  
 の本には小一條院の晩のかねの聲こそ聞ゆなれとい  
 ふうたを用ゐたれば源氏ものがたりより後のものな  
 りもし昔のは失て所々残れるを後に書くはへたるに  
 やといへるはさる事なり此住よしの今本をみるにい  
 とつたなく後の人の詞ぞ多き中に古きさまも交れり  
 考べし  
 いとつゝましく 父の方へ去らせんも  
 心と去られ されど又おのづから  
 おぼす おぼしなげく意なるべし  
 とのは 源  
 うへにも 紫  
 聞給ふ 申とは上へいふ事なりこゝは聞となだらかに  
 書しを申に誤れり仍て改つ

あやしう 源の玉のことを  
 はるけ所なくぞ 夕顔は餘りにおほどかにわかび過て  
 見るに心ぐるしかりしなり  
 此君は 玉  
 けちかき 愛敬  
 うしろめたからず まめにてはたおろかならず  
 たいにしも 紫は源の  
 物の心えつべく 或人いふ物のありさまもみ去りぬべ  
 くと源の宣ふをうけてさる人つけては源のうしろめ  
 たき心を去らでうちたのみ給ふがいとほしきとなり  
 などのもしげなく 紫の下のこゝろは源の見去らぬ  
 がほにのたまふなり  
 いでや我にても 心をおこす詞にて萬葉に乞と書 或  
 説源の君のむかし我をも娘のやうに生し立たれど又  
 さもあらざりしをおもひ出らるゝとのたまふなり  
 今考に右は此意なり又といふより下は昔さまの  
 好ありきの事をのたまふなり  
 又しのびがたう 堪がたうなり  
 あな心どと 源の紫の心のさときをおぼす 萬葉に多  
 き詞なり

うたても 餘りしうなり  
いと見ぬらすも もの心得つべき玉かづらなればわが  
好ごころなどあらばみゑるべしさるかたのなきから  
にこそうらなく親さまにはたのめとなり  
わづらはしければ 紫の詞を  
いかゞはあべからん いかにせんと  
あめのうちふりたる 四月  
おまへのわかかへでかしはぎ 入源常におはするかたな  
るべし  
和して又きよし 文集に四月天氣和且清、綠槐陰合沙  
堤平  
まづこの姫君の御さまのにはひ 艶  
てならひ 玉の  
なごやか 柔和  
ふとむかし 細夕顔上に似たり  
おぼえ給はずとおもひしを 玉かづらを初て見しほど  
は母君には似給はざりけりと源はおもひしをとなり  
中將のさらに 夕霧  
むかしざま 葵に似給ぬなり  
まさぐりて 手して

源  
たち花のかをりし袖に 古今に「五月まつ花橘の香を  
かげばむかしの人の袖の香ぞするてふ如く此君のさ  
まのむかし人覺ゆるによそへておもへば此君は即夕  
顔上の同じ身と思ふとなりみは橘の實をそへたりさ  
て昔人とおもふにわりなき心のせちに成行はしをよ  
み給ふなり  
玉かづらの夕顔に似かよひたるを橘を昔の袖の香に  
たとふるに比するなりかはれる身とおぼえぬとは  
玉の事なり母にかはらぬとなり  
よとゝもの 夕貌のことを  
ならひ給はざりつるを いまだかくまでけちかき事に  
はあひ給はねば  
いとうたて 餘りにこと様に  
玉の香を むかしの人の袖の香にわれをよそへ給へば  
我身さへ昔人のごとく命失ふべき心ちするとなり餘  
りのうたてさに生たる心ちもせぬこゝろより出たる  
歌なり さて身さへは萬葉に「橘はみさへ花さへそ  
の葉さへ枝に霜ふれどいやとこはの木と云をとれり  
中々なる 源のちかくて見給ふにつけて  
けふは え忍びがたくなりて

いとよくもてかくして 我はふかく隠して人に見とが  
められぬ様にせんとする心ぞよそこにもそのけしき  
なくて下に相思ひ給へとなり  
あさくも思ひ聞え もとより君にあさからぬ我こゝろ  
ざしの上にいまよりは又おもひそへ奉るべければ今  
までの人々よりもなほふかくおもはんといひすかし  
給ふなり  
このおとづれきこゆる 宮大將なり  
いとかうふかき 細源自のたまふ  
うしろめたく 我如く思ふ人はあらじからに人にゆづ  
りまゐらせてはおほつかなし故にわが逢まゐらせん  
とおもふなり此意を評してさがしらなる親心なりと  
記者の語を加へたり  
雨はやみて風の竹になるほど 文集風生竹夜窓間臥、  
月照松時臺上行こは右の和且清てふ句の末なりさ  
れどこのたけになるよは竹に鳴る夜なり生の意には  
あらず  
人々は 玉かづらの方の人々  
かしこまり はかりて  
ことにいでたまへる 源のなり

なつかしきほどなる うへによそほひ給ふみぞはかま  
などをなつかしきほどの云々といふか下の單のみは  
なつかしからぬ衣なればなりまぎらはし云々とは衣  
などぬぎ給ふけしきもおとなびも侍ふ人の聞とがめ  
ぬ様によくまなし給ふとなり  
すべしたまひて 此語空蟬巻にいへり 紀に垂をすべ  
しと訓たりこゝはみそをぬぎ去を云  
いと心うく 女君  
めづらかに 餘り有まじき事なれば  
まことの親のあたり 弄上には父おとゝにまられん事を  
少し思ひのどむるになりしが今となりてくるしさに  
立かへりおもひ入給ふなり  
こぼれ出つゝ 涙  
もてはなれ知らぬ人だに おもひがけす知らぬ人にし  
もなるゝは世の中のならひなるをかく年月にむつま  
じき間なれば云々となり  
これよりあながちなる 此度のみぞとなり  
おほろけに 土佐日記におほろけの願といふはよう  
やうの願ひてふこゝろなりこゝもようゝに忍び餘  
りての事ぞとなり

ましてかやうなるけはひ かくともねする様はなり  
たゞむかしの心ちして ひとへに夕がほとふしたるこ  
こちなり

ゆくりかに 上にも有詞にて紀に不意をゆくりなくと  
よめるに同じく聞ゆさればなくの語を畧きてはたら  
はねど此ほどはさも轉じ來て只ゆくりかと云てゆく  
りなくの意とするにや

思ひうとみ 源

よその人はかうはれなくしくは 大かたの人はかくま  
で思ひ入事のなき物ぞといひなぐさめ給へり  
そこひあらぬ 「そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき  
瀬にこそあだ波はたててふ意にてかく深く思ふから  
は人のしるべくはまなきじとなり

人のとがむべき 源もつゝみ給ふべしとのたまふなり  
たゞむかし 此後はかく近づく事はせで只にむかし人  
戀しさの和さめのみの物がたりせんに心をひとしく  
思ひかはしていらへま給へとなり

さばかりには かく深くうとみなどはま給ふまじき心  
と見しをなり かく深くうとみなどはま給ふまじき心  
よにかまへり餘りに思ひ屈し  
ゆめけしきなくをとて

て人にけどられ給ふなとなりゆめは萬葉に勤、努、  
力、謹などの字を書たる意なり  
女君も 玉かづらの

これよりけちかき 上に源のこれよりあながちなる心  
はよも見せ奉らじ云々とのたまへるを受たる心なり  
まかれば今よりけ近からん事はもとよりおもひもよ  
らぬ事にてたゞ今夜の事のおもひもかけざりしをな  
げき給ふなり

けしきもあしければ 氣色例ならぬなり  
との、御けしきの 源の下心をしらぬ女房達  
もてなし聞え給はじ 實父もかほどに心のつかぬ所な  
くはもてなし給はじとなり

兵部なども めのとの子  
いとゞおもはずに 玉は  
御心のありさま 源の  
又のあした 源の方より  
御ふみとくあり 速  
なやましがりて 玉かづら  
まろきかみの 文のさま

たぐひなかりし 文の詞

源うちとけて 人のよべのことうたがふべくおぼせば此

文見ん人たゞに戯なりしと思はせんとてかく詠給ふ  
ならん猶かくも有まじき事なるを實の親ならねばゆ  
るす意か又先は人には見すまじき物とての意にも有  
べしいせものがたりに「うらわかみねよげにみゆる  
わかくさを人のむすばんとをしぞおもふ  
さすがにおやがりたる をさなくこそと有をいふ成べ  
し

たゞ 此詞上につくと云説はいかにぞやこはうけたま  
はり云々を隔て、下ののみ有といふにかゝるなり  
きこえさせぬ 御歌の返しは  
さすがにすくよかなりと かどあるさまなり

うらみ所ある心ちし給ふ 夕がほとはことにてこれは  
かゝる所にかどあるを見給ひて中々に恨などいふ力  
有となり  
うたてある あやにくなり  
いろに出し給ひて 源

大田の松 花「戀わびぬおほたの松の大かたは色に出て  
やおはんとはいはまし此心は色にやいであましといふは  
あらまじごとにいへるを物語には出し給へばおもは

せたることなくといへりおもしろく書たり彼歌は六

帖にも朝綱集にも重之集にもあり  
或人いふ此歌は右の三本には見え兼盛集に「二葉  
より今はおほたの松のはのいく代か君を戀て經ぬら  
んてふはあり  
いとゞ所せき 玉  
かくてことの心しる人 玉かづらのおぼす  
すくなうて 右近などは知れる成べし

たづねたり 終に  
まめ／＼しき 父ながら見なれ給はねば  
もてはなれぬさまに 宮大將を似つかはしき様にのた  
まふを云

この岩もる中將も 柏木なり 上の歌の語をもていふ  
かたよりにほのきゝて かの内々の事などはまらでは  
めなどし給ふ事をのみひとへに傳へきゝてなり  
まことのすぢをばまらず 玉鬘と實は兄弟なるを知ら  
で源の御ゆるしをうれしく思ふとなり



源氏物語新釋

螿

卷の名は詞にはほたるをうすきかたにこの夕つかた  
いとおほくつゝみて歌には「聲はせで身をのみこが  
す螿こそいふよりまさるおもひなるらめてふによれ  
り源氏卅五の年の五月なり

今はおもくしき かく書るにいか様にも或説に  
攝政し給ふといふが如く同じ大臣にてもことなる御  
勢なるべしさてよろづの事は内大臣にゆづり給ひて  
御いとま有は本よりにて御心にたらはぬ事なく富も  
増り給へば御かたぐその外もあかぬことなく心落  
ゐて住給ふなり

たいの姫君 玉かづら  
かのげんが 大夫の監  
なすらふべき 源氏のうるさきは  
かゝるすぢにかけても 源の御娘とこそ人はおもひて  
心ひとつに 玉の  
さまこととうとましと 監などをうとむとはよろづに  
すぢことなるおもひなり

母君のおはせず は、君おはさば我にかくうるさき事  
はあらじとなり  
おととも 源氏

わらゝかに 萬葉八秋はぎのうれわらゝ葉におけるま  
ら露とよめるわゝら葉はみるのごとわゝけてなどい  
へるごとく萩のうら葉のなびきわゝけたるをいふこ  
ともさる詞より轉りてわゝけてさはやかなるさまに  
てかく物おぼせじまらぬげに見え給をいふなり笑ふ  
といふもわゝけひらく語なるを思ふべし即次の詞に  
そのよしみゆ

いたくまめだち 玉は  
五月雨になりぬる 信明集「神代よりいむといふなる  
五月雨のこなたに人を見るよしもがな盛明親王集  
「わびつゝもたのむ月日はあるものを五月雨にさへ  
なりにけるかなともよめればいにしへより五月雨の  
頃はむことりなどいむなるべし古きものにも出たる  
ことか考べし  
すこしけちかきほどをだに 宮の御文 相寢などいむ  
月なりとも 源氏兵部卿の文をなり  
との御らんにて

いとうたておぼえ 玉は  
人々もことにやんごとなく 玉の女房達なり 玉かづ  
らの御身になるべき人もなきとなり

はゞぎみの御おぢなりける宰相ばかりの 或注に夕顔  
の上の伯父は父三位中將の弟にて宰相ほどの人なり  
といへり然ればその宰相のきみは夕顔とはいとこな  
り

御かへりなど 玉の宣旨がきしたるなり  
めしいで 源の  
物などのたまふさま 源は人の艶なる好ごとの語はめ  
づらしきことゝて聞まくおぼす故に少しけちかゝら  
んをゆるすさまの御かへりごとをかゝせ給ふなるべ  
し

さうじみは 玉かづら  
すこし見いたたまふ 宮の御文を  
何かと思ふにはあらず 兵部卿のよしあしきを思ひて  
のこゝろにはあらずそのかたにも定りなば此うさを  
のがれんものとなりかくまでもおぼすをまかした  
がらにざれたりとはいふなり

御けしき 源の

源氏物語新釋 螿

源 殿はあいなく 愛無

おのれこゝろげさうし 或人云これは玉かづらはさま  
なきを源の兵部卿のものゝたまふをゆかしがりて待  
給ふをおのれげさうといふなり  
兵部卿は  
御しとね 兵部卿の御まし  
ちかきほどなり 玉鬘のおましと  
いといたう 源の用意

つくろひおはするさま 玉かづらを源  
おやにはあらで こはかのうるさき御心あればいふさ  
てさる御心ながらかくつくろひなどしたて給ふをあ  
はれげに人はみるとなり  
さすがに 心まらぬ人の見るをいふ  
人の御いらへ 宮への御いらへ

はづかしくて 源のきゝておはせば  
うもたれりと 源のゝたまふ  
ひきつみ 或人いふ袖を引つ身を擽つなどしてさなせ  
そと心づくるなりと  
くもらはしきに をりからのけしき

御句ひの 源の

五千五十三

かねておぼし 兵部卿  
 ひたぶるにすぎくしくはあらで まめなるかたもあ  
 らで源のおぼせしとはことなり  
 おとゞ 源  
 宰相の君の 宮の御せうそこを  
 ゐざりいり 玉かづらのかたへ  
 つげて 宰相に源の詞を傳へさせ給ふなり  
 あつかはしき 餘りに物遠く引こめたる御もてなしぞ  
 といふ意なるををりから夏なればあつかはしき御も  
 てなしぞとのたまふなり  
 さまに去たがひ そのほどくにするぞよきとなり  
 わかひ給ふべき 若々しく去給ふ年齢にもあらずな  
 り  
 此宮だちをさへ 大かたの人のごとくに此宮だちをさ  
 へ人傳にとりなさんほど去らぬに似たりと教へ給  
 ふなり  
 御聲こそをしみ 直には宮へ詞をかはし給はずともと  
 なり  
 わりなくて 源のきこえ給ふは理りながら又宮を待う  
 けがましきは源のおぼさんこともおもへば萬づにわ

りなくてたち出んもいかとおぼす玉かづらの心を  
 こめたる詞也宮のかたへ心よせあることは前にみゆ  
 ことつけても その教へに也 或人いふ玉鬘出給はず  
 ば意見にことつけても源のはひも入給ぬべければむ  
 づかしくて几帳のもとまで出給ふなり  
 はひ入 源の  
 なにくれと 宮の御返事におもひわづらひ給ふなり  
 御いらへきこえ 玉はこたへん詞を思ひわび給ふなり  
 より給ひて 源の  
 あはせて 帷を揚るとひとしくなり  
 去そくを 紙燭  
 ほたるをうすきかたに 異にかたびらとあり若はかた  
 びらと有しをひらの字落しか  
 河伊勢物語にかのゐたる螢をとりて女車にいれたり  
 けるを車なりける人此螢のともす火にやみゆらん云  
 々 花うつば物がたりにうへいかで此内侍のかみ御  
 覽せんとおぼすになかたの朝臣うけ給りておほく  
 の螢をとらへて朝服の袖につゝみてもてまいりたる  
 にうへなほしの御袖にうつしとりてつゝみかくして  
 もて參り給ふて内侍のかみの侍ひ給ふ几帳の帷を打

かけて此螢をさしよせて内侍の姿を殘所なく見給ひ  
 し事あり今案に此物語は源氏の君の螢をおほくつゝ  
 みかくし給ふも玉鬘の君を兵部卿宮にみせ奉りてい  
 よく御心をまどはし給はんとし給へるなりうすき  
 かたとはただ直衣の袖のうすきかたといふこゝろに  
 やうすきかたを直衣の袖につゝめるかといふ説は理  
 りなし或人<sup>契神</sup>うすきかみにと有しをかたに誤りしなら  
 んといふはさも有べきかた<sup>〇</sup>とみとは誤りやすし又か  
 たびらのびらを書おとせしか  
 さりげなく 源の  
 けちえんに あらはなるなり  
 あさましくて 玉  
 おどろくしき 源のおぼすには螢を俄にさし入て  
 わがむすめと 源のむすめと宮のおぼすにつけてさこ  
 そ心ふかくのたまひ戀給ふなれかくよろづ具したる  
 かたちを見給はばいよ心まどはし給はんものとて  
 螢してほの見せんとはかり給ふとなり  
 おぼすばかりの 宮の  
 かくまで 宮の  
 えおしはかり 宮は

いとよくすき給ぬべき かく螢のかげにて宮ののぞき  
 て見給はば  
<sup>記者</sup>まことの 實の御女をば中々かくまでは去給はじ別様  
 なる御心ぞと評するなり  
 うたである 新萬に別様の字を書たり  
 ことかたより 源  
 わたり給ぬ 歸  
 さばかりと 遠からんと  
 うすもの、 夏の几帳  
 ひとま 一間  
 ひかりの 螢なり  
 かくしつ 人々ほたるをとりかくしたるならん  
 されどほのかなるひかりえんなることつまにも<sup>端</sup>  
 ほどなく取隠したるはかひなき様なれどもされど風  
 流なる事のはしとはなしぬべきものなりといふなり  
 ほのかなれど 兵部卿のみ給ふに 萬葉に鬘の字を  
 書たり  
 そびやかに 玉かづら  
 げにあのごと 源の案の如 源の推量にかなひたるを  
 いふ

心に玄みにけり 宮の

鳴聲も

音になきおもひにもゆるは苦しきの深きかぎりなりさるをほたるはたゞもゆるおもひのみながらそをだに人のけちたらんすれど消ぬなればかの二つをかねてくるしき我をおもひ知給ふとなりさて人のけつにはとは先に螢を取隠さんとせし時やうやくにしてとりまぎらはしたるをいふならん又いせもの語の螢の條の心も有か

かやうの御返しを 玉

ときばかり 速を功にてなり

聲はせて 後拾遺に「音はせて身をのみこがす螢こそ

鳴虫よりも哀なりけてふ意也をいふにまされるととりかへて宮の何かとのたまふよりいはいはぬ螢こそくるしさの増らめといふなり歌は宰相して聞え給ふなるべし

軒の玄づくも 催馬樂に「あづまやのまやのあまりの

雨そゞぎ我立ぬれぬその戸ひらかせてふを軒の半と

いひとりいたづらに外にのみ居あかささんがくるしき

にととりて書り

時鳥など ぬれく夜深くといひて時鳥など云々と云

は古今に「五月雨にものおもひをれば時鳥夜ふかく

鳴ていつち行らんでふ歌にて書るものなりさりと

時鳥など必鳴けんかすと書なしたるはめづらしくお

もしろし

御けはひ 宮の

おとりの 源

よべ 源の

かくさすがなる 下の御心は有ながらうはべさすがに

は女親などの様にとりつくるひ給ふを人はかたじけ

なしといへど女君の心べつにうれへ給ふとなり

親などに 内大臣

かやうなる 源に思はるればとなり

などいよにげなく 契証などかいとにげなくもあらんと

いふ意なり

人にぬありさまこそ 親はあれど親には玄られず今

の人は親と思へど親ならでかくにくき心のあれば世

の人にぬ我有様なりさればまことの筋をば人は玄

らで有まじき罪にやいひつたへられんとなり下に物

がたりぶみ共を見て我有さまの様なるはなかりけり

と見給ふとあり

いけみころし 活殺

御さま 源の

つやもいろも つやとは色の外にあらはるゝ光なり

こぼるばかり 下の御ぞなり

うすき御なほし 夏のひとへなる直衣なり

はかなくかさなる ことなるかまへなきをいふ

いづくにくはゝれるきよらにか ことなるなき色あひ

もきる人がらのきよらさをいふ

あやめもけふは 文目に菖蒲をそへたり

かをりなども 御衣の

おもふことなくは 玉かづら

宮より御ふみ 兵部卿

まろきうすやう 細あやめの根に便あり

みる程こそ かたりては見るばかりの興なきなり

けふさへやひく人もなき 人まねぬ沼の菖蒲はひかれ

もてはやすべきけふさへ引るゝことなきによせて宮

のおもひはなぐさむる人なければひとしれずけふさ

へや音になかれむ事よとなり泣れんでふ辭を或説に

は意得違ひつ

みがくれに 水隠なり 身をかぬ

さるはまことに 源の御心にもなり さるとは玄かあ

る時はてふことばなれば源の心にも人聞をおぼせば

實に我物にしてはゆかしげなきわざなりさはせじと

おぼすめれどわろきくせ有て中宮にも前よりさるさ

まをし給へり

おといは 源氏

いとうるはしく 源を殿に正しき心とおぼさぬなり

ことにふれつゝ 薄雲の巻にもけしきあらはし給ふと

あり

おりたち 入立といふがごとし

このきみは 玉鬘なり

ありがたく 源のさすがに世人とはことなるをいふ

さすがなる 玄かしながらに親めきたるとなり

五日にはうまばのおとゞ 五月五日也 花馬場のおと

どは長の町花散里のましますかたなり

出給ひける 源

わたり給へり 玉かつらのかたへ

いかにぞや 夜べの事

ならし 近く

わづらはしき おしたちわぎ

ためしにも 其之「みがくれて生る五月のあやめ草ながきためしに人は引なんてふ歌をもて本もよみたれば即詞にもおなじ末をもて書たり

むすびつけ 御文なるべし

そゝのかし 源の

これかれも 人々も

なほと 猶は御かへりせんやといふにまたし給ふべし

といふ意なり

御心にも 既に御心よせありしをふくみて書り

あらはれて 此は先古今集の戀の初に「郭公鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉てふはその次に音にのみさくのしら露といふを擧たるに依にかつ

く聞てまた定かにもあらぬを我はかくも戀ることよと古今にては云なり今は此歌の心詞にもとづきて我をさだかにも知給はぬに音になき戀ふるとのたまふはあやめもわかぬことなれば淺くかりそめぐとなりけり本より淺き御心のほどあらはなりとよめりわかしくとは事のあやめもわかすをさなきことなりと云なり

ながれけるねの 上へかへるのなり

わかしく 右のあやめもわかぬ戀し給がわかしくすたまなど 三代實錄に續命縷と有も同く藥玉なり橘の實時の花菖蒲などを色々の糸にてぬきたれて身におひ帳などにかくるなり萬葉に五月五日の藥玉の事を橘を玉にぬく日とよめり

所々より 玉かつらへまゐらす

おほしまづみつる 筑紫などに

とのは 源

東の御かた 花散里

中將の 夕霧

このみこたちの 兵部卿などの親王たち

うまばのおとやはこなたのらうより 花散里の廊

左のつかさにとよしある官人 夕霧は左中將なり官

人は將監將曹府生を云隨身共に可然者あるなり

けふのつかさ 五月五日六日は天皇武德殿に幸ありて

左右近衛左右兵衛の人の騎射競馬ありこゝは夕霧左

近中將なれば左近づかさの方の中少將及官人など内

裏の事はて、後引つれて來給ふべしとなり手つがひ

は式を見るに射手競馬の結番を記して奉るとあり勝

負をきそへばつがひをたつるなり手は射手などいふ

手の如く添たるほどの事ともいふべけれど師の説に

は競馬は始は馬を立並て二人手をととりあひて走り出

すものと侍りし是によらば手をととりて二人づつ番ふ

意なり下の手まとはしといふも聞ゆべし

せうくの 一通りのと云なり

殿上人に 容儀など

たいの御かた 玉かづら

すそこの几帳 かたびらのうへは煮くすそを紺に

ても紫にてもこく染たる心なり

玄もづかへ 下仕

さうぶがさねのあこめ 雅亮裝束抄に若さうぶの様表

青うら白しと見ゆ河海是によられしならんたゞ菖蒲

てふはうらの所虫ばめり花鳥に紅梅と有はおほづか

なし

ふたある 二藍

にしのだいの 玉鬘

このましくなれたる 是も玉かづらの方

あふちのすそこの裳 花あふちは表うすいろうら青なり

すそごはうへしろくすそを紫に染たるなるべし

けふのよそひどもなり 或人云あやめがさねあふちの

すそごなどすべて五月五日の裝束なり

こなたのは 花ちる里

こきひとへがさね 花濃うちぎをかさねたる衣なり

なでしこの若葉の色 花なでしこは表すはうら青し花

にかたどる色なり若葉のいろとは葉にかたどれる色

なればうすもえぎなり

出給ひて 源

おほやけごには 花公にては其日奉仕中少將の定有を

こゝへはその日の數の外なるも多く参り給ふをいふ

なるべし又或説に公にては官人などのみ騎射有をこ

こにては中少將も射るといふなりと侍るは理りある

様なれどこゝの文に少しかなはずや

すけたち 近衛の中少將は近衛にてのすけなり

今めかし 騎射に今めかしといふべからずや

身をなげたる 其とに打入りたるさまなり弓射るにも

競馬にもする手わざのあるを云 近衛の舍人の騎射

の事式にみゆさて手まどはしてふを騎射のこととい

ふ説あれど理きこえがたし上にいふが如く競馬に手

を相まどはして走出るをいふなるべく覺ゆ且競馬に

は襦袢などをきると或説にいへり或西宮抄などには  
委しからねど式には小儀にはたゞ黄袍と見ゆされど  
此説は古き繪に襦袢などきたる見ゆるによるなるべ  
し

みなみのまぢも 馬場をば北より南へとほしたれば紫  
の上のおはします南の町の東對にもそのかたの若人  
どもはみはべるなり

だきうらくらくそん 落躰を一本に納蘇利と有も同じ  
樂なれば何れにもいふべし 打毬樂は左方の一つの  
樂にて杖もて毬を打ありさまして舞ひ又騎射のはて  
後雜戯として種々のことする中に唐人の打毬の状を  
なすは樂とは別なりされど其雜戯の打毬の時も伶人  
此樂をまらぶるといへり

らんざう 亂聲  
とねりども 近衛舍人

おとやは 源  
こなたに 花ちるのかた

兵部卿宮の 源の詞  
よしといへどなほこそあれ 此なほは直人ナホなほざりな  
どいふなほにて世によしといへる人もなみくの事

にこそあれ此宮はすぐれてよしとのたまふ意なり形  
など勝れぬどといひてその外の用意かたにくにつけ  
てのたまふ物からその勝れぬとあるも大かたのよし  
といふよりはよきとしらせたり

御おとうとにこそ 花ちる詞 宮は源よりは弟にてま  
しませどとしたけてみゆとのたまふのみ故にすがた  
のうるはしくねび増りたるとは次にいへり

年頃かくをり過ぎす 兵部卿は六條院へ物のをりく  
には渡給ふとはきけどもとなり  
昔のうちわたりにて むかし花散里は御姉女御につき  
て大内におはせしなり

そちのみこ 兵部卿の御弟帥の宮  
けはひおとりて 兵部卿より

おほ君のけしき 帥の宮は劣りて親王めかす二世の王  
のごとしと女君は心なほきまゝにのたまふを人の上  
をば見知てのたまふことよとふと心ゆかず源はおほ  
せどさはのたまはでゑみ和らげておはすとなりさて  
源の用意をば次にかかり  
ふと見しり 源心なり 花ちるのふと見て人々のさま  
を能まら給ふとなり

なほあるをば 上の直こそあれと同じくなみく成を

ば

なんつけ 難付  
右大將など

こは大かたなる人をばよしあしをのたま  
はぬ御心をいふよりかへりて髭黒の形わろき事を心  
におぼすをいふさてかくおぼすも玉かづらに逢せま  
いらせんにやとの心よりなれど又むこにて見んはこ  
とたらはぬ心ちせんやなどさまくおぼしめぐらす  
なりまかしながらこゝに初めてさる心を書出したたり  
なにはかりかはある 又帥の宮のわろしといへど  
いまはたゞ 是よりは花ちると源の中をいふ

おまし 夜の  
ことく 別々

殿は 源  
くるしがり給 女君の御心とりて宜ふ成べし

そばみ聞え 恨などもま給はぬなり  
このまぢのおぼえ ころに馬場のあるめいぼくなりと

花ちるのおぼすなり

そのこまも 此は拾遺に躬恒「生れども駒もすさめぬ  
あやめ草かりにも人のこぬがわびしき惠慶集に五日

にあやめふける所を男こまをひかへて見る「若駒の  
常はすさめぬあやめ草引ならべてもけふこそは見れ  
此二首をとりて常にはすさめられぬをけふのみは人  
に引すさめられたるにやあらんとなり少しかねての  
わびしさをものたまへど又けふの悦をものべ給ふは  
くねくしからぬさまなり  
すさめぬ 本は進まぬより出たる語なり  
なにはかりの 此歌は中々によし此記者の歌の心得こ  
そわろかれ

にほどり 枕詞と云は誤也 萬葉ににほどりのふたり  
ならびるとよめる二首あり其語をもて且けふの駒く  
らべも池邊にての事なれば鴉鳥とこまと影をならぶ  
るにたとへて花散とわれとの夫婦の中に分る心のけ  
ぢめはいつかあらんぞといふをけふなれば菖蒲をも  
引故にあやめを詞としたるなり

わかごまは 競馬騎射などには老馬は用なしよりて若  
駒とよめる事右にも擧たり然るを若蔭と意得し説は  
誤なりさては一首もきこえず

あひたちなき 間隔なきてふ意也 此前後の文どもに  
依にも互の御心に隔もおき給はず心やすきさまをい

へり俗に物を頻にする様の事にあひたて無てふも間へだて無意なり

あさ夕の 源 心やすくこそあれと のたまふはと意得べし  
のどやかに 花ちる  
まづまりて 源も

ゆかをばゆづり 帳臺の濱床なり女君の帳臺には源を  
ねさせまつりてみづからはさちやうして物へだて、  
ね給ふなり  
けちかくなど 花ちるの源へ夫婦のかたらひなどはと  
なり

あながちにも 源氏もまひてはのたまはぬなり  
なが雨 五月雨

いたくして 痛くふりてなり  
爰ものがたりなどの 繪、ものがたりぶみ  
さやうのことをも 繪などかく事なり

ひめ君の 明石の姫君  
たいには 玉鬘  
めづらしく 前にもみゆ  
かきよみ 繪、物語

つきなからぬ 繪など書かたに  
さまざまに 物語にいへる人

まことにや偽にや 物語ぶみは皆いつはりの作り事な  
れど女の詞にきといふべからねばさいひて且そはと  
もあれさるさまざまなる中にもわがごとくなるはな  
しとなり

わがありさまの 玉かづらの心なり  
住吉のひめぎみ 花住吉の物がたりに中納言の女三人あ  
り中は一は宮腹にてみめも心もすぐれたりけるを宮  
仕させんとせしにまゝ母の父に讒しければ事たがひ  
て後内大臣の子宰相右兵衛督なる人にあはせんとせ  
しをも又まゝ母はかりて主計頭とて七十許なるおき  
なのめたれおそろしげなるにぬすませんとす姫君  
きゝてにげて住吉なる所に住みけり此故に住吉の姫  
君といふなり

さしあたりけん 今考にその物語の始は右の如くなれ  
どこゝにさしあたりたる云々と云はその姫君の終に  
よろしうなり給ひておはする時をいひ又今の世の覺  
えもと云は今かく物語にあるをみる人のおもひよせ  
もよろしといふなりさてかの主計頭が事はその始め

の様をいひかへりて大夫の監が事におもひあつるな

かぞへのかみ 住吉物語に有  
ほとくしかりけん 既にあやうかりしをいふ  
かのげんが つくしにて大夫の監

とのは 源氏 ものがたり、繪  
かゝる物どもの 何れの御かたにても  
御めにはなれねば 女心のなかに  
こゝらのなかに 女のおもひ

五月雨髪 繪かく事に心を入て髪などみだれてある  
をも覚えぬさまを「子規おちかへりなけうなひこが  
うちたれがみの五月雨のころてふ歌の詞にて書たり  
またかゝる されど理りなりとおぼすよしなり  
さてこのいつはりどもの 是より繪物がたりの上  
をいろくゝに源の宣ふなり

げにさも 一つには  
いたづらに心うごき 古今序に繪に書ける女を見てい  
たづらに心をうごかすがごととしてふこゝろなり  
かた心つく 契説はかなしごとゝはおもへどもさる様の繪

源氏物語新釋 卷

をみるより片心にはおもひよるなり或説に方心の意  
といへど方心てふ詞は有べくもなし片心は常のこと  
なり

またいとあるまじき 有まじき事とはおもへども書な  
しのことくしきにおどろきてふとさも有ことかと  
おもはるゝもありといふを略きて書り  
めおどろきて こゝは詞を略て句なり 人のまづかに  
は下へつくなり

まづかにまたきくたびぞ 静に聞時は悪くきはしく  
有事もふと見て興となるもあり又今にくらべてげに  
顯はにも有事よとおもひ合せらるゝもあるとなりさ  
て此顯はに今に當るといふぞ古物がたりの上の様に  
て即此物語のむねなり此作者いと心して書るをこゝ  
につめていひて作りごとの様にて實有ことなりよ  
しそらごとにてふふかくおもはば今の用をなすべき  
理りをとくなり

をさなき人の 明石姫君  
ときくよまするを 物がたり  
げに 此已下玉かづらの詞  
いつはりなれたる人や 源は物よくいひ偽りをもまな

れたる人のかく作り事をばすると覺ゆさはあらずや  
と問給ふを女君はうちかへしてまか偽りと見る人こ  
そ偽りなれたる人の心なれど人の上の様にこたへて  
下には源のいつはりの親にて懸想心有をにくみたる  
なり

すいりを 繪かき給ふ硯

こちなくも 源 無骨

神代より 物がたりを女君の信じ給ふをあざけりわら  
ひ給ふなり 日本紀は正史なりそれが中に神代紀を  
昔より此國の教のかたにときなすかど有つらんより  
てみちくしくとはのたまへり

これらにこそ 繪物がたりをいふなり

その人のうへとて 上にいふ如く當時の人のうへを專  
らといへど有のまゝにはざるをまらせたるなり

よきもあしきも 慰めてのたまふなり

人にまがはんとては その人のさまにまがはたがひてあ  
しきをばあしきといはんとてはあしきかたのことを  
とり集ていふとなり上のよきにはいよよきことを  
とり添ていふといふ對なり皆此文の中の人々のこと  
なり

此よのほかの みな世にある事なりと云心なり  
人のみかどのざえつくりし 異朝の人々の才を用ゐて  
作れる書ども各作りなしのことなるといふに辭少し  
たらはぬは落ちたる字あるにや又ざえはさへにて辭  
とする説もあれどさても心ゆかぬ所あり暫才といふ  
かたに依べし

おなじやまとの國のこと こはたゞ物語のうへにて古  
今の人の書様にさまざまあるをいひてさて此文は古  
への竹とりいせ物がたりなどの如くそらごとのみに  
あらぬをいふなり或説に日本紀と物語とを對へてい  
へりとするはわろし

ひたぶるに 下に此ふみのことをふくめり

いとうるはしき 善

方等經の中に 方等經は即ち方便を説きたる經なり

其後に實を説給へる經などにむかへて佛の先衆生を  
ひとへに歸依せしめて後に實を明し給ふ意を知て終  
に方便眞實善惡不二のむねをさと得ぬ人はかの前  
後の説教の違ふに似たるを疑ふべしさとる時はほん  
なうとぼたいのわかちもなきがごとくなれば此物が  
たりの人の善惡も終にいとことなる事なしと見る時

はかゝる偽ごとも空しからぬ事となりかく解  
て後にはたことつけていひより給ふは即ばんなうぼ  
たい善惡不二のことわりもておもてつよくうるさき  
ことをのたまふ便りとせしなるべしさも見ずは此所  
のさまついきなかるべし

物語を ふみをなり

まろ 源

じほうなるまれの 實法に愚癡なるものとわざとか

くはのたまふなり

姫君も 昔物がたりの

御ころの 玉かづら

そらおぼめき 源の懸想をまらぬ顔するなり

いざたぐひなき物語にして 源の實法なると玉鬘のつ

れなきと世にたぐひなき物語にして後代にのこさん

となり

かほをひきいれて 玉

さらすとも 文にかゝすとも

源 めづらかにや 源の我を

げにこそまたなき 女君のつれなきもめづらかにて

ふけう 不孝

かほもまたげ 玉のなり

からうじて 玉かづら

ふるきあとを 是は物語どもをいふ

心はづかしければ 源

いかなるべき 此末のほどを記者の思ふなり

姫君の 明石の

こまの物語 枕草紙にも物語の名に出せり

いとよく 源詞

ちひさき女君の そのものがたりに

むかしのありさま 紫のみづから

女君は 紫

かゝるわらはどち 源詞 右の物語の姫君まだちひさ

きほどより男のわらは君のかはしたる事有べしそれ

をうけてわれは久しくさるべきほどまで紫を生した

てたりし心ながさをのたまふならん

げにたぐひおほからぬこと 上の詞をうけてげにめづ

らかなる好ごとどもを多くし給ひつらんと記者のい

ふなり

明石 姫君のおまへにて 源のたまふ

このよなれたる 右のわらはどちのされたるなど

みそかごころ 物語のむすめのもの、 辭なり

をかしとはは 娘の心に

こよなしと 實の御むすめをば御心ざしのことなるを

玉かづらの

うへ心あさげなる人まね 紫詞 紫の昔物語の繪の上

にて中に人まねに物せし様成事を先はのたまへど

も右の姫君の物語によりて心のこされん事を源の

たまふをうけてさる人まねは物がたりにて見るだに

かたはらいたしまして姫君などはとおぼせどもさり

とて又餘りになさけなくすよかならんは女めかず

とのたまふは物がたりも捨べからずなむまじきを

おぼすさまなり

うつぼのふちはらのきみ 花うつぼ物がたりに藤原の君

とて一世の源氏にて右大將まさよりと云人の子の九

にあたりてあて宮と申みめ心すぐれ給へりければ時

の有職聞つたへて心をつくすに心づよくて東宮へま

わりぬればかの心つくしたる人々或は出家し又死家

をやきなどしてうらみけれど聞入ざりしをおもりか

にてはかくしき人にてあやまりなしといへり云々

すくよかにいひ出たるまわざも 花いづれにもなさけな

くもてなして障なきことの文ども、返し給はず源

宰相にたまさかに返し給ふとても「昔おふる岩に

千世ふる命をば黄なる泉の水ぞ煮るらん」まぬとい

はばためしにもせん物をのみおもふ命は君がまに

まによめる歌此體のみなり

ひとやう 偏なるをいふ

うつゝの人も 今願に有

よき程にかまへぬや 句 空蟬巻より始て此事多みゆ

よしなからぬ親の 故よしなき親のそだてたるは本よ

りにて少しもよしある人のむすめのおくれたる事あ

るをいふ

なにわざをして 箒木にもあり

げにさいへど まことにさる親のけはひにてよろしき

娘ぞとみゆる親だにおもたしきと紫の姫君そだて

給はん様を源ののたまふなり

ことばのかぎり めのとや媒など

ほめおきたるに 此意も箒木にあり

たゞこの姫君 明石

まゝはゝの おちくば住吉などの物語ありその外にも

昔は有けんさて心みえに云々とは何心もなくておは

する姫君にわざとまゝ母てふもの、心きたなさを見

えれがましくて心うときわざなればさる事をばのぞ

きて總て見給ひてよかるべき筋なるをか、せてまゐ

らせ給ふなりこは紫のまゝしき心はなきを態とあな

たより心うとき事も出こんかとしてなり此心見えにて

ふは歌にもよみて心見えれてふ語なり人わらはれご

とをなすを人わらへごと、いふ類の辭なり或説ども

は誤れり

心みえに 此まゝ物語をみて紫にさとれがましき心見

えなるが人わらければさるをばえらみて除き給ふな

り

中將の君を 夕霧

こなたには 紫のかた

ひめぎみの 明石

さしはなち 異母兄弟なれば

わか世のほどはともかくても 源のおはする間はと

てもかくてもあしからねど末となりては夕霧も姫君

もかたみにまたくおはさんこそよるづよかるべし

とおぼして今よりかくはむつませ給ひ入内などの時

の御うしろみともおぼせば今より夕におぼしゆづり

給ふさまなり

とりわきては 夕の御うしろみの淺からじと

みなみおもての 姫君の御方

ゆるし給へり 夕を

だいはん所の女房の中は 是は姫君の御方の女房の侍

をいふべし紫のかたはもとよりなり

あまたおはせぬ 御兄弟とても多からねば殊に夕霧を

姫君の御かたにてかしづき給ふとなり

かしづき 夕を

おほかたの 夕霧

うしろやすく 源

またいはけたる 姫君

かの人のもろともに 夕霧は雲の鷹と

ひゝなのとの、 此姫君の

をりく、にうちまはたれ それにつけ雲を思ひ出て

さも有ぬべき 是より夕の心ざまをいふなり

あまたあれど かのをとめの巻に有し惟光が女など

たのみかくべくもまなさず 女のかたよりのみかく

べきさまには夕のし給はぬなり



<p>心とまりぬべき 夕の なほざりごとに たゞなりにして深からぬなり みどりの袖を 六位過せといひしを やんごとなきふしには 雲居の雁をいふ 源氏の御子 にては皇女をも得給ふべけれどこはかの六位過せと いひしより後また戀のなりがたきにつけてやんごと なきふしにとはかき且右にいへる心とまりぬべきな どは昔やんごとなからぬすぢなるに對へてもいへる なり たふるゝかたに 或説折たる方といふはこゝの詞にあ たらす是は立たる木などの綱付て引かたに倒るゝに たとへたるなるべし つらしとおもひし をとめの巻に内大臣殿をつらくお もひ給へること共あり いかで人にもことわらせ さるつらかりしかへしにい かで内大臣殿のかたより手をおろしいはせんよしも がなとおもひこめしを今もわすれずしてあながちに つれなくつくりてあるなり さうじみ 雲の鴈 いられ思へらす 心いられせぬなり</p>	<p>せうとの君達 柏木など なまねたしなど 夕霧のもてなしを たいの姫君 玉かづらなり 右の中將 柏木 いひよるたよりも みる子など この君をぞ 柏木の夕霧をたのむなり 人のうへにては 雲の鴈のことを知ながら柏木などの ふかくとりもち給はぬがもどかしう覺ゆるにあたり て夕ののたまふなり むかしのちゝおとゞだちの 源と内大臣とは夕と柏と の父ちだなればいふ致仕と意得しはわろし おほえ 母から 人がらに その人がら 女はあまたも 今は二人見ゆ 女御もかく 弘徽殿なり おぼしゝことの 立后 姫君も 雲の鴈 ことたがふ をとめの巻にそのこゝろあり いと口をしと 内大臣 かのなでしこを 玉かづらのこと</p>
---	--

ものゝをりにも 雨夜の物がたり  
おやの心に 夕がほの上  
名のりする 名をつくるをなのりといひて萬葉などに  
は名告と書り告をのるといふは古語なり名乗と書は  
甚しき俗のわざなり  
心のすさみに わかき時の  
是はいとしか 夕顔のこと  
物うんじ 倦  
すくなかりける 女子  
中頃などは 今源の玉かづらを尋ねとりてかしづき給  
へるを聞て更にうらやましくなり給ふなり  
我おもほすにしも 女御姫君の  
夢み給ひて 内大臣  
御心にも去られ給はぬ こはまたく玉かづらの事のう  
らあひたるなりさて聞しめし書る事やといふは藤袴  
の巻にてたいめし給ふべきをいふ女この人の子とな  
るはをさくゝなしとは人の妻と成は常にて子となる  
はまれなる故にうたがひ給ふなり  
女御の人の子に成ことは 人のめと成は常にて子と成  
はむかしなき筋なり

源氏物語新釋

常夏

卷の名は「なでしこのとこなつかしき色をみばもと  
の垣根を人やたづねてふをもてなり源氏卅五歳の  
夏なり

いとあつき日 うつば祭使に大將殿釣殿に出給ふて君  
達など涼み給ひ細おろしなどして鯉鮒とらせ給ふこ  
とあり

中將の 夕霧なり

にし川より奉れる鮎 桂川は京の西にあれば西川とい

ふ西宮抄禁川堤川左衛門府檢知葛野川は右衛門府檢

知已上夏供鮎云々この堤川は東河葛野川は桂川なり

ちかき川の 賀茂川をいふ

いしふしやうの物 鮎音夷和名 伊師布之性伏沈在石間者也 亭

「子院御集云いしふしやうのもの御まへにててうじて

まゐらすうつば國ゆづり中籠にいしふしこふないれ

させあらまきなどそへさせておとゞ御まへに人々め

しててうせさせ給ふてけうしてまゐる云々

例の大殿の君だち 少將侍従二人なりけふ柏木は參ら

ぬ事下の詞にてまられたり

さうくしく 源

ひみづ 和名抄に氷和名水寒凍結也膳夫經云立秋後不

得領今案以水一入漿也と有ものなるべし

すいはん 此は今昔物語の三條中納言の水飯を食給ふ

をみるに飯を水に入れて匙して鏡にみながら盛てくふ

なり冬は湯漬にし夏は水漬にするのみ右の水水は此

水飯の料ならん

さうどきつゝくふ 人あまたにて物がたりなどしてく

ふ故にかくいへり

水のうへむとくなる いと暑き日は水氣もあたゝかに

て水邊の納涼もかひなげなるものなり

あそびなど 管絃

なほしひもとかぬほどに 萬葉に打くつろぎてあそぶ

を紐解遊てとよめる事多しこゝを委しくはゞ石帯

入紐など解ことなり

せなかをしつゝ 背爲

いかで聞しことぞや 源にかたり申せし人いづくより

か傳聞けんとなり

ほかばらのむすめ 近江の君也 母は少將の君

辨の少將にとひ給へば かしは木の弟なり後に紅梅大

臣なり

ことくしう 辨の少將

この春のころほひ 螢の卷にかの夕顔のうみ給ひし御

子の事をのたまひ出てさる名のりせば耳とゞめよと

内大臣殿ののたまひけるにより中將の聞つけてよび

入たるがかの御子にはあらでことなるさまなればく

はしくも語らぬなるべし

ほのきゝつたへける女の 近江の君の母なるべし

ふればひぬべき 御子なりといひ觸ぬべき説有やと問

なり

めづらしき世がたりになん 近江君のをかしきさまを

ふくみてのたまふなり

けそむ 或説に家損の字を擧たり 意は家の疵といは

ん様に聞ゆれど家損とつゞく字は有べくもおぼえず

謙遜の字にや侍らん 源 此物がたりを聞て

まことなりけりと 内大臣御子多し

いとおはかめる 好忠集「類よりもひとりはなれてとぶ

おくる、鴈を 鴈の友におくるゝわが身かなしもこれによりて書り

ふくつけき 辨の卷の雪の所におはふ丸はさんとふく

つけかれどえおし動かさで侘めりと有におなじくて

むさぼりがましくすることなり

いともしきに 我は子の

物うききはとや 源のくだりてのたまふが中に咲する

なり

さても 近江君の事をのたまふなり

もてはなれたる 筋なき事に子とはいははじとなり

らうがはしき 内大臣若き時は亂りがはしき事も有し

となり

中將の君も 夕霧はかの二人の思はん事あればまめだ

ちてよき事にもとりなすべけれど源の既くはしく聞

知てのたまふからは今更せん方もなくさるさまのけ

しきしておはするを云成べし

いとからしと 源の聞及び給へるを

朝臣や 源の夕霧をさしてのたまふ そこは今よりか

の近江君の母の如きおとり人にだに通ひて子もあら

ん時はひろひとれかしさる落葉を拾ひたりてふ名あ

りとも雲のかりにつけて人わろき恥みんより思ひ

なぐさむる事もありなんとて下には内大臣殿を咲す

なり  
 おち葉をだに おとり人に逢てだに  
 人わろき名の 雲の鴈にかゝづらひて  
 同じかざしにて 伊勢が歌「わが宿とたのむよしのに  
 君しいらば同じかざしをさしこそはせめと云を以て  
 よしや人にははづかしめらるゝとも同じ親族どち思  
 ひなぐさめんとなり  
 なでふ 何でふなり  
 ろうし 哢  
 かやうのことにてぞ 源と内大臣  
 中將を 夕霧  
 いたくはしたなめて 内大臣 雲の鴈故になり  
 なまねたしとも かやうの嘲哢を内大臣  
 かうき、給に 源心  
 またあなづらはしからぬ 内大臣も源のごとく  
 はや 辭なり  
 いと物きらくしく 内大臣  
 いかにもものしと 右のごとく哢せしを  
 おぼえぬさまにて おとゝの思ひもがけぬ様にして俄  
 に

かへりうく 釣どのより  
 心やすく 源の詞  
 うちとけやすみすゞまんや 我は入てうちとけすゞま  
 んとなり  
 いとほれぬべき 源も  
 にしのたいに 玉かづら  
 おなじなほし 君だち  
 なにとも いづれとも  
 すこしといで 少外出  
 玄のびて 忍びて源ののたまふなり  
 いとかけり 此人々こなたへ  
 中將のいとじはふ 實法  
 むじん 無心  
 おもふ心なきならじ 玉かづらに繫想  
 まどのうちなるほどは 娘すみにて在をば  
 ゆかしく 男の心に  
 この家のおぼえ 源自らのたまふ  
 かたぐものすめれどさすがに 或説秋好は中宮なり  
 明石姫君は后がねのきこえあればすき言いはんにつ  
 きなきなり

さゝめき さゝやくなり  
 おまへに 玉かづら  
 いうそくども 源詞  
 右中將 柏木  
 中將の君は 夕霧をとりわきて聞えんとて記者の語を  
 そへたり  
 中將をいとひ給こそおとゝははいなけれ 夕霧の事を  
 源のたまふ  
 まじりものなくきらしく 只大臣の家流のみ人をも  
 交へず榮えて物きらしくしきをいふ  
 おほきみだつ筋にて 夕霧はなり をとめの巻にもあ  
 ざれかたくなゝる身にて敬趨しまどはされなんと源  
 みづからのたまへる如く臣のきらしくしきとて大君  
 はことの様かはれるを遙りてかたくなゝりとは  
 のたまへりこは却て臣をいやしめ給ふからなり或説  
 にみたてなきなりと云はかなはず  
 きまさばといふ 玉詞 催馬樂に吾家に大君きませむ  
 こにせんみさかなには何よけん云々といふなればい  
 とひ給はじものと玉かづらは申給ふを源はさるさか  
 なもてはやす様にせんはいなをさなきよりの契りの

まゝにゆるされなばとなり  
 とし月へだて 内大臣の  
 まだ下らう 夕は  
 去らずがほにて かく去らずがほにまかせんには大宮  
 のかたに雲居を置いてひそかに夕とむつばせて末に官  
 位も昇りて後改めてんこと聞えんこそと源はおぼす  
 なるべし物のきはしくしき内大臣の御心にはいと違  
 へるさまをいへり  
 うしろめたくは 源のかくておはせば夕の末おぼつか  
 なき事なし  
 さはかゝる さあらば云々と御心へだてを玉の始て知  
 るなり  
 なほけちかくて 灯といへども猶近きは暑きと源の、  
 たまふ  
 かやりびこそよけれ 庭のかやり火は水などにもうつ  
 りて涼しきもの也 此程のかやり火の臺いかにあり  
 けん考べし  
 をかしげなる 此御傍に  
 ひきよせて 源  
 りちに云々 呂を春夏にあて、律を秋冬にあつる事は

此國にてはいかに意得てするわざにや此呂律の事も  
ろこしにいひ始めし事にてかしこの其本をおもへば  
右のごとくにはあらぬ事なり然ればこゝのふみに律  
にまらべたるといふもたださて有べし委しくは別の  
記に有

かやうの事 源

秋のよの月かけ 和琴はよろしき時節をのたまふなり  
いとおくふかくは 居所

けちかくいまめかしき 諸樂器に合するよりも  
ことくしきまらべもなしや 和琴はきとしたる調べ  
となくてまどけなき物なりと先歎じ給ふさまを書故  
に語を切々に短くかけりさていひおとしおきてよろ  
しきことわりを次にのたまへり

このものよ 和琴

おほくのおそびもの、 此器にて諸の樂器を調となり  
やまごごと、 樂器は異國より傳はれるがきとしたる  
ものなるに對して日本琴といへばはかなくおぼゆれ  
どよく知時は限りもなく心ふかく爲おきたるものぞ  
となり

ことくのに 異國

女の爲と 此は女にむかひてすゝめ給詞か實にさおも

ひてかくは誤れり惣て異國とわが國とはことの心い  
と異にてわが國はなだらかにまどけなき様にて自然  
に天地にかなひ異國の事はうはべのきとしたる様な  
れば理有とおもふべけれど何事も人の心もて作りし  
物ゆゑに天地のこゝろにそむく事多し扱日本琴は異  
國のものゝ來らぬさきに古事記日本紀にもみゆ且や  
まごごとゝはからの琴を専ら引て後にいへるものな  
り唐歌に對してやまと歌といふが如し此記者は古き  
この國の心はまらねばかゝる類には誤れる事少なか  
らす

ものなどに 笛などをいふか

すがきかねに 雙搔の意なるべし

ほのく心えて 玉かづらもとより此こと好み給へば  
其理りを少し意得給ふなり

いとくいぶかしうて 御父のこと

このわたりに 此院をさす 養玉の詞此六條院にて御

遊の次手に内大臣の物音を聞給ふついでも有なんや  
となり

き侍りなん 内大臣のを

あやしき山がつ つくしにて

さはすぐれたるは 玄かあらばなり

さかし さもおぼすかと源ののたまふなり

あづまと名も立くたり むかし此國は西より皇化に玄

たがひしかば東をばいやしむ様におもふなり

おまへのみあそびにもまづふんのつかさ

ふんのつかさとは圖書寮をいへど和琴は後宮の書

司の女房の預りなればこゝは書司をいへりその和琴

は朽目宇多法師などいふ高名のものあり

おやとまづべき 内大臣の事

ひきとり給へらんは 玉のならひ給は

こゝになども 先に玉のたまひしに答

物し給はん 内大臣の

このことにてをします 琴

かきならし 内府のなり

心やすからずのみぞある 手をのこさず引やうの事は

せずとなり

さりともつひに 父子なれば

ことつひになく 此ひはふりの反にて琴つぶりなりに

なくは似無なり源の琴引給ふ様體の似る物なしとい

ふのみ花鳥に狛氏の十卷抄にことつき事粒ことさい

三説ありとて説あれど外の説は取がたしたることつ

きことつひの同じ意と有はよし今本にきびうと有

は理りなし是はになくを誤れるものなり

うちとけひき給はん 和琴

ぬき川の 催馬樂律歌に「ぬき川の瀬々のやはら手枕

やはらかにぬる夜はなくておやさくるつままじうる

はしもこれを或説に呂歌なりといへど催馬樂の譜に

律歌に入たりこゝも既律にまらべたりとみゆやはら

手枕やはらたとのみ書ること少しおぼつかなしもし

うたふにたの下にて切て枕とうたふにやうたふもの

にはよし無所にて切ことも有物なり

おやさくるつま 歌の意はおやのその男をいみさくる

故にましてうるはしうおもはるゝといふなりそれを

玉かづらの源をさけきらひ給ふに取てわらひつゝう

たひ給へり

いでひき 源詞

ざえは人になんはぢぬ 物習ふに恥ては事ならぬもの

なりとなり 或云夫をおもふといふ事は女の身にさす

がはづべきことなればかくのたまふ下心あるべしと  
 或人いへり  
 おもなうて 想夫戀の外の樂をば恥給はで誰も彈合給  
 はんとなり  
 さるゝ中のくまに 玉かづらつくしにて  
 ふるおほきみ女 もと王孫の女なるがおとろへてつく  
 しへ下りてをるなり  
 まばしも 源の  
 この御こと 事  
 いかなる風の吹そひて 玉鬘の詞なり 琴には例の松  
 風のかよふてふ詞をもてかく書り  
 わらひ給て 源  
 みゝがたからぬ こは先いかなる風の云々とのたまへ  
 るをうけて耳とくきゝ知給ふ人の爲に浮世にことな  
 る風も吹そひぬらんと戯ひひてさて引さして琴を押  
 やり給ふは吾いふ事をば耳かたくきかでと恨給ふ也  
 おしやり給 和琴を  
 いと心やまし 玉  
 人々ちかうさぶらへば 玉の女房だちなり  
 なでしこを 既有し

此人々のたちさりぬるかな 辨少將侍従などなり  
 いかでおとゞにもこの花ぞの 玉かづらをおとゞにみ  
 せまぬらせばや誰が命も定めなければと心いそぎ給  
 ふなり  
 いにしへも かの雨夜のものがたり  
 いとあはれなり 夕顔の上をおほし出たり  
 なでしこの かの雨夜の物語に夕顔「山かつの垣ほあ  
 るともをりくゝのあはれはかけよなでしこの花とよ  
 みしをもて今なでしこを玉かづらにもとの垣ねを夕  
 顔にたとへてさて今此なでしこをおとゞに見せまく  
 おもへどその本のかきねをわが失ひつるとかこたれ  
 んがわづらはしくてうちこめて有が心ぐるしきとな  
 り  
 このことの 本のかきねとは即母夕顔をいふなり  
 まゆごもりも 萬葉に「たらちねの母がかふこのまゆ  
 ごもりいぶせくもあるかにもにあはずててふを玉か  
 づらをかしくしこもらせおきてあらはさぬがいぶせく  
 おぼすにとりて書り  
 心ぐるしう いぶせきといふ意なり  
 きみうちなきて 玉

山がつかきねに わがかく數ならぬ様なれば本の母  
 のうへまで待ぬる人は侍らじとはかなくよみ給ふと  
 なり  
 こざらましかば 古歌有べし  
 こゝろのおにゝおぼしといめて 我心中のあやまちを  
 我と去りて人めはづかしきたぐひの事を心のおにと  
 いふなり  
 あいなき 愛無  
 さ思はじとて 物おもひせぬやうにとて玉かづらをわ  
 が心のまゝに物せばよのそしりあるべくそも我より  
 は玉の爲心ぐるしからんなどおぼす  
 わがためは 源のわが  
 人の御ため 玉の  
 かぎりなき 源の玉へ  
 春の上の 紫上  
 何ばかりかは かひなきさまならんをいふ  
 すゑにては 源のなからん末をいふ  
 ふた心なくて 妻と成て其男の  
 宮大將などに 兵部卿宮髭黒  
 さてもてはなれいざなひととりて 宮大將又は誰人にて

もゆるさばこゝをはなれかしこへ率はれなん其時わ  
 が心に思ひ絶べきやいなやとはおもへど口をしなが  
 らさ様に人の妻ともせんとおぼすときもありとなり  
 河引率日本紀花もてはなるゝは我御事也細宮大將など  
 のふとゝりてゆき給てはと也 蜀其人の方へむかへ  
 取てよそ人に見果給はんは如何となりもてはなるゝ  
 は我御事いざなひ取ては納言などのきはの人をいふ  
 なり  
 思ひたえなんや 玉かづらの事を源のなり  
 御ことをしへ 和琴  
 かくても 源の  
 みるまゝに 源の  
 なほさても見すぐすまじう 前には人にゆるしなんや  
 ともおぼせしがまたくゝさてはえ過しがたからんと  
 おぼしかへすなり  
 さは又さてこゝながら さあらば又一つを覺しめぐら  
 すに誰にても聲としてこなたに聲をかしづき住せて  
 それがひまあらんときくゝ玉への聞えてなぐさま  
 んかそれも玉の世心なき人なればみそかに心かよは  
 さざらんほどはくるしかりなるとひ夫出来てそれ

がはづべきことなればかくのたまふ下心あるべしと  
 或人いへり  
 おもなうて 想夫戀の外の樂をば恥給はで誰も彈合給  
 はんとなり  
 さるゝ中のくまに 玉かづらつくしにて  
 ふるおほきみ女 もと王孫の女なるがおとろへてつく  
 しへ下りてをるなり  
 玄ばしも 源の  
 この御こと 事  
 いかなる風の吹そひて 玉鬘の詞なり 琴には例の松  
 風のかよふてふ詞をもてかく書り  
 わらひ給て 源  
 みゝがたからぬ こは先いかなる風の云々とのたまへ  
 るをうけて耳とくきゝ知給ふ人の爲に浮世にことな  
 る風も吹そひぬらんと戯ひひてさて引さして琴を押  
 やり給ふは吾いふ事をば耳かたくきかでと恨給ふ也  
 おしやり給 和琴を  
 いと心やまし 玉  
 人々ちかうさぶらへば 玉の女房たちなり  
 なでしこを 既有し

此人々のたちさりぬるかな 辨少將侍従などなり  
 いかでおとゝにもこの花ぞの 玉かづらをおとゝにみ  
 せまゐらせばや誰が命も定めなければと心いそぎ給  
 ふなり  
 いにしへも かの雨夜のものがたり  
 いとおはれなり 夕顔の上をおほし出たり  
 なでしこの かの雨夜の物語に夕顔「山かつの垣ほあ  
 るともをりゝのあはれはかけよなでしこの花とよ  
 みしをもて今なでしこを玉かづらにもとの垣ねを夕  
 顔にたとへてさて今此なでしこをおとゝに見せまく  
 おもへどその本のかきねをわが失ひつるとかこたれ  
 んがわづらはしくてうちこめて有が心ぐるしきとな  
 り  
 このことの 本のかきねとは即母夕顔をいふなり  
 まゆごもりも 萬葉に「たらちねの母がかふこのまゆ  
 ごもりいぶせくもあるかにもにあはずてふを玉か  
 づらをかしくしこもらせおきてあらはさぬがいぶせく  
 おぼすにとりて書り  
 心ぐるしう いぶせきといふ意なり  
 きみうちなきて 玉

山がつかきねに わがかく數ならぬ様なれば本の母  
 のうへまで尋ぬる人は侍らじとはかなくよみ給ふと  
 なり  
 こざらましかば 古歌有べし  
 こゝろのおにゝおぼしとめて 我心中のあやまちを  
 我と去りて人めはづかしきたくひの事を心のおにと  
 いふなり  
 あいなき 愛無  
 さ思はじとて 物おもひせぬやうにとて玉かづらをわ  
 が心のまゝに物せばよのそしりあるべくそも我より  
 は玉の爲心ぐるしからんなどおぼす  
 わがためは 源のわが  
 人の御ため 玉の  
 かぎりなき 源の玉へ  
 春の上の 紫上  
 何ばかりかは かひなきさまならんをいふ  
 するにては 源のなからん末をいふ  
 ふた心なくて 妻と成て其男の  
 宮大將などに 兵部卿宮髭黒  
 さてもてはなれいざなひとりて 宮大將又は誰人にて

もゆるさばこゝをはなれかしこへ幸はれなん其時わ  
 が心に思ひ絶べきやいなやとおもへど口をしなが  
 らさ様に人の妻ともせんとおぼすときもありとなり  
 河引率日本紀花もてはなるゝは我御事也細宮大將など  
 のふとゝりてゆき給てはと也 兼其人の方へむかへ  
 取てよそ人に見果給はんは如何となりもてはなるゝ  
 は我御事いざなひ取ては納言などのきはの人をいふ  
 なり  
 思ひたえなんや 玉かづらの事を源のなり  
 御ことをしへ 和琴  
 かくても 源の  
 みるまゝに 源の  
 なほさても見すぐすまじう 前には人にゆるしなんや  
 ともおぼせしがまたゝさてはえ過しがたからんと  
 おほしかへすなり  
 さは又さてこゝながら さあらば又一つを覺しめぐら  
 すに誰にても聲としてこなたに智をかしづき住せて  
 それがひまあらんときゝ玉へもの聞えてなぐさま  
 んかそれも玉の世心なき人なればみそかに心かよは  
 さざらんほどはくるしかりなるとひ夫出来てそれ

がせくとも玉のさる世心つきたらんときさま様にてお  
もひ通はさば女の爲世の人ぎきのいとほしきことは  
なからんさる時はよし夫の守りまげくとも樂におも  
ひかよはずにはさはりあらじかとなり  
物をも聞えて 玉へなり  
せき守つよくととも 古今「人しれぬ我がよひぢの關守  
はよひくごとくに打もねなゝんでふを幽に含めたり  
まげくともさはらじかし 「つくば山は山まげ山まげけ  
れどおもひ入にはさはらざりけり  
いとけしからぬ 細草子地なり  
いよく心やすからず 翌など取ては  
なぬめにのみ こゝは心にはみたすながらするをいふ  
いまの御むすめ 近江の君  
かるめいひ かるしむるなり  
ほきたる 或説にほうけたるなどいふ詞なりといへる  
も定かならず俗にとばけたるごとくいふを略してほ  
きたるといふにや  
少將のことのついでに 柏の弟  
おほきおとゞの 前に  
わらひたまひて 内大臣

そこにこそ 孟源は玉をひろひおかれてわが事をかやう  
にのまたふかとなり  
山がつの子 玉かづらなり  
いとこともなきけはひ 萬葉に事無吾妹とよめるは難  
の無をいふ  
いでそれは 内大臣  
かのおとゞの 源  
あたからおとゞの 源  
ちりもつかず云々 ひとつとして人にてんうたるゝこ  
となくよろづ今の世には過たる人となり  
おもたゞしきはらに 紫上の御腹  
うみ出たるはしも 助辭なり  
あるやうあらんと 后がねなるべきをふくみてのたま  
へり をとめの巻にも此下にも此ことばあり  
そのいま姫君 玉かづら  
さすがにいとけしきある所 源はもとよりをかしう一  
けしきことなるを爲給ふ心なればとなり  
さていかゞ 玉の翌をば  
みこそまつはしえ給はん 登兵部卿常にいひなるゝ  
を云

御なかもよし 源と兵部卿

景跡  
源の人いぶかしがらせらるゝにつけて  
も雲の鴈を物ふかくしなして人にこひわづらはせま  
しものと夕霧になれさせしを今もまだ口をしと思す  
ゆるに競ひごころいよ、深きなり  
かやうにこゝろにくゝも 玉かづらを源のもてなし給  
ふやうになり  
いかにまなさん 翌取せんか入内などあらんかなど  
おとゞも 源をさす  
まくるやうにても 内大臣  
こゝろやましく 内大臣  
とかくおぼしめぐらす 雲井の事を  
かろらかに 内大臣雲ゐの方へ

雲の鴈  
姫君は 雲の鴈  
すき給へるはだつきも うす物なれば  
すゑつき 髪のはらひ  
物のうしろに 帳などの  
あふぎをならし おとゞ  
なにごころもなく めさめて

つらつきの ねたる顔なり

こは後撰に「たらちねの母のいさめしう  
たたねは物思ふ時の事にぞ有けるてふにて書たりも  
とよりも禁づべき事なりかつうたゝねは轉寢にて俗  
にこころびねといふに同じ  
うち捨たる 古今に「身は捨つ心をだにも溢らさじ終  
にはいかゞ成とするべく是をうちかへして書り  
いとさかしく 賢めき常に身を固くきと持なり  
ふどうそんのだらによみいんつくり いづれとわかぬ  
事ながら女の念せんは如來ぼさち天女などこそあら  
め忿怒の相なる劔印救慈咒などは似つかずさるを心  
に念じ又は師などして祈らすべき事なり  
うつゝの人にも 今現にある人  
けだかきやうとても 身をけだかう持なす方なりとて  
もなり

東宮に立給ふべきを坊がね后に成給はんを  
后がね翌に成ぬべきをむこがねといふ事古きものが  
たりどもに多し或説に后に成ぬべき器量なりといふ  
はわろし  
姫君 明石

をしへは 此むね前に見ゆ  
ゆゑもつけじ 縁山

たてなびくかたは 源のさは教え給へども人は専ら  
と好みなびく方の有物なれば生成給ひなん時の事は  
えまられずとなり

この君の 明石の姫君  
おもふやうに 雲の雁を

いかで人わらはれならず たとひ夕霧にゆるすとも  
人のうへのさまなるを 即右の明石姫君などをい  
ふ

心みごとに 試言なり

ねんごろからん 懇がましく然れば男の心に深からぬ  
をもこゝろみのことばにねもごろだちていふ物なれ  
ば夕霧など深く願ふさまなりとも今暫なびかでまち  
たまへわがおもふ心有と也

ねぎごと ねぎごとは願言也 加比反幾なればねがひ  
を約めてねぎといふ故に萬葉などにねをも願をもね  
ぐと訓社の御宣てふ語も世の爲人の爲に願言すれば  
いふのみ或註には意あやまれり  
さしあたりていとほしかりしさわぎ といひさわが

れて別れし夕霧をいとほしかりしとは云り 扱その  
ほどはものはかなくてさのみはづかしともおもはで  
父君に向ひたりしを今おもひかへすもはづかしとな  
り

昔はなに事をも 雲の心なり  
おもなくてみえ奉り 父君  
むねふたがりて 雲井  
おほ宮よりも 祖母ぎみなり  
おぼつかなきことを 雲の雁へ

かくのたまふるが 内大臣の  
えわたり見え奉り給はず 大宮の御方へ雲の  
北のたいのいま君を 近江君なり  
ひとかう 世人の如是

まことにかしづくべき かゝる人をだにかしづく親ご  
ころの愚さにやといひなすがねたましとなり  
女御の御かたなどに こきでん今内大臣の方におはせ  
り

をこのものにまないてん このをこのものと云を女御  
の笑ひぐさにといふ説はわろしこは姫君とてかしづ  
くべきをさせで女御のかたにわたしてつかはれ人  
なり

のやうにするをのたまへりさてまことにかしづかぬ  
をも人にまらせひたすらかたはにいひおとせどかた  
ちはさもなきをも人にみせてそしりをやめんとこの  
となり

おいまらへる 老まれと云に同じ語なるをこゝに書し  
はわろしたゝ老たると書べきなり

つゝますをしへ はかりなく

わらひつゝ 殿も

などかいと 女御

中將などの 本は柏木のいとよしと聞て尋出だし初め  
の言に堪あたらすといふのみならんとりなし給へ  
り

はしたなく 近江君の  
かたへはかやかしき とりぐにわろくいひさわが

るゝにはちてなればはわろきにも侍らんとなり

此御さまは 女御  
あてにすみたる物の のはながらの略なり 梅が木立

の澄てみゆるに花のひらけもはてぬほどのさまのな  
つかしきが今少しおもふばかり艶ならぬ御かたちを  
明すめり

上の御心になへるをいふならん

中將のさはいへど 柏木は萬づ心まらへ有人とはいへ  
ども猶わかれば思ひたづねのふかゝらざりし故と  
なり

いとほしげなる 記者  
人の御おぼえかな 近江君をさす  
やがて 御方へ参らせて即なり

此御かたのたより おとゞ御方へおはせし次でになり  
のぞき給へれば 近江君を  
すだれたかくおしはりて 物もて外へおしはりあげて  
内を明らかになせるなり是も此君の心ざま知べきな  
り

五せちのきみとて 細近江の君のつかひ人  
てをいとせちにおしもみてせうさいく 或説に空手  
をもみて切に敵の小目を乞なるべしといふに依べし  
せうさひは和名に雙六采と書りそれが目のちひさき  
をいへば小采の意なり

或説に小養と書て和名抄に有といへるはそらごとな  
疾り  
またどきや 舌はやなり



あなうたてと 殿は  
さうじのあき 内府の立聞給ふなり  
この人も 五せち  
御返しやくと よき目を其返しにうち出すべきとて  
急にもうち出さぬなり  
中におもひは 采をうち出ぬを見給ひて「さやれ石の  
中におもひは有ながら打出る事のかたくも有かなて  
ふ歌をおもひよりておぼすさまなり  
いとあまへ あまへなり  
かたちはひちちかに 或説土近の意といふはよし  
つみかろげ とが少しとなり 契仲いはく河海に二説  
有を細流にも用ひられしかど此物語に此言所々にあ  
り心は末つむ花の鼻のやうならぬをつみかろしとい  
へる歟とおぼしければとが少しといはんがごとし  
ひたひのいとちかやかなる 契説眉と額の廣きをば女  
のよきかほとすひたひの短きはいやしげなるもの也  
こと人とあらかふべくも 殿のみづからの御形に似た  
る所あるをいふ  
かくてもものし給は 内大臣今は近江君の在所へ入のた  
まふ

うひくしく 近江君の心を察してのたまふなり  
またどにて 近江君  
御かほ 殿の  
手うたぬ 雙六の  
げに身にちかう 内大臣  
ことわり次にみゆ  
わざ成けり  
なべてのつかうまつり人こそ 猶うち交てあまた召仕  
人の中にては大かたの事は耳目にとまらぬをそれだ  
におのちから誰むすめと云られたるがよからぬは  
親などの面ぶせ成をわが御むすめとておもはしから  
ぬはわが耻なり故に身ぢかくもならし給はぬとなり  
し給ふなり  
殿のみづからの高きをのたまふなればいひさ  
はづかしきも云らず 近江君は  
仕ふる中にもいといやしき  
をいふ 大御虎子なり和名抄裏器謂「清器虎子之屬」  
也虎於保都保清器師乃波古此虎子を貴人のなればお  
ほみ云々と云なりさてきたなきものゝ名をいみて其  
器の形をからにてもいへり宇治拾遺にはこせぬ日と  
いふもこの箇の名をいふなり

えねんじ給はで 内大臣  
をこめい給へるおとにて  
こはの 故母  
ものをかしく宜ふを云  
みえ奉らんこそ 近江君の  
論じ極むることなり  
さだめて 前の中將の心わかきたど  
妙法寺 三代實録に以「近江國滋賀郡比良山妙法最勝  
兩精舎」爲「官寺」とみえたりさて同じ近江君の祈の  
師なるを思ふに蛸蛤日記に兼家公のおとり腹の御む  
すめの志賀の里に在しを迎とりしとあるをうつつし書  
みつき 見繼聞繼語などなり  
女御の里に 此方なり  
時々わたり 近江君  
さる心して 今の如くならず舌どきなどをつししみ人  
の様をもみ習ひ給ふべき心してなり  
近江君  
いとうれしきことに  
御ゆるしだに 女御の御方などの交らひを  
水をくみ 猶おほみ大つばといへる語勢なりいかな  
る雜伎をもつとめんとなり法華經に採葉汲水拾薪設  
食てふ事を拾遺集に「法華經をわがえしことは薪こ  
りなつみ水くみつかへてぞえしとよめるなど以てい  
へれば次に薪ひろひ給はずともとのたまへり  
前よりもまし舌どになれる  
をいふ

近江君のあはつけきさま  
近江君のあはつけきさま  
近江君のあはつけきさま

あえものとなん 舌どき僧のうぶやに來りしにあやか  
りたるとなり 應神紀に宵此云「阿彌」其外歌にも文  
にも有詞なり  
おもひさわきたるも  
けうやう 孝養  
そのけちかく との詞  
をしことどもりとて大ぞうそしりたる 瘡 癩 法華  
經云若得爲三人弊官瘡癩「誘」斯經「故獲」罪如「是  
子ながら耻しげに 殿の心也 女御は用意ことにて御  
子ながらはづかしげにおはするかたに此あはつけき  
子を見せ參らせんも同じ御父の身にもはづかしうお

いふがひなしと 殿の心なり  
 いとしかおりたちて 細内大臣の詞 水を汲と有詞を  
 うけて遊ひろひ給はずともと云り 盃拾遊設食の心也  
 まゐり給なん 女御へ  
 をこごとに をかしく戯になり 細をこの物などのご  
 とし 盃され事なり  
 おぼろけの人 凡といふに同じ 細内大臣には大か  
 たの人だにはづかしく思て見えにくき事にするをこ  
 の近江君は何とも思ひ給はざるなり 近江の君の  
 愚なるさまなり  
 みまらず 近江は  
 女御どのへは 末も人はかやうにいふなるべし  
 よろしき日などや云べからんよしことごとくしくは何かは  
 よき日にと先づのたまひて又よしやさのみ目を撰み  
 よろづもことごとくしくは何かはせんまことに用意有  
 て参られんとならばけふにてもとなり殿も興さめて  
 いひ捨てかへり給ふさまなり  
 見おくりきこえて 近江の  
 かゝりけるたね わが身  
 あまりことごとくしう 五せちが此御父は餘りに過て近

江君に似合すといふなり  
 よろしきおやの 常體の人をいふ  
 たづね出られ給はまし 給はん事ぞといふ意なり  
 たいの君の 近江の君はら立ていふ 或ひといふ此五  
 節近江のをさなき時より遊びがたきにて心やすく  
 ひおとしけるなるべし  
 いまはひとつくちに 五節に對して同じ口に物なの  
 たまひそとなり  
 あるやうあるべき 愚案内府尋出さるゝも子細ある身と  
 思へと身をほこりたる詞なり  
 かほやう かほつきなり  
 けぢかう 人うとからぬさまをいふ  
 そぼれたる 浮たるさまなり  
 いとひなび 田舎びたるなり  
 ことなるゆゑなき 是よりはすべての人の上を記者の  
 云也 細先公界の事を云り心を付てみるべし 孟是より  
 草紙地にをしへのために批判の詞なりことなるとは  
 一段とまたる事はなければども何事も云なしに能く  
 るものなり  
 みゝことに 細耳異也

のこりおもはせ 吾歌などかたるには末のことばをま  
 たゝかになどはいはで人のきくきかぬ程に有て今の  
 すゑは何となく聞きくばかりにぞ有なん勝れたる歌  
 にもいひなしにて品おくれで聞ゆべしとなり  
 もとすゑ 歌のもとすゑなり  
 ふかきすぢおぼえぬ 歌のことわりはふと聞に思わか  
 れねどもかたる人の様にまたがひて面白くおもはる  
 るなり  
 心ふかくよしある 此近江君もし心に故よし有ともな  
 り  
 こわざま 聲様  
 ことばだみて なまりたるをいふ  
 いとふかひなくは 近江君  
 さて女御殿にまいれとのたまへるを  
 近江君の獨ごと  
 なり  
 よさりまうでん かるくしきさまなり  
 天下におぼすとも 我を  
 この御かたぐの 御兄弟たち  
 すげなう 我を  
 たてりなんやとのたまふ 我身のたち所なからんと也

御おぼえのほど 記者の語  
 まづ御文奉れ給 近江君より女御の御方へ  
 あしがきの 近江の文 古今「人まねぬおもひやなぞ  
 とあしがきのましかれどもあふよしをなみ  
 かげふむばかりの 近づきまゐる事もなきをいふ  
 後撰「立よらば影ふむばかりちかけれどなこそこの關  
 を誰かすすけんこそは來る事莫れといふ意にてな  
 かれの語を先にいふは莫戀をなわびそなど萬葉にい  
 へる類なり  
 すすさせ 女御はわれをくる事なかれと覺すかとなり  
 まらねども 「まらねどもむさし」といへばかこたれぬ  
 よしやさこそは紫のゆゑ  
 かしこけれども 御ゆかりなど申は忝なけれどとなり  
 てんがちにて 前にてんなかにといへるがごとし  
 うらには 文のうらがき  
 くれにもまゐり この夕にもとなり  
 いとふにはゆるにや 後撰に「あやしきもいとふには  
 ゆる心かないかにしてかは思ひやむべき女御のいと  
 ひ給ふにさへざりて参らんとおもひたつといふなり  
 みなせ川にを 古今「みなせ川有て行水なくはこそ終  
 五十八十五

にわが身をたゝんとおもはめといふ歌の心にて絶まじきゆかりをおもへばといふなり或説に引たる歌は物にみえず例のわざと聞ゆ

よりつゞけてみるべし  
いとさうがちに 假字にあらず字義にて草に書をいふなり 次に文の事を女御さうのもしは見え見えらねばにやあらんと有にて定るなり

近江くさわかみ 或説是を萬葉にある無心所着の歌の類なりといへどさはあらし上の文古歌もてかきすゝめたるに理りはさすがに有をうたにことわりのなき事有べからずよりて思ふに是も句ごとに皆古歌もていひたるなるべし先草若みは「うらわかみねよげにみゆるわか草を人の結ばんことをしぞおもふといふを是も兄弟なればむすばんことを思ふと云にとるなり

いかれるての かどくしきなり  
そのすちとも 行のたゞよひみだれて其すちともみえぬなり 實なき手蹟なり  
まもじながに わろき手をふるまひ書たるにしの字など長う引たるあるものなり

ひたちの海云々元真集に「ひたちなるいかこのさきの忘貝ひろふかひなき物にもあるかな

はしざまに 行のゆがみたるなり  
うちゑみつゝみて みづからはよしとおもひてさすがにいとほそく 文のかたちのみはやさしきなり

たごのうら波は「するがなる田子の浦なみたゝぬ日はあれども君をこひぬ日はなしこれらにて惣ての心はあね君のむつびなんことを忘ぬ日なきにわびて忘れんとすれどかなはねばいかであひ見奉らんことをおもふと云なるべし

なでしこの花に 何心なく時の花につけしか或説にさまぐいへど皆よしなし  
女の使 樋清にて前にいへるおほつぼなど清むる下ひすまし 樋清にて前にいへるおほつぼなど清むる下女なり

いかゞさき 近江のいが崎にはあらず

だいはんどころによりて かのわらは  
北のたいに 近江  
たいふの君と 大輔といふ女房

大川水の 契六帖に「みよしの、大川水のゆほびかにおもふものから波の立らん是をいへりたごのうら波

もて参りて 御前へ

そばく はしくなり  
いといまめかしき 中納言君  
さうのもしは 草の文字  
もとすゑなくも 歌の本末つゝかぬをいふ

の歌か考ふべしなみ立いでよは波と下の松の並立とをかねて近江に立出て來給へ待ぞといふなりこれもわざともつかぬ名所をもてつゞけたり  
あなうたて 餘りなりと女御ののたまふなり 細女御の御詞なりまことに女御の書給へるとおもひ給ふてはとうたてありとおぼすなり

給へり 中納言  
返事かくゆゑしからずは 此文のごとく古歌など多くふくめてかゝすは近江のおもひおとさんなれば中納言にかけとのたまふなり

おしつゝみていだしつ たて文なり  
まつとのたまへるを 宮崎の松と有故

かき給へと 中納言に  
もて出てこそあらね 御妹といふなればおし出てはえ

再波立出よ箱崎の松と云結句を心よせにしてわれをまつとおほせらるゝほどにまゐらんと云々此人源氏物語の狂言なり

をかしきことの 中納言君近江の文の古歌にまつはれ  
たるをいふ 此返りはむづかしとなり

いとあまえたるたきもの 香のたるきをいふ  
返々たきしめ 参りの用意なり

きこえさせにく、 女御の  
たゞ御文めきて 細文の詞なり あしがきのとあるをう

べにといふもの 和名抄に輕粉開羅赭赤なり所以著類也云々

ちかきゑるし けたりちかきゑるしもなくたいめなきはうらめしきとなり

ひたちなる これも右の歌のごとくひたちするがは波のたゝぬ日はあれどなどのみなりすまのうらいづれ

ひたちなる これも右の歌のごとくひたちするがは波のたゝぬ日はあれどなどのみなりすまのうらいづれ

源氏物語新釋 常夏

源氏物語新釋

篝火

卷名は「かやり火にたちそふ戀の烟こそ世にはたえせぬほのほなりけれ詞にはかやりすこしきえがたなるを」とありこれも源氏卅五歳の秋なり

この頃世の人のことぐさに 言種

うちのおほいどの 内大臣

いま姫君と 近江君

なほざりのかごとにて その母などのかたちをいふを

大かたの故にては聞入べからぬ事ぞとなり

かく人にみせいひつたへらるゝこそ 或説に女御の御

方へ參らせし故に人多く見聞たりといへり

きはくしう物し給ふ餘りに わが子にしもあればと

思ひて今一度たどらざりしをのたまふ

心にもかなはねば 今更に

かくはしたなきなるべし せんかた無をいふ

もてなしからにこそ こゝにてはよしやわろしとそれ

にまたがひてもてなしやうのあらん物をといふか

かゝるにつけても 玉かづら

げによくこそと 次の覺し知へかゝる

おやときこえ 内大臣

いとよくきこえまらせけり 源の深き御心を

にくき御心こそそひたれど 源はたはむれ言のたまふ

はうるさけれどとなり

いとどふかき 源の御うしろみ

やう／＼なつかしう 玉も

せこが衣も 六帖はつ風のすゞしく吹けばわがせこが

衣のすそのうらぞ淋しき

まのびかねつゝ 源

五六日 字音によむぞ此文の例なる

かゝるたぐひ こゝは源のおぼす心と見ゆ或説はわろ

し

右近のたいふ 右近將監叙爵したるをいふ

いと涼しげなるやり水のほとりに かやり火の水にう

つれるはことにすゞしきなり

まゆみの 檀

おどろ／＼しからぬほどにおきて かやり火の臺を

さしまぞきて 火も御前にいと近からず且ともす人は

いよゝまろぞき居て松をうち入などするをかねてい

ふならん

御ぐしの手あたり 玉かづらの

うちとけぬさまに 玉かづらの

かへりうく 源のなり

たえず人さぶらひて 源の仰

ともしつけよ 右にともしつけさせ給ふと有よりみる

にこゝもともし付よといふ意なり繼よといふ説はか

なはず

夏の月なき 既秋なれどまだあつければ凡をもて夏云

云とは書たる成べし

かやり火に こはかのかやり火にわがおもひの烟も立ち

そひぬるがそのかやり火は消る時あれどわがむねの

ほのふのたゆる世はなしとよめるなり右のかやり火

の消たりしより出たる歌なり

いつまでとかや 源の詞なり「夏なればやどにふすぶ

るかやり火のいつまでわが身下もえにせん此有様に

似たりとのたまふなり

女君 玉かづらの心なり

行へなき いかでさは覺すらん篝火の烟にたぐふ御お

もひのけむりならばそれが空にのぼりては消るごと

くおもひけち給へとなり

くはやとて 源

ひんがしのたい 花散

さうに 箏

頭中將にこそ 柏木のふくぞと聞知給ふなり箏の上手

なる事末にみゆ

わざとも 一能といはんがごとし

立とまり給ふ 歸らんとし給へるに

御せうそこ 源の夕へ

うちつれて三人 夕霧頭中將辨少將成べし

風のおと秋になりけりと 秋風樂の心なり

忍ばれでなん 堪がたくなり

御ことひき出て

將にゆづらせ給ひつけにかのちゝおとゝの爪音にを

さ／＼おとらずとあればなり

源中將は 夕霧なり

ばんまきてう 盤渉調

おもしろく吹たり 箏なり

頭の中將こゝろづかひして 玉鬘の方

をそしと 源

辨の少將 柏の弟

うたはせ給ひて 少將になり

御ことは 源

中將に 柏木

みすのうちにももの音きわく 源玉かづらの事をの

たまふ或説に相如が琴彈て文君をいどみし心此源の

ことばにこもれりといへども聞えず

さかづきなど心してを 酌すぎてはいかとおぼすと

なり 或説玉かづらの事をもやおとしいの君たちに

語出ましなどおぼすにやされば姫君もあはれと聞給

ふなり

さかり過たるひとは 源のみづからの事なり

ひめぎみも 玉かづら

あはれとき給ふ 前にも此人々につけて此詞ありよ

そながらむつましう覺すなり

たえせぬ中の御ちぎり 實の父子兄弟の

この君たち 柏木などをなり

めにもみゝにも 玉の

かけて 柏木などは

さだに しかだになり

思ふすぢ 玉かづらを思ふ

えまのびはつまじき 忍びがたくて色に出ぬべき心ち

するなり

かきわたさず 和琴を

みすのうちにももの音きわく 源玉かづらの事をのたまふ或説に相如が琴彈て文君をいどみし心此源のことばにこもれりといへども聞えず さかづきなど心してを 酌すぎてはいかとおぼすと なり 或説玉かづらの事をもやおとしいの君たちに語出ましなどおぼすにやされば姫君もあはれと聞給ふなり さかり過たるひとは 源のみづからの事なり ひめぎみも 玉かづら あはれとき給ふ 前にも此人々につけて此詞ありよ そながらむつましう覺すなり たえせぬ中の御ちぎり 實の父子兄弟の この君たち 柏木などをなり めにもみゝにも 玉の かけて 柏木などは さだに しかだになり

思ふすぢ 玉かづらを思ふ えまのびはつまじき 忍びがたくて色に出ぬべき心ち するなり かきわたさず 和琴を

源氏物語新釋

野分

此卷の名は始め終り野分によれる事なれば野分と書

り源氏卅五のとしなり

中宮のおまへに 秋好

いろくさをつくして いろくくさぐさの草の花の數

をつくしてなり字にては品種の意なり

くろきあか木のませを 細皮ながらあるを黒木削など

せしを赤木といふ

玉かとかやきて 河うゑたてゝ君がまめゆふ花な

れば玉とみえてや露もおくらむ

つくりわたせる野べ 古今に遍昭の歌のはしに庭を秋

の野につくりて云々

春の山もわすられて ことふの卷に對へていふ

昔より秋に心よする 萬葉に天智の御時宮中にて花黄

葉の競ひありしに額田女王歌もて判り給ふを或説に

引たれどその歌は春は草木まげくして山に入がたき

故とて秋により給へば後の秋をこのむとはこと違へ

りそれより後には秋に心よせし歌多ければこゝには

かく書成べし

なたたる 名立なり

心よせし人々またひきかへし 拾遺貫之の時に付つゝ

うつる心はといへる心あり

世の有さまに似たり うつり行よの人の心をいふ

御らんじつきて 中宮 著

御あそびなどもあらまほしけれど八月は故前坊 むか

しは忌月三十日の間は萬をつゝしむ例なりければ管

絃などもし給はぬなり

心もとなくおぼしつゝ 此月はつるを待給ふ間には花

の時過んことを心もとなく覺すに野分さへ立ぬとい

はん料なり

野分例の年よりも 秋の暴風の事いといにしへよりふ

みどもにみゆ或説延喜の御時を引はおくれたり且暴

風和名抄に八夜知又乃和木乃加世

まして草むらの露の玉のを 古今「白露に風の吹しく

秋の野はつらぬきとめぬ玉を散りける

中宮は 秋の野はつらぬきとめぬ玉を散りける

御心まどひも 玉のをとあるをうけてなり

おほふばかりの袖は 「大空におほふばかりの袖もがな

春咲花を風にまかせせてふを秋にとりよせたり

むくつけければ おそろしきなり  
中宮の  
うきろめたくいみじと花の上を 「朝きたき起てぞみ  
つる梅のはな夜の間の風のうしろめたさにこのこと  
ばをもてよもくらくみかうしもおろしておぼしやる  
をいへり

みなみのおとゞにも 紫の方

もとあらのこ萩 古今に「宮城野のもとあらの木萩露  
をおもみ風を待ごと君をこそまててふ歌にて書り  
露もとまるまじう 草花のすこしもとまるまじうとな

すこしはしぢかにて 紫

おとゞは 源

姫君の御かたに 明石

中將の君まわり 夕霧南の殿へ

東のわた殿のこさうじのかみより わた殿より人とこ

ろの妻戸は人の出入ば即とづるなりされば其わたど  
の、中なる小さうじはかりそめの目隠しなればいと  
ひきて有けんさてあらし風のまぎれにつま戸のひら  
けしをもあらであればかのさうじごしにみとほされ  
しなるべしうつせみの巻にさうじの上より源氏のみ  
あぢきなく 夕霧

しも似たるさまなり

たちとまりて 夕霧

春のあけぼの、霞の間よりおもしろきかばざくら  
他よりおかれて色はうす紅なるさくらなり委しくは  
別記にいふ

かば櫻は和名抄木類部に權和名加波又加仁波今櫻皮  
有之といふと萬葉に櫻皮纏作船と詠るを對へ且權木  
皮名可<sub>三</sub>以爲<sub>レ</sub>炬者也と玉筥にいへるなどによるに  
今も有ごとく一種櫻皮のたてあかしによくもゆるも  
のなりさてそれをかばざくらといひ花も薄紅にてこ  
とに霞の間よりみえたらんはえもいはぬさまなるべ  
し且花櫻と歌によめるは色の薄紅なりと聞ゆればこ  
れを花ざくらともかばざくらともいふか新撰萬葉又  
拾遺にも「淺みどり野べの霞はつゝめどもこぼれて  
匂ふ花ざくら哉とよめるに爰は似たる意あり或抄に  
此歌の末をかば櫻哉とあるは誤なり又和名に朱櫻を  
かばざくらといふと有も誤れり朱櫻はは、か又はは  
櫻とこそ和名にはあれ

右注ども皆別記

夕霧

我がほにもうつりくるやうに 譬へばいと紅なる物に

むかへばこなたの顔衣にも色のにほふ様におもはる  
るがごとし

みすの吹あげらるゝを 鎮子なども堪ぬなるべし

うちわらひ給へる 紫

花どもをこゝろくるしがりて 花の亂るゝをなり

おまへなる人々も 紫の女房達なり

めうつるべくもあらず 内家叢中獨分明といふがごと

し

おとゞの 源氏のなり

いとけどほく 我を

もしかゝることやと かくみて心に入こともやとな

り

にしの御かたより 明石姫君のかた

いとうたて 餘りしき風をいふ

をのこともあるらんを かやうの時はをのこともゝ參

るべきにとの意なり次にそのよしみゆ

又よりてみれば 夕霧

物聞えて 源紫上へ

女も 紫上も

たてる所のあらはになれば かうしの有所に先隠てそ

のさきにたちたる小さうじごしに見たるを今はかの  
かげかくせしかうしを吹はなちたればかくれなきな

り

さればよ 源

とし頃かゝることの 夕霧の心なり

風こそ云々 げにと云は古事をおもへるなり此國には

風につけたる事見えす或説に項羽記の大風從<sub>二</sub>西北<sub>一</sub>

起折<sub>レ</sub>木發<sub>レ</sub>屋揚<sub>二</sub>砂石<sub>一</sub>てふを引たり猶も有べき歟

さばかりの御心どもを 常にみだれたることなく物つ

つみし給ふ紫の心を風のみだらしたればこそ見奉り

たれとなり御心どもといへば源も此さわざに姫君の

御方などへおはしなどして御心づきの遅きをもかね

いふなるべし

人々まわりて 源の家の人

いとかめしう吹ぬべき風に 此上にも

うしとらのかたより吹侍れば 南面へはさのみふき入

ねばかうしまゐらで庭を見給ひしをいひあはする語

なり

うまばのおとゞ 花散里のおはする長町なり

とかくことをこなひのゝまゐる 倒れぬ設をする成べし

おとゞのかはらさへ 御殿の瓦

中將はいづこより 源の

かくてもし給へる事とかつはのたまふ 夕のおはせ

三條の宮に侍りつるを 祖母の御方 夕の答

しをばうれしと覺しながらありき給ふ道の中のあや

げにはやまうで 源

うき事共を且おぼすなり

かうさわがしげに 源の御言傳

そこらところせかりし 故おとゞのおはしてはた源氏

このあそん 夕霧をさす

さへ出入給ひしほどの御いきほひをいふ

御せうそこ 大宮へ

御いきほひの 故おとゞのおはせし時のごとくはなき

うるはしく物し給ふ君にて 夕霧心正しき人なり

なり

三條の宮と六條院と 九條右丞相の遺誠にも凡非有

まづまりて 威の衰たるなり

病患日々必可調於親若有故障者早以消息可

おほいどの御けはひは 御子といへど夕霧より

問夜來之寒香大風疾雨雷鳴地震水火之變非常之

中將よもすがら 夕霧

時早訪親次參朝云々抄禮記文王世子云文王爲世

あらし風の音にも かの紫を見つるより風の音はげし

子朝於王季日三云々下略夕霧は儒學を志給ふ故

きにもまぎれずものおもふをいふなり下に同じ中將

にかやうの道たゞしきなり

雲井への歌に「風さわぎ村雲まよふ夕にもわする」

うちの御物いみなど 内の御ものいみにこもる人は必

間なくわすられぬ君とよみ給ふに同じ

他へ出ぬことなれば六條院へ參らす

すゝろに 此事下にみゆ

おほやけごと 公事

かけてこひしとおもふ人の 雲の雁

いとまいるべく 暇入

こはいかに われと心をいさむる

まづ此院にまゐり 三條にかへりて

ありがたうも物し給けるかな 紫の形

たゝわなきに 老給へるさま

あないとほしと 花散のかたちのあしきを

ありがたしとおもひ去り給 花散をも捨給はぬを

ひはだかはら 檜皮瓦

人がらのいとまめやかなれば 夕霧はまめ人なれば紫

たてじとみ 立部

をとほ思かけずかく様ならん人ほしとおぼせり

すいがい 透垣

むら雨のやうにふりいづ 野分の後は必ふる物なり

みだりがはし くづれたふれたるさまなり

風の吹まふほど 夕霧

うれへがほなる庭のつゆ 野分したる朝にはさる様に

おとゞのあたりこそ

みゆるものなり

ひむがしのまちななどは

中將のこわづくるにぞ 源のきつけ給ひて

参り給 花散へ

夜はまだふかゝらんはとて 霧のふかき故さおぼすな

いとひやゝかにふきいる 車の内へ

おとゞうちわらひ給て 紫上と物のたまふなり

又わが心におもひくはれるよと 雲井の鴈にかの紫

いにしへだに 霧のふかきにまだ夜深しとおぼせば紫

の上的事の添たるなり

とはいまだなき曉の別をするよとたはぶれてのたま

ひんがしの御かたに 花散

ふなり

こうじて 困の音なり

とばかり こは時ばかりの略語なるをいと暫の事にも

みなみのおとゞに 源の方

云なり

みかうしもまゐらす あげぬなり

いとをかし 夕霧の心なり

おはしますにあたれるかうらんに 源の寢所にあたる

女の御いらへは 紫のなり

とほりの高欄なり 源はいまだおほとのごもりた

ゆるびなき御なからひかなと むつまじさの隙なきな

り

おしかゝりて 夕霧

けちかき 紫の寢所近きなり

山の木共 庭の山

たちのきて 夕霧

いかにぞ 源

みやは 大宮

まかほかなきことにつけても 夕霧のこたへ

涙もろに 大宮

わらひ給て 源

うちのおとやは 内大臣

うれへ給しか 大宮も

人がらあやしう 内大臣

を、しき 雄

御けうをも 孝

心のくまおほく 心にかくしかまへる事おほきなり

うるさながら よろづ具し過たるをうるさしながらと

いふなるべしいせ物がたり古本にとふもうるさしと

云に愁の字をかきたり

かくなんなき事は かくのごとくなむつくまじき人は

世になきと也 紫式部かくおもふより此物がたりに

全くよき人を一人もかゝぬ成べしげに世中をひろく

みるに人ごとにもたたく難なきは侍らす

いとおどろくしかりつる風に 源詞なり

中宮に 秋好

此君して 夕霧

よるの風のおとは 源せうそこの語

おこりあひ侍て 風の心地をいふなるべし

ためらひ侍るほどに 細養生してとなり

中將おりて 庭におりてなり 廊など傳ひて行やうも

あれど中宮への御使なれば庭へ下て中の廊の外より

通りて參給ふなるべし

參り給ふ 中宮へなり

あさぼらけのかたち 夕霧

ひんがしのたいの 對屋

みすまきあげて 中宮の御方なり

うちとけたるは 打とけがましき様なるは此宮の用意

覺束なしとふとおもはるゝなるべしさしもの風の後

なれば南の御方しもあらはなりし類ひにかくは書る

成べし下にさいへどけたかく云々と有を照し見るべ

し又次の詞につけていはゞ打とけたる時はいかゞ

あらん今は云々といふ意ともすべけれどさらば此詞

無くとも有べし

さやかならぬ明くれのほど 夜の明んとするときくら

きもの也 上に日わづかにさし出たるにと有て後こ

こに明くれと有は事たがふ様なれど野分のゝも曉が

たより空晴て日のかけすこし見えしがやがて霧のふ

りて又をぐらき朝ぼらけなればみるけしきにつきて

こゝには明くれと書るなるべし上に源はまだ夜ふか

しとおぼせるもかゝる明ぼのゝ心まどひなれば相む

かへて思ふべきなり

おろさせ給ひて 御庭に

むしのこどもに 虫籠 女郎花は黄なるに青き壁下に青

をみなへしのかざみ

ききぬと雅亮いへり

むしのこどもに 虫籠なり

いとあはれげなる 風にあひて

吹くるおひ風はじゝうのかにことにほふ こゝは今

の本は誤なれば一本を用ゆさて先吹來る風に侍従の

かのするに又ことなるかうのかをりも交りてにほふ

を云のみかの初音の巻に明石上の方のさまをいふに

よしある火桶にじゝうをくゆらしてものごとにしめ

たるにえびかうのまがへるいとえんなりといへるを

おもふにこゝもことに匂ふ云々えび香のかをりをい

ひてそれは即宮の御衣にふれ給香にやと思ひやらる

るにめでたしといふなり

かうのかをりもふればひ ばひは辭にてにぎはひ氣は

ひなどのほひに同じ今昔物語などに多く見ゆ

人々げざやかに 女房達もけたかうおさめたるさまを

いふ 中宮

御まわりのほど 源の御消息を

御せうそこ 啓

宰相の君ないしなどの 知給ふ女房達なれば

これはたさいへど 右に夕霧のふとみてうちとけたる

はいかゝあらんと思ひしをうけてさいへどとかけ

るなるべし扱それ紫の方におもひくらべておもふ

事なればこの物おもひ出らるゝといふもやがて紫上

の事なり 夕霧かへりてみ給ふ様なり

みなみのおとどには あげたるなり

まありわたして 吹みだされて

行へもしらぬ けさの御音信に

いままんなぐさみ

あやしく 源



あえかに せさながましきなり  
やがてまわり給ふ 源の

御なほし 源の  
おもふに 夕霧

つぶくとなる 成

ほかさまに よそみするなり

殿御かゝみなどみ給ひて 源氏のなり

中將の朝けのすがたはきよげなりな

のたまふ 源紫上へ向ひて

きびはなるべき まだいと若きをいふ

かたくなしからず こはまだ片なりなるべきほどなる

にはやくねびとのひてこのましき姿なりとなり

こゝろのやみにや 河人の親の心は

いといたく心げさうし給ひて 源

何ばかりあらはなるゆゑくしさも うはべはさせる

故よしもみえ給はずしておくふかき御心有をいふ次

にいとおほどかに女しき物からけしきづきてといふ

も即同じ意に落るなり

夕霧 中將ながめいりて 夕霧の紫の上の袖口をさぞと見し

より心にかゝるまゝにつくづくとながめいりて源の

いでたまふをも見しらぬなり  
おもてうちあかめて 紫上

みすのうちに 中宮の御方にて

中將わたどの、夕霧御供にて

思ふことのすぢく 或説に雲井鷹紫上の事

こなたより 源

心とやめ 明石の

ものゝあはれに 明石

御さきおふこゑの 源の

うちとけなえばめるすがたに 明石のさま

こうちぎひきおとし 下に御厨子の紙をおろすをもと

りおとしてと書り 打とけたる儘にはあらで衣架な

る小袷引おとし着て源にたいめし給ふはものゝきは

あるさまつよしといふなり此君さる所にきとしたる

心有をいたしとはいへり

こゝろやましげなり 筆者 明石心を

大かたに萩の葉過る 源の音信すて、歸給ふにつけて

わが身のうきをなげくなり扱野分の事はいはんもさ

らなればそれにつけたるこゝろをよめり

ひとりごちけり 源の歸り給て後

にしのだいには 玉かづらなり

おそろしと 野分をなり

ことごとしくさきなおひそ 此さきおふは道行とはこ

となるべしさてこはいと俄に入て打とけたる様みん

爲か又女房達など參集らせじにも侍るべし

音もせでいり給 玉へなり

玉かづら けざやかを略きてかさねいふなり

けざく 源

ちかくぬ給て 源

たえずうたてと 玉かづら

いとよく 源

風につきてあくがれ給はんや 古今に「風の上」にあり

かさだめぬちりの身はゆくへもあらず成ぬべからな

りてふ心詞もて女君物うき儘にふとのたまふを源は

「出いなば心かろしといひやせんなどの詞にていひ

てさり共我よりも他し方にとゝまらんと覺す御心の

つき給ふなるべし我はねび過たればことわりぞなど

少しくねりさまにのたまへば女君げにわろくいひた

りしよし覺しかへすなりこゝのさま今はいと御ここ

げにうちおもふ 玉かづら

ほづぎとかいふめる 和名抄に酸漿一名洛神珠 保々

都岐ふくらかにうつくしきさまにたとふ

かみのかゝれる 鬘の髪の顔に

わらゝかなるぞ 眉のほのくともせずあざやかに開

けたるさまなれば氣高からずといふなるべし

なんつく 難

中將いとこまやかにきこえ給を 御供にまゐれるに源

の玉へものゝたまふを簾ごしに聞て

とりやりたれば よべの風にて

たはぶれ 源の

ゑるきを 験

かくふところはなれず 餘り馴々しきを云

みやつけたまはんと 源の

はしらがくれに 玉の

ひきよせ給へるに 源の

御くしの 玉の

女いとむづかしと 玉かづらのさまなり

なごやかなる 心隔なきさまなり

ことゝ 専らなり

いであなうたて 夕霧心なり

おもひよらぬくまなく 源の  
もとよりみなれ 玉は誠の御子ならぬを夕はまだしり  
給はねばなり  
かゝる御おもひも 好ましき御心  
むべなりけりや 生し立給はねばさも有べきことかと  
先おもひてさてさるまじくうとましきわざなりとさ  
だむるなりされど夕のこれを見てみづからの心ゆる  
びするさまに書しは専ら御父をそしる文なり  
おもふ心もはづかし 夕のみてみづから恥るなり  
はらから 我と  
昨日みし御けはひ 紫上  
けおとりたれど 玉かづらは  
やへ山吹の 玉かづらの巻に衣をくづり給にやまぶき  
のほそながは此御方へまゐらせられしなり  
おまへに 玉かづらの御前  
いとこまやかに 源  
まめだちでぞ 源の  
いかいあらんまめだちて 例の事につけていさゝか無  
きやうし給ふなり歌にてしらす  
吹みだる風のけしきに 源のたまふ事のうれはしき

意をよべの野分によせたり  
しぬべき 爲  
くはしくも 夕霧  
うちずし給を 源の此歌を  
にくきものゝ 夕心なり  
ちかゝりけりと 源のおはす所に  
たちさりぬ 夕のなり  
御かへり 源のなり  
下露に 心は明らけしなよ竹はとをへになびくしのめ  
竹をいふこと萬葉にもみゆ  
ひが言にやありけん 少し立去てきゝしさま  
ひんがしの御かたへ 花散里なり  
わたり給 源  
あさむ 朝寒  
ものたちなどするねびごたち 絹など調するなり  
おまへに 花散の  
ほそびつ 或説俗にぬりをけてふものなるべし  
くちばの 朽葉  
いまやう色のになくうちたるなど よく打てきらある  
なり

中將のしたかさね 源の間  
御前の薨せんざいのえん 或説曰此きぬどもを源のみ  
て内の前裁の宴の夕霧の料に調じ給ふかとおぼして  
宜ふなり又いふ康保三八に前裁宴有しなりと  
なにかあらん 絹どもを源のみ給に  
御なほしけもんれう 藤の裏葉におとゞはうすき御な  
ほし白き御ぞのからめきたるがもんげざやかにつや  
つやとすきたるを奉りてと有は四月十日頃なりこゝ  
は八月にて同じくすきたるをき給ふべししかればけ  
もんさは本より地うすきに文の所なほうすくけもん  
れうは地は常の織めにて文の所をのみうすくすかし  
ておりたるをいふなるべし  
このごろつみいだしたる 或説此頃の花とは鴨頭草の  
花をいふ夏のなほし花田にそむる故なりはかなく染  
たるとはうすくと染たるをいふならん  
中將にこそ 夕霧  
めやすかめり こは源の御料なる故にわれには似合  
すとのたまふなるべし  
むづかしき 夕霧心なり  
御ともにありきて 源の供にありき給ふなり

かゝまほしき文など 野分のとぶらひに雲井鴈惟光が  
女などの方への文なるべし  
姫君の御かたに 明石の姫君へ  
まだあなたになんおはします まだ紫のかたに姫君の  
おはすためのとのいふ  
風におぢさせ 姫君  
物さわがしげなりし 夕霧  
みやのいと心ぐるしう 大宮  
いみじきことに 姫君  
ほとくしくこそ あやうかりしといふなり  
ことごとしからぬ 夕霧  
御つばねのすゞり 夕霧は御局の私の硯などをと乞給  
ふを姫君の御厨子なるをとりおろしてまゐらすれば  
こは惶有と一度はのたまへど先に御供にて明石の上  
のかたの様子を見しに 一かたおとれるさまなれば此姫  
君は后がねといへど猶はたさまでいふべうもなしと  
おもひ成てその儘に書給ふとなり  
みづしによりて 姫君の御厨子の硯紙を取てまゐらす  
なり  
とりおとして とりおろしてなり前にも有し

きたのおとゞの 明石のうへの事なり  
すみ心とめておしすり 古へより墨のすりやうは有

またもかい給て こは五節のもとへなり  
うまのすけに 夕の家人

筆のさきうちみつゝ 是も又さる事なり  
されどあやしきだまりて 此歌はいつも同じさまに

をかしまわらは 二所なれば童と隨身とを遣すなり  
うちさゝめきて 右馬助がなり

て動なき口つきにしなしたり然れどもさきに此君の  
さまぞとてよめらん中々よき歌の有しはいかにす

みつる花のかほども 紫のうへのかば櫻玉かづらの山  
吹

夕霧 べて此記者歌の心得はわろかりけり  
風さわぎ こゝろ明らけし

ものゝそばより 姫君  
人のしげくまがへば ゆきかよふなり

人々かたの、少將はかみのいろにこそ 風の朝なれば  
ことにかるかやのしどろなるえだも心のしほれにも

うす色の御ぞ 紫のうすき  
かみのまだたけにははづれたる つねにはたけにあま

おもひとられておもしろきを女房こは艶書とみつれ  
ば色好なるかたの、少將のせしことをとうでてたは

ひきひろげ ふさやかなるさまなり  
たまさかにもほのみ奉りしに いとおさなきほどなれ

ぶれいふなり扱いくの野邊のといふは此紙紫なれ  
ばむさしのをふくみて宜ふなるべし且女房のたはれ

さくら山ぶき 紫 玉かづら  
これは藤の花とや 花明石姫君を藤にたとへたる事若菜

よるにかゝはらすすくよかにのたまふは此君の常な  
り

さもありぬべき 夕霧の隔の中なれば明くれ心やすく  
みるべき理なるを源のけさやかに隔おき給ふがづら

さばかりの色も 夕霧卑下してのたまふ  
いとすくくしく 夕霧のさまなり

の巻にあり

きとなりさて右にさくら山吹藤とつづけいひつれば

むすめといふ名はして おとゞの御むすめといふ名は

紫玉かづらをもかねていふなり

あれど實ならぬにや實ならばさがなかるべきやうは

おは宮の こゝは祖母の事なればおぼと書べしをばと

あらしといふを畧してかけるなるべし故に上にいで

書は伯叔母の事なればこゝにはかなはずはしく前

あなあやしとのたまへり

に書り

さがなかる 不祥

さかりなるあたりには 六條院をさす

それなんみぐるしきことに わが娘と云につけてとな

内のおとも 内大臣

いかに御らんせさせん 大宮に

のどやかに御物がたり聞え給 内大臣と大宮

きこえ給とや 例の書さまなり

姫君を久しくみ奉らぬが 大宮の詞なり

ただなきに 老人のさま

いま此頃の程に 内大臣の詞

心づから物おもしろげにて 雲井鷹

こゝろうくてせちにも聞え給はず 雲井に逢給はん事

を

そのついでに 此次でに近江君の事をのたまへり

ふでうなる こは不肖の字音にてふせうと書けんを誤

てふでうとかきしならん次に宮のたまふもいかで父

ににざる事あらんやてふ意なればなり或説に不調の

字をあてたるはいかにぞや

みや 大宮

源氏物語新釋

みゆき

此卷は大原野の行幸の事を始に書歌にもうちきらしあさぐもりせしみゆきにはさやかに空の光やはみしと侍るなどにて名づけたりさて或説に初音の卷より此卷まで源氏三十五の歳なり此卷のはじめに卅五の九月十月十一月の事はこもりて即此大原野の行幸はその十二月にて次の年源氏三十六の二月までの事といふべしといへるに依ぬ

かくおぼしいたらぬことなく 是より下九行あまりは皆源のさまさまおもひ給ふ事なり  
此おとなしの瀧 源の下におぼすことを云 或説「いかにしていかによからんをの山の上より落る音なしの瀧  
いとほしく 玉かづらのため  
みなみのうへの 紫  
御おしはかりごとに ことふの卷に有し  
かるがるしかるべき 一度御子といひて今妻とせば

東御<sup>ニ</sup>赤色<sup>ノ</sup>袍<sup>ヲ</sup>親王公卿殿上侍臣六位已上着<sup>ニ</sup>麴塵袍<sup>ヲ</sup>これ皆青色の關腋の袍なりたかひのさうぞくは右のごとくことなり  
みこたち上達部など鷹に 細鷹つかふ人は皆衣裳を野にてあらたむるなり兩抄に見えたり李部王記鷹飼親王公卿着<sup>ニ</sup>地摺布衣<sup>及</sup>袴<sup>ニ</sup>或用<sup>ニ</sup>紫木蘭色<sup>ノ</sup>綺袴<sup>ニ</sup>小襖子<sup>御</sup>袋又西宮抄野行幸の條にもくはしひらいてみるべし

かりの御よそひ 狩衣をいふ  
まうけ給ふ 野にてきん料に設けてもたらするなり  
下に野にて改まる事有  
そゑの鷹飼どもは 諸衛は六衛府の佐以下をいふべし  
それは既に道のほどもあり装束なり  
きはひ出つゝ 萬の物見人  
その人ともなく 此行幸は  
あしよわき車など 抄輪の翳きをいふ  
うきはしのもと 桂河の浮橋にて前にいへり  
にしのたいのひめ君 玉かづらなり  
いどみつくし給へる人の 御供の人たちをいふ  
みかどのあかいろ 前にみゆ

かのおとゞ 内大臣にしらせば  
御こゝろさまを おとゞの聞てはうちくにもあらで  
源を聲になどことごとしからんなり  
おほしかへさふ 爰にて漸おもひさだめて先みやづかへにとおぼしなるはじめをあぐさふはすの延言おほしかへすなり

大原野の行幸とて 今上 野の行幸の事いと上つ代よりあまたあれどこゝは或説に引李部王記に延長六年十二月五日大原野行幸卯初上御與と有によりて書るなり次々の様も此記のむねに似たればなり  
みさわぐ 見騒  
うの時に 延長之例なり

朱雀より 李部王記に自<sup>ニ</sup>朱雀門<sup>ニ</sup>至<sup>テ</sup>五條大路<sup>ニ</sup>折<sup>リ</sup>至<sup>ル</sup>桂河邊<sup>ニ</sup>上御<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>就<sup>レ</sup>帷群臣下馬上御<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>群臣乘<sup>レ</sup>馬渡<sup>ニ</sup>浮橋<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>舟<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>梁<sup>ニ</sup>其上敷<sup>テ</sup>板<sup>ヲ</sup>自<sup>ニ</sup>桂路<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>野口<sup>ニ</sup>けふはみこたち 親王供奉の例多し  
うまぞひ 河馬副  
あをいろのうへのきぬ 或説狩記に野之行幸時左方鶴飼着<sup>ニ</sup>赤白椽地摺衣<sup>ニ</sup>右方鶴飼着<sup>ニ</sup>青白椽地摺衣<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>といへり又或説李部王記延長六年大原野行幸其装

うごきなき御かたはらめに わきめし給はねば人は御側をのみ見るなり 或説帝範曰人主之体如山岳焉高峻而不動  
わが父おとゞ 内大臣どのはよしといへど限り有て臣下のさましたればみかどはくらぶべきものなしとなり

御こしのうちよりほかに 或云昌泰元年野行幸時車中<sup>ニ</sup>之女<sup>ヲ</sup>爭<sup>ヒ</sup>瞻<sup>リ</sup>天顔<sup>ヲ</sup>或出<sup>テ</sup>半身<sup>ヲ</sup>或悉<sup>ク</sup>露<sup>ニ</sup>面<sup>ヲ</sup>云々見<sup>テ</sup>紀納言<sup>ニ</sup>記<sup>ス</sup>  
ましてかたちありや 其外の若殿上人などは  
さらにたぐひなう 殊更に此帝の御貌  
おもひなしのいますこし 主上は  
さばかゝる しかあらばを略せり  
おとゞ 源氏なり  
中將など 夕霧  
兵部卿宮も 螢なり  
右大將の ひげ黒  
やなぐひなどおひて 細 或説大納言の大將は行幸の日  
は弓箭を帯するなり大臣の大將は行年の日もやなぐひは負ずして隨身にもたしむるなり

女のつくろひ立たる 此は男にては源夕霧のよきすが  
たを見その外は女をのみ見なれ給ふ君故に女のけさ  
うしたるかほにくらべて人々を見おとしことにひげ  
黒を心づきなしと覺すを評せしなり  
わかき御心ちには 玉かづらの  
おとよのきみの 源

にてはたゞ源氏のおはする所院の名をいふのみにて  
尊號にはあらず  
つかうまつらせ 源も  
御けしきありけれど みかどの  
御物いみのよし 此は御狩に太政大臣供奉の近例無ま  
まに御物忌を申てとゞまり給ふ成べし

おぼしよりて 内侍のかみにとさきくゝのたまひけん  
を爰にてしらす文なり  
みやづかへはこゝろにもあらで 宮仕は本意にもあら  
す

蔵人の左衛門のせう みかどよりは 或云延長四年北  
野行幸の時蔵人左衛門尉源俊春を御使にて雉一枝中  
宮へたてまつらせ給へる例を以てかけりといへり是  
も李部王記なり

みぐるしき しらぬ人中に立出て  
前々はおもひつゝみ給ふを 今日見奉りては  
なれくしきすち みかどの御したしみ  
野におはしまし みかど大原野に  
ひらばりに 和名抄平張曰審比其或云親王公卿着平  
張座と李部王記にありといへり

きじ一枝 或説に付鳥枝の事葉高七尺五寸普通の柏  
木よりは葉せばく聞くして表裏に毛おひたり是を鳥  
付柴といふ一説云たもんしばといふ物なり年内は立  
枝をへだて雄を左にあげて付雌をさげて付之春は雌  
を上てつく春は雌を賞する故なり  
なにとかや 記者

なほし 改なり  
六條院よりおほみきおほんくた物 或説に李部王記に  
六條院被實酒二荷炭二荷火爐一具也此時六條院は  
宇多帝の御事なるべしそれをこゝにとりたれどこゝ

雪ふかきをしほの 此は御狩場の雪にたつ雉の跡有を  
以て即序として太政大臣の供奉の例をも今尋ておほ  
せよかしとの仰なりさて或説に仁和三年芹川行幸に  
昭宣公太政大臣にて供奉有しをふるきあとゝはよま

せ給ふといへり然るを三代實録の和仁二年十一月十  
四日芹川行幸太政大臣供奉の事見えず或説は覺束な  
し右の御製の次のことばの様を思ふに記者の此ごと  
くいひなしたるのみにて供奉の例は無かるべし此物  
語にさやうにとりなし書し例多し  
ためしなどやありけん かく書るは却て例無なるべし  
もてなさせ 舞應

よくもおしはからせ わが心を  
うちきらし 此は萬葉に打霧之とも天霧合とも多くよ  
みて打くもりてふ語なり良之反利なれば紀利と云も  
本は曇る事なるを躰に霧とはいふめり然れば此の歌  
の朝ぐもりせしといふは徒らにかさなれり此記者も  
萬葉などくはしからねば此語を霧わたる事とのみお  
もひしにやめをきらしけんともゆるも目をくもらし  
けんてふ意なるをや

源をしほ山 此行幸よろぶふるき例有てせさせ給ふ中に  
ことを多くかへさせ給ふをかねてかく御野よりお  
はん使給はせる屏さをもそへてけふばかりなる云々  
とはよみ給なるべし  
ひがことにやあらん かゝるおもき御事を心もて書な  
せしをはかりてかくいひのがるゝなるべし  
またの日 行幸の翌日

みゆきには 眞雪に行幸をかぬ  
そらの光やは 天皇を添奉る  
おぼつかなき御こと 天顔又みやづかへなどの事ども  
なりと或説にいへり  
うへもみたまふ 孟紫上なり  
しかじがのことを 源詞 かのみやづかへの事

にしのたいに 玉燈へ源の御文に  
み奉らせ給ひてきや ては多利反にて給ひたりけりや  
といふなり  
かのことは 細内侍のかみに參らん  
けしきはみても 少しまめだちて書給ふなり  
あひなの 遮無なり

中宮かくて 秋好  
源のかたよりなり  
こゝながらのおぼえに云々 源は下心ありてとかく出  
したてんと覺せど人にはかくはかり有とのみのた  
まひて有なり  
かのおとゞにしられても 内大臣の御女なるを顯はし  
て參らせんも 細實父内のおとゞの御子の事をあら

はしてまゐり給ひても又弘徽殿のおぼす所いかゞと  
なり

わか人のさもなれつかうまつらんに 細主上へは誰も心  
をとゞめ給ふべきとなり

はかかる思ひなからんは 入楚或説玉かづらは中宮女  
御にはかり有さもなき他のわかう人の見奉りては  
したひ奉らんものぞとなり

あなうたて 紫

こゝろもて宮づかへ はかかる方ならん人とても女  
のかたより

いでそこにしもぞ 細源の紫をのたまふ

また御かへり 源より文ばかりなりしを玉かづらの歌  
にてこたへしつれば今また源のこたへ給ふなり

あかねさす 心は明らけし あかねさすは赤丹アカニのひか  
り有をいへば萬葉には日月またものゝいろに冠らせ  
いへり又くもりと霧と此の歌のごとくとりなせる  
はよし

なほおぼしたて 宮仕を

とてもかうても 源のおぼす

御もぎのことこそ 玉の

いともおもほさぬ さまで大きにとも  
よだけく たけき事としてといふはわが心つまるすとす  
るをいふ然ればよだけくは時世のならばしのつよき  
なり下に二所此語あり

いとめでたう 萬の用意をことに爲給ふなり  
としかへりて 明る年  
二月にと 裳着を

女はきこえたかく 玉鬘 此女君はかく世に聞え高く  
且漸むび行て御名のかくれ有べきほどならねど猶源  
氏の御娘とて深き窓の内なる程はその實方の氏神の

御とがめあらはれ給はねば源氏の御娘のやうにま  
ぎれ聞えて過し給ふなりしかるを今源内侍とて宮づ  
かへに出給はば藤原の氏神の御心にそむきそれにつ  
けても終には藤内大臣の御娘なる事顯はれん時はわ  
が私心有てふ後の名も立ぬべしとなり

ながくし 名隠し  
ほどならぬも ねび給ひたるなり  
こもりおぼする 深窓に

氏神の 實の藤原の

御とがめなどあらはならぬ

も共に顯はれざるなり

此もしおぼしよることも 内侍のかみの事  
物ながらなほくしき人のきはこそ云々と隔  
てつやくなり

うたゝ有べし これをやすく心得んには轉の字をうた  
たとよむもいかに轉じても同じやうなるてふ意なり  
さてこゝはいづれになして思ふにもよろしからぬ事  
といふ意にて上の神慮とかくれ有まじきとわざとが  
ましきといふ語どもをいにつにいひむすびたるなり

なほくしき人の たゞ人と云に同じ  
いまやうとて 今の世のならはし 源の御子とて宮づ  
かへに出し立て後又實は藤内大臣の御子なりといひ  
改んなどは今時のたゞう人めきてかろくしきわざ  
ぞと思しめぐらし給へり

おやこの御契 いかにもおのづから  
御こしゆひ 此物語に明石娘君は秋好中宮今玉かづら  
は父大臣のゆひ給へばをこにても女にてもゆふ物  
なるべし且裳着は男の元服のごとし

大みや 三條宮

内大臣の御答

中將の君 夕霧

他にかゝはる心のそら無なり

源

三條宮うせ

給はば玉かづらのきみ祖母の五月の服あるべしとな

り

父内大臣へ顯はさずば大

宮の服を玉かづらの着給ふよしもなければ知つゝき

すて過さんば罪ある事となり

大宮

源

大宮の源を

是より源の宣ふ 萬

葉に異殊などの字をけと訓めり爰はさのみことなる

御事もおはさすといふなり

夕霧

源今は

おほやけにつかふる人ともなくて 太政大臣はさした

る職のなければ大かたにては参り給はず  
 よだけく まへにいへると同じ意なるが中にこゝはこ  
 もりゐるべき時世につけたる心々のつよきともり  
 ゐるよのかたにつよきとのかはりのみ  
 世の人は 源より  
 よはひなどこれよりまさる人こしたへぬまで 兼或説に  
 大公望四朝など老て仕へしことをいへどこゝはむか  
 しも今もと書たればさる意まではなくして只仕ふる人  
 の世の常をいふのみなるべし  
 かゝまりありくためし こは老かゝまれるなりへつら  
 ふには非ず

年のつもり 大宮ののたまふ  
 又すこしのびぬる 命も  
 さべき人々にも 兼葵上致仕相國  
 出たちいそぎをなん よみの旅ちに  
 さわがい 騒  
 さることゝもなれば 理りなりと源のおぼす  
 うちのおとやは日へだてす 源  
 きこえしらせん 玉鬘の事  
 おほやけごとのしげきによ 大宮  
 なにさまのとにかは 此さを清といふは連語の清濁を

しらぬ人の説なり  
 思はれたる事も 雲井かりの事  
 けにくく 氣悪  
 もてなすにつけて 内大臣の  
 などもしの侍れど 大宮のおとやへ  
 いととけがたき人のほん上にて 一度いひかゝりたる  
 事はをれがたき性とみえたり 前にも内大臣の此心  
 くせ成事出  
 うちわらひ 源  
 いふがひなきにゆるして 既にをさなきどちの事は今  
 更にいふがひなきわざごととおとやもまかせすてたま  
 ふやうに聞て其よし源のかすめ給ひしとなり此事ま  
 へにはみえねどさる御ことばの有しをこゝにてしら  
 するなり

こゝにさへなん 源氏より  
 いときびしく 内大臣  
 いさめ 禁の字をよめり  
 なにさまで 源の口ませしを悔なり  
 よろづの事につけてきよめと 萬のことを潔祓する事  
 のあれば此事も清め給ふ様もこそあらめされど此末

の世となりて濁りふかければそゝぎ清むべきほどの  
 清き時を待ともえがたからんと潔の方にて水の詞も  
 てのたもふめり物心は立にし名は改がたかべいを内  
 大臣はいつを待給ふにやとそしりの語なり  
 すゝい給はざらん 潔  
 おちゆくけちめこそ 同じたかき家にてもむかしより  
 はおとり行よのならひなればさのみますぐにおぼす  
 とおぬけ出てよきこともあらじにと内大臣の御ため  
 をおもふよしなり

さるはかの 内大臣  
 しり給べき人を 玉鬘  
 おもひまがふる事侍りて 實は内大臣の御子なるをし  
 らで初めは我子のよしおもひまがふ筋有てよびとり  
 つるが其後我子といひしはひがことぞといふことも  
 有しかど定かに尋ね極めもせでたゞ子のすくなき儘  
 にかこつけてよし實の子ならずとも何ばかりのあや  
 まりかはとてやしなひておきながらはたいとむづか  
 しようもし侍らでとしを經しとなり  
 ふいに 河不意  
 そのをりは たづねとりし

ものゝくさのすくなきを 御子のかすすくなきなり  
 ひつびも 親しみなり  
 今上の  
 いかでかきこしめしけん 玉の事報聞に達して侍りに  
 と被仰となり  
 内侍所  
 かの所のまつりごと 延喜式内侍司一百十人侍二人  
 典侍二人堂侍四人女婦二人云云  
 故老 典侍  
 こらうのすけ 兼古老の内侍のすけさらぬ人も内侍の  
 かみを望むとなり典侍任侍侍例弘仁に典侍浦虫天  
 安に従三位廣井女王應和に藤原灌任侍侍  
 さまざまに申さるを 望

家のいとみなたてたらぬ 高き家の女など且其家の事  
 にあづからぬ人をいにしへより侍に召といふなる  
 べし  
 かしこきかたの 才など有てことの例をよく知たる人  
 を撰み給ふときはさる家高からずよせ重からぬ人も  
 年庸によりて侍にもなるのぼる事もあれどさる撰  
 にあたる人なければかの家高く人のおぼえも高き玉  
 かづらを任せんとうちゝに勅有しとなり  
 その人ならでも 孟必しも高家にあらねども  
 年月のらうに 孟奉公の勢なり

宮仕はさるべき いで宮仕とて出立んには上下ほど 御なやみに 大宮の  
 ほどにつけて女御更衣なども聞えて寵を請て時めか ことづけて 言  
 ん望こそ心高けれ只その司の公事をのみしたゝめし げにをりしもびんなう 御なやみの節なれば  
 らん内侍などに立出んは高き家の人としてはかる よろしうものせさせ けふみ奉れば御なやみは  
 がるしきやうに覺えしをよくおもへばさもあらずた つたへものせさせ 内大臣  
 とひ女御などと聞ゆとも時めかぬは益なし内侍のか かしこには 内大臣なり  
 みといふともその人よりこそ限なき寵を得るも有べ なのりする人を 近江の君  
 けれとなり且玉かづらはみかどのしたはせ給ひしこ いかなる心にてかくひきたがへ いかで玉かづらは内  
 と下にみゆるなどをてらしみるべきなり  
 さるところの 内侍所  
 よはひのほどなど 今玉かづらのよはひをとひきくに  
 昔かのおとゝの物がたりし給ひしほどのものがたり  
 し給ひし人の程にて今もよりく 尋ね給ふと聞くす さるやう侍ことなり 細源の詞 師さる様子ある事と也  
 ちに全くあたりつればそのよしいかにもとひさだ たづね聞給ひてん 終には  
 むべきを對へならではいひ明らめんよしなくはた對 なる人 直  
 面のをりなければおもひ設て申せしをとなり らうがはしう 亂  
 かの御たづねあべいことに 内大臣の尋給ふべき人と 人にもゝらせ 大宮も  
 なり  
 ついでなくては對面侍べきにも 内大臣に  
 せうそこ申しを 御こしゆひの事  
 此年ごろうけたまはりて 源はよろづのよろしきを聞  
 て御子となりしにやと大宮のとりあへぬ御ことばか  
 といふ説によるべし

んとは宮へ入せ給ふ時中門などへ御迎に出てもては  
 やす人あらじといふなり  
 おまし 御座  
 中將は御ともにこそ 夕霧  
 ひつましうさるべきまうち君 内大臣へむつましき諸  
 臣たちをも  
 六條のおとゝの 文の詞  
 人めいとほしう 外見  
 なにごとにかは 内大臣  
 このひめ君 雲井鷹を  
 みやもかう 大宮なり  
 おとゝも 源なり  
 とかく申かへさふ いなとは  
 つれなくて 夕霧の  
 人の御ことに 源をさす  
 御心をさしあはせ 宮と源と  
 いとけしからぬ 内大臣の木性をいふ  
 おとゝも 源  
 かたぐにかたじけなし 參らでは  
 たけだちをゆるかに たけいと高きをいふならん  
 しょうとく 宿徳の字なり長老を宿老といふ類にて老て  
 徳の長せるをいへり  
 おもゝち 面もちなり  
 あゆまひ 歩みを延てあゆまひと云なり  
 さくらの下がさね 雅助抄に上達部などの櫻の下がさ  
 ねとてできるは表はからあや織物なれどもうらこき紫  
 に染るなり花の櫻にはあらず云々といへり後の抄ど  
 もにこゝをも花のさくらと思ひたる注有はあやまれ  
 る事知るべし別記あり  
 さくらのからのきの御なほしいまやう色の御を引かさね  
 て 源のさくらのからのきの御直衣の事はいと前にも  
 見ゆ今様色は紅梅をいふ  
 かうしたゝかに引つくるひ 源は光りうつくしう且あ  
 ざれたる大君すがたなれば内大臣のものくしうき  
 らくしきにむかへては源は物げなきかたにみえ給  
 ふといふなり爰は大宮をほむるやうにいへど實はさ  
 ならぬ事前にもみえたり  
 なすらひても ふと見たる心をいふのみ  
 君達 内大臣の  
 藤大納言春宮大夫 こは内大臣の弟たちなり



御子ども、その藤大納言などの御子どもなり

なり

わざともなきに けふはきとしたるならねどもと云ふ

年 年月なり

なり

よはひ 互の齡なり

おの／＼云々 内大臣より始めて其子たちの幸勝れ給

ことかぎりありてよだけき 大臣と成ては身のほどの

へるをよの物がたりにしたるとなり且幸の下にて切

限り有て軽々しくもせられずそのほどのふるまひを

おとやは 源なり

なすを時世に隨ふ事のたけきといふなり此詞に違有

はかなきことにつけて 雲井鷹の事などにつけてなり

ど本は同じ事なれば用る物によりてことなるやうに

さぶらはではあしかりぬべかりけるを 内大臣の源へ

聞ゆるのみなり注どもは皆あたらす 此注御本には除

申給ふ

その御いきほひをも かぎりある行粧をも畧してとな

御かうじや 細勘當なり

おもなれて 目馴といふに同じ

かんどうは 源

たい／＼しき 退々

からしと思ふこと 孟青表紙にかうじと書り

はねをならべたるかすに 源の執政をゆづり給ふにつ

このことにやとおぼせば 内大臣

けてはねをならふる數となりたりといふなり一本に

むかしより 源の詞

はねをならべたる數にも及び侍らでうれしきと有は

こゝろのへだてなく 互に

次のことばとこと重りて聞ゆればとらず

うち／＼のわたくしごとにこそは 内大臣は秋好中宮

思給へしらぬには侍らぬを 源の御かへりみなる事を

を源の入内させられて弘徽殿の時なくなれるなどの

げにおのづから 源の年よはひにそへて云々と有に對

事源は雲井鷹の事などなるべしされどこは私事にて

ほのめかし出給ひにけり 玉かづらの事を

凡てのこゝろざしはむかしにうつりかはる事なしと

おとやはいとおはれに 内大臣

そのかみより 内大臣

ひ給ひし事なり

なにのついでにか かの雨夜の事なり

さすがにむすぼれたる よろづはとけて此事のみ

もらしきこしめさせしこゝちなん 雨夜の物語

今夜も御ともに 内大臣

はか／＼しからぬ 近江の君

さらばこの御なやみも 源

かた／＼につけてさまよひ 内大臣の子ぞとてかたが

かならず聞えし日 玉かづら裳着

たにさまよふが見ぐるしきになり

又いかなる御ゆづり 弄關白をも源のゆづり給ひしに

又さるさまにて數々につらねては哀に思ひ給へらるゝ

又何事をかと 玉かづらの事

我子とてあまた等とりつらねてみれば又あはれに思

かゝるすぢとは 玉かづらの事

はる／＼につけても玉かづらの事はおもひ出られしと

うちつけにいといふかしう 玉意の事

なり

ふとしかうけとり 源のかく語給ふとて

まづなん思給へ出らるゝ 玉かづらをば

源の 尋え給へらんはじめ その初めいかにして尋ねとり給

かのいにしへの雨夜の物語に 筈木の巻

ひげんと内大臣のさま／＼おもひはかるが中に夕顔

おの／＼あかれ給 源も内大臣も

にあひ給へらんとは露おもひよらねばたゞ此女君の

かく登りきあひて 是より源のたまふ

よろしきを源の傳へ聞てむかへいれけんが紫上など

姫君の御事を 葵の上のおはせましかばとなり

にはいかりてたてたる御かた／＼の類ともせられね

ありしにまさる 源の御さまをいふ

ば暫御子なりといはせて内々に心かはさんとしつら

あまごろもは 大宮は尼

んもはた御子といふからに人間をおぼせば今さらせ

中將の御ことをば 雲井鷹の事

んかたなくてわれになのり給ふならんさらばわれに

一ふしよういなしと 或人いふ内大臣の心にあはぬ所

おきてはねたく口をしくおぼせど又女君の上にては

有ともこは前後を思案して用心せらるべき所なるをと思

わざとだにかの院には立よらせまほしき事なればさ

る下の心などはきずならず人のおもひなん事もおと  
るべきわざにあらずとなり

やむごとなき 紫など

女御などの こきでん

思ひよりのたまはん 源の

十六日ひがんのはじめにて 或説云彼岸齊法成道經曰

一切衆生依持三二月齊十方世界一切衆生離苦

得樂靈瑞而已乃至中春中秋晝夜各五十刻ヲ時正と

いふ仍吉日多歟

契沖日右の經は藏經の目錄にみえず偽經なるべし總

て彼岸といふ事は此國にて有事なるべし蜻蛉日記に

もみえたりと

かうがへ申ける 陰陽の考申なり

よろしくおはしませば 大宮の御病

れいのわたり給て 源の玉鬘の御方へ

いとこまかにあべきことども 内大臣へ對面の時ある

べきさま

おぼすものから ものながらの略也 總て實の親とて

も源のごとくあはれにおもひあつかひ給ふ心は有ま

じきやとはおぼしながら猶御おやにあひなん事はう

れしきなり

中將の君 夕霧

かゝることの心を 玉かづらの事をなり

あやしのことどもや 夕霧

むべなりけりと思ひあはする 野分の日源氏の玉かづ

らにたはぶれ給ひしを

かのつれなき人の 雲井鷹

なほもあらず 直もあらずとはたゞならずてふに同じ

くてなほざりにおもひおかれぬ意なり

思ひよらざりけることよと はやく玉かづらへけさう

の心なかりし事よとなり

しれなくしき心ちす 我ながら思なりけりとおぼせり

有がたき 記者

まめくしき 夕霧の

その日になりて 御裳着

忍びやかに 玉かづらへ

きこえんにも 文の詞

いまくしき 尼にてましませば

ながきためしばかりを 命

あはれに承り 細我御孫なるのよしなり

御けしきにしたがひてなん いみいまざらん御けしき

に隨ひてさぶらう人はからひ給へといふ意なるべし

大宮 ぶたかたに 玉かづらは内大臣の御子とすれば大宮の

孫なり源の御子といひても葵上のまゝ子とせば又孫

なりしかればいづれにいひてもはなれずとなり

殿もこなたにおはしまして 源なり

いたしや 古體の文のやうを先ほめてさるを今は甚し

き御老の手やといふ意なり

いとかく御手ふるひにけりなど 振ひなり上にわな

きといへるに同じ

そへたる事のかたきなり 三十一字の中に玉くしげの

ことをつくしいひて残る字も少きにいづれにても孫

なる理をことごとく添たるは成がたき事ぞとほめて

そしるなり

中宮よりしろき御も 秋好なり

御くしあげのぐ 御髪上の具

からのたきもの 其もと唐より傳へしは多けれど今更

かくいふは其ころ唐より渡たるが有ていへるなるべ

し

御かたぐ 花散里明石上などなるべし

人々のれうに 女房たち

さばかりの御心ばせどもに すぐれたるいどみ様をい

ふなり

東の院の 二條院の東院

人々も 空蟬など

かたのごと 河如形なり

あをにびのほそなが たゞのにびいろならで青にびは

いむいろならねど古跡の色にて此ごろはきる人なき

をわざと書るなりけり

おちぐり 落葉色なり

しらざりみゆる 一本にうはしらみともあれば紫の色

のあせたるなり年月にたくはへおきたるをいふ成べ

し

つゝみいとうるはしうて 衣箱のつゝみの事假名装束

抄にみゆ

いとあやしけれど きぬの色

おいらかなり 細おとなしきなり

殿御らんじつけて 源なり

あやしきふる人にこそあれ 源の詞

物つゝみしたる人はひきいきりしづみりたるこそよけれ

右の文にしらせ給ふべき數にも侍らねばつゝましけれどと有をうけてかくはのたまへり  
 さすがにはちがましや 上に御かほのあかみぬと有より見れば源の今はかけはなれておはする人とは誰もしれど猶しかながらに身にとりてはちがましく覺すといふことなり  
 かへりごととはつかはせ 玉かづらの  
 はしたなく 此返事なくは  
 ちゝみこの 故ひたちの宮  
 例のおなじすぢの歌 玉にまだ逢ひまゐらすることをも得ぬはわれからなりと身をうらみらるゝとなり  
 我身こそ 末つむ  
 しいかみ ちゝみたるなり  
 ゑりふかう 或説に彫入たるやうにといへりといふは  
 さもあらん歟  
 おとゝ 源  
 にくきものゝ ものながらの畧  
 ましていまはちからなくて 細侍従などありし時はあつらへ給ひしを今はせん方なくおもひせまりておはしけんとなり

あやしう こはふみのこたへをも源の書給ふに人の思ひもよるまじき詞どもを書給ふといふ人あり  
 さらでもありぬべき かくあらでもおくべきなれどにくさに  
 源から衣 此君の歌末つむの卷玉かづらの卷此卷の右にもから衣のことばあればかくよみて笑ひ給ふなり  
 君いとほひやかに 玉かづらなり  
 めづらかに聞給ひし後は 玉の事を  
 いつしかと 對面を  
 とく參り給へり 十六日  
 みたまふも 内大臣の  
 内にいれ奉り給 玉にたいめん  
 すこし光みせて か様の裳ぎなどの時も例はかゝる女  
 君のあたりの燈はほのかにする成べし  
 いみじうゆかしう 内大臣の玉かづらを  
 ひきむすび給ほど 裳のこしをゆふなり  
 え忍び給はぬ 内大臣  
 こよひはいにしへさまの いはふ時故に夕がほの事は  
 かけずとなり  
 なにのあやめも 玉かづらのかくておはすこと

げにさらにきこえさせやるべきかた 内大臣源の懇なる事をいへり  
 御かはらけまゐるほどに 師草子地なり  
 かしこまりをば 内大臣の語なり  
 内大臣  
 うらめしや 後撰に裳の腰に書つけて見るといふ女におくりし黒主「何せんへたの見るめを思ひけん興津玉もをかつぐ身にして  
 なほつゝみもあへず 入古さまの事はかけじ宣へ共  
 しほたれ給 海士といへるよりの詞なり  
 殿 源  
 よるべなみ 父の方へやすがなくて我によりしを今までたづね給はぬにと恨かへし給ふ  
 いとことわりになんと 内大臣  
 みこだち 内大臣の御子  
 御けさう人も 兵部卿宮鬚黒などなり  
 うたがひたまへり 先に夕霧にも忍びてしらせ給ふといへば外へはいとかくせしなり  
 人しれず思ひしことを 此柏木と辨の君は  
 御このみ 好  
 中宮の 秋好

きゝ給へど 源  
 なほしばしは 源内大臣へ申給  
 世にそしり 此大臣のきはくしきには餘りにことごとしからんとてしすめ給ふなり  
 たゞ御もてなしに 内大臣  
 御おくり物など 源より裳着の録例  
 になく 似  
 いまはことづけやり給べきとこほりもなきを もぎ  
 など有てこそなどのかこつけに有けんを今はさることばもあるまじきと宮のたまふなり  
 うちより御氣色あることを 内侍のかみにとかへさひそうし 復奏なり  
 ことさまの事は 兵部卿ひげ黒などへの事  
 ほのかなりしさまを 玉かづらの  
 いまぞかの御夢も 地 盤の卷にみえたり  
 女御 こきでん  
 ばかりにはさだかなることのさま 内大臣  
 このさがなもの君 近江の君  
 中將 柏木なり  
 少將 孟紅梅なり

ふたかたに 源と内大臣  
あうなげに 奥無にて淺々しきなり  
あながま 近江君  
ないしのかみに 玉かづら  
御前のつらく 女御をさす  
ないしのかみあかは 柏木辨などの  
ひどうにも 河非道なり  
はらだちて 近江  
せうくの人は 今もいふ俗語なり  
しぞきて 退  
かくいふにつけても 柏木  
げにしあやまりたること、 細近江君尋出したる事は  
近頃誤りたるとなり  
たぐひなき御有様を 右におりたち仕るといひしをい  
ふ  
よもおぼさじ 女御の  
御心を 近江  
かたきいは 一本岩をもとありて其下の語に叶ふ 或  
説神代紀に天照おほみ神の堅庭をむかもに踏ぬき なるべき人ものし給やうに 玉かづらの内侍  
あわゆきなすくゑはらゝかし給ふといふをかたきも 岩 夢にとみしたる 富

のといひかへしなりといへりこはよくもかなはぬや  
うなれど次の天の岩戸さしこもりなんやと有による  
に右の意なり古事をいひかふるは此文の常なり  
あまのいはと 大御神のごとく近江もはらだちて引こ  
もりたらんかた中々によるべしとわらふなり  
ほろくとなきて 近江君  
たゞ御前の こきでん  
いそしく 紀によく仕れる人をいそしと名付給へる事  
あり依て勤の字を訓り  
ざうやくをも 雑役  
おとゞ此のぞみをき給ひて 内大臣  
いづらこのあふみの君 内大臣  
をといとげざやかに 紀にこたふる所に唯々ともうす  
といへり  
いとつかへたる御けはひ 今まで女御へいとつかうま  
つりし様をみるにおほやけ人めきたりとのおたまふな  
るべし

むねに手をひたるやうに 今さらむねを打たりといふ  
なり  
ゑみ給ひぬべきを 内大臣  
いとあやしう 抄内大臣の詞なり  
さもおぼしのためはましかば 内侍かみの事  
おほきおとゞの御むすめ 玉かづら我娘とは顯し給は  
ぬなり  
まうしおみをとつりて 詞を綴也 入楚官位を望  
む時申文をかくつねの事なり女には聞えぬ事なれど  
睨してのたまへるなり  
びいしう 美々しうなり  
うへは 今上  
すかし給ふ 今の俗にもいへり  
やまとうたは 近江君  
つまごゑ うたひ物の助音するをつま躰といひしにや  
御とくを 徳  
なぐさめける むねはらを和らぐるをいふ  
世人は 此君のよろしからぬはぢをまぎらはしがてら  
かくあつかひたまふといふなり

ふたかたに 源と内大臣  
あうなげに 奥無にて淺々しきなり  
あながま 近江君  
ないしのかみに 玉かづら  
御前のつらく 女御をさす  
ないしのかみあかば 柏木辨などの  
ひどうにも 河非道なり  
はらだちて 近江  
せうくの人は 今もいふ俗語なり  
しぞきて 退  
かくいふにつけても 柏木  
げにしあやまりたること、 細近江君尋出したる事は  
近頃誤りたるとなり  
たぐひなき御有様を 右におりたち仕るといひしをい  
ふ  
よもおぼさじ 女御の  
御心を 近江  
かたきいは 一本岩をもとありて其下の語に叶ふ 或  
げにいかにあひたらん 似あひたらんとなり  
説神代紀に天照おほみ神の堅庭をむかもに踏ぬき なるべき人ものし給やうに 玉かづらの内侍  
あわゆきなすくゑはら、かし給ふといふをかたきも 夢にとみしたる 富

のといひかへしなりといへりこはよくもかなはぬや  
うなれど次の天の岩戸さしこもりなんやと有による  
に右の意なり古事をいひかふるは此文の常なり  
あまのいはと 大御神のごとく近江もはらだちて引こ  
もりたらんかた中々によかるべしとわらふなり  
ほろくとなきて 近江君  
たゞ御前の こきでん  
いそしく 紀によく仕れる人をいそしと名付給へる事  
あり依て勤の字を訓り  
ざうやくをも 雑役  
おとこのぞみをき、給ひて 内大臣  
いづらこのあふみの君 内大臣  
をといとけざやかに 紀にこたふる所に唯々とまうす  
といへり  
いとつかへたる御けはひ 今まで女御へいとつかうま  
つりし様をみるにおほやけ人めきたりとのおたまふな  
るべし

むねに手をひたるやうに 今さらむねを打たりといふ  
なり  
ゑみ給ひぬべきを 内大臣  
いとあやしう 抄内大臣の詞なり  
さもおぼしのたまはましかば 内侍かみの事  
おほきおとこの御むすめ 玉かづら我娘とは願し給は  
ぬなり  
まうしぶみをととりつやりて 詞を綴也 入差官位を望  
む時申文をかくつねの事なり女には聞えぬ事なれど  
咲してのたまへるなり  
びやしう 美々しうなり  
うへは 今上  
すかし給ふ 今の俗にもいへり  
やまとうたは 近江君  
つまごゑ うたひ物の助音するをつま聲といひしにや  
御とくを 徳  
なぐさめける むねはらを和らぐるをいふ  
世人は 此君のよろしからぬはちをまぎらはしがてら  
かくあつかひたまふといふなり

源氏物語新釋

藤袴

卷の名は「おなじ野の露にやつるゝ藤ばかまあはれ  
はかけよかごとばかりもてふ歌により詞にはらに  
とあり源氏三十六の八月九月の事なり三月より七月  
までの事ははぶけり  
内侍のかみの 玉かづらは  
たれもゝ 源内大臣など  
いかならん 玉かづらの心  
親と思ひきこゆる人の 源をさす  
さやうのまじらひに 宮づかへ  
心より外にびんなきこともあらば 今上の御むつび  
中宮も女御も 秋好もこきでんも  
我身はかくはかなき 中宮弘徽殿に御心おかれ給は  
共によりたのむ二かたの親の御うしろみもいかあ  
らんその上に内の御覚えもあさくは何方へもつかぬ  
身となりやせんとなり  
たゝならず思ひいひかて人わらへなる 是よりは他  
にねたむ人の心詞をいふ

うけび うけびは上つ代には祈と誓にいひたるを後に  
はのろふ事にもちみつ  
物おほしするまじき 玉かづら  
かゝる有さまも 宮づかへをいふ  
このおとゝの 源  
人のおしはかるべかめる 源との中  
まことのちゝおとゝも 内大臣  
うけばりて 前にいひつ  
けざやぎ 既に出  
とてもかくても見ぐるしう 前にみゆるごとく中宮女  
御の御心をはかり又源の御心にまたがふべきには  
あらぬなどをいふ  
かけくしき いづれともつかずといふなり  
おとゝの君の 源  
源内大臣  
右のことゝもを思ひて默然としてあ  
るをいふ  
うすきにびいろ 祖母の服にて薄鈍色をき給へりさて  
三條の大宮なくならせ給ふ事こゝにはじめて書たれ  
ど既過にし三月廿日に薨給ひしよし藤のうら葉のま

きにて見ゆ

宰相中將 細夕霧の参議し給へる事行幸と此卷の間に  
有しよしなりこゝにはじめて宰相と見えたり  
玉かづらと おなじ色の今すこしこまやかなる 夕霧は同じ御孫な  
がらことなればなり 櫻を巻  
えいまたまへるしも 夕霧の玉へ  
はじめより物まめやかに 玉の方よりも  
もてはかれて 今あらざりけりとて 兄弟にはなり 細今更にこと  
ごとしくし給ふべきも如何となり  
人づてならで有けり たゝちに女も物のたまふなり  
殿の御せうそにて 源氏より玉かづらへ  
内より仰 細内より夕霧を御使にて源へ玉かづらの事仰  
給へるを即又夕霧をもて玉かづらへ源の仰おこせ給  
ふなり  
やがて 即  
此君の 夕霧 玉燈源へこたへ  
御かへりおほどかなるものから 兄弟の上にもまじき筋と  
うたてあるすちに思ひしを おもひとゝまりしをなり

聞あきらめて 今兄弟ならぬよしをなり  
夕霧 なほもあらぬ たゝもあらぬ心ちの添と云なり直と  
たゝと同じ意に落めり  
此宮づかへを 玉の 上の仰ごとなれば源のかくは傳  
へのたまへどなほとりはなちて宮づかへには出し給  
はじかしとなり 源の  
覺しはなたじかし 源の  
をかしきさまなることの 其中にと云を略く 源の御  
かたぐゝ互におもしろくみやびをかはし給ふ御中と  
いへど又此女君をしも重ね給はふしと必出来べ  
しなどおもはれてふと夕のむねつづるといふなり  
たゝならずむねふたがる 抄夕霧も何とやらん心がか  
りなり  
ちかくさぶらふ人も 女房たちなり  
そらせうそをつきくしう 花源の御せうそにて  
もなき事をいふなり  
いらへ給はんこともなく 玉かづら  
うちなげき給へる 歎息なり  
御ぶくもこの月 藤のうら葉の卷に大宮は三月廿日に  
うせ給ふとみゆれば五月の御服にて八月廿日頃にぬ

ぎ給ふべきなりその除服の祓は日を撰むに廿日のほどによき日なければ十三日にと定めて河原に出給ふべきとなり

のたまはせつ 源氏のなり

なにがしも 夕霧

人にあまねく哀らせじと 猶内大臣の御娘なる事を暫

くつゝむ

いとらうあり 年鶯の功有よりいでてすべてもの心得

たるをいふ

中將もらさじとつゝませ給らんこそ 夕霧の詞なり

玄のびがたく 大宮の御別れを

ぬぎ捨侍らんことも 後拾遺に「おうひかねかたみに

そめしすみ染の衣にさへもわかぬる哉

さてもあやしう 言を起していふ そこにはいかで人に

しらせで服ぬぎ給はんとし給ふやと先とがむるなり

夕とおなじく服き給ふにつけてかなたの御むすめな

らばいかでかくてはすませ給ふらんといぶかしきな

り

あらはしきぬの 此御服着給ふにて内大臣の御むすめ

なる事顯れたりといふなり詞はいたいきぬより轉じ

ていへるならむ

何事も思ひわかぬ 玉鬘のこたへ

ましてともかくも 夕霧だにわきがたきとあればまし

てとなり

たどられ侍らねど ことの心をば尋ねしり侍らねど只

此御別れのことぞ哀なるとなり

かゝるついでにとや 夕霧の

らにの花 蘭なり こはふちばかまのことなりらんの

音をらにといふはけんこしをけにこしといふ類なり

「むさし野のむかひのをかのくさなればねを尋ても

哀とぞおもふといふをもてその本をたづぬれば兄弟

ならねどむつまじきゆかり有といふなるべし

も給へりける 御本にはかく

うつたへに ひたぶるたる事に萬葉にもよめり

夕霧 おなじ野の 同じく藤衣きたるゆかり許のなさけもあ

れといふに且同じむさし野の紫をこめたり

尋ぬるに 夕霧の歌は「むさし野のむかひの岡の草な

ればさばかり遠く尋ぬる野の露のゆかりならばうす

さいろともかこたましを是は同じ野の草にてかやう

御あたりはなるまじき 兄弟なれば

かたはらいたければ 記者

また内に參らずといへどさる勅有

て源も覺し定たる上なればかんの君と書るなり次に

宮仕を女のまぶくにおぼすと書るをもて疑ふ説も

あれどそは玉の心を源のかたり給ふのみなりまぶま

ぶなりとてやむべき事ならぬもうたにて知らるゝな

り

心うき御氣色かな 夕霧の詞

あやしくなやましくなんとて 玉かづらの

入はて給ぬれば 奥へ

いといたくうちなげきて 夕霧

今すこし 紫のうへ

身にしみて 野分の朝

おまへに 源の御前

出給ひて 源の

御かへりなど 夕の中

この宮づかへを 源

まぶくゝにこそ 玉かづらの御返事のやうをきゝ給て

玉の心のうちを推量て源の宣ふなり

にけちかくみる外に深き心はあらんものかはとなり

さて夕霧は懸想なるを女は哀らぬ顔にてたゞむつま

しき筋にとりなしたり

すこしうちわらひて 夕霧

あさきもふかきも 此のこゝろは次のことばどもに見

ゆ

いとかたじけなきすぢを 御宮仕にまわり給はん人な

ればなり

いひ出ば 申出ばかへりて疎み給はん

中々おぼしうとまんが とこめつれどもとなり思ひのふかきさまをいはんと

てなり抄儀

今はた 前にはかごとばかりもなどいひたれどほに出

そめて俄に切になれるこゝろを古今「わびぬれば今

はたおなじなにはなる身をつくしてもあはんとぞお

もふてふ歌もていへり

頭中將のけしきは 柏木

人のうへになど思ひ侍けん身にてこそいとをこがましく

夕は兄弟とおもひて思ひはなれて有しをと思へばを

こに心おそかりし事となり

かの君はおもひさまして 今は柏木は

みやなど 登兵部卿

れんしたまへる 練の音にてかゝる事に物なれたるを

いふ

うへをみ奉りて 冷泉院を

ほのかにも見奉りて 帝をなり

此事もかくものせし 宮仕の事

さても人さまは 玉かづらの人がらを夕のとふ 或は

宮仕し給はん品或は人の妻としての様子と何れにな

してよくたぐひ適ひ給はん君にやと先問てさて夕の

意を次に申給ふなり且此源の答は下に右の二つを舉

てのたまへり

中宮 秋好

いみじき御思ひありとも 今上の玉かづらに

立ならび 中宮弘徽殿に

宮はいとねむごろに 登兵部卿なり

わざと 内よりは

さるすむの御みやづかへにもあらぬ 女御などにせら

れん筋ならぬなり

ひきたがへ 登の宮を

かたしや 源こはいと定めがたきことゝなり

大將さへ ひげ黒

すべてかゝるとの 下は源の本性をのたまふ 此女君

のよるべなきよし聞てわがをれくじき心にえ見過し

がたくかくむかへとりて今かく人の恨負をおもへば

わがかるくしきわざなりしとなり扱は君の事夕

霧にむかひてはその御は誰とも云らせでのたま

ふなるべし夕がほとしてはいひ出がたかりなん

をのたまふ はじめ心やりのなかりし

かのはゞぎみの 夕がほ

かのおとゞ 内大臣

かくわたしはじめたる 玉を我かたへ

つきんしくのたまひなす そらごとを

人からは 上のとひにこたふ

御人にて 妻を云

いまめかしう 玉かづらのさま

けしきのみまほしければ 夕霧こゝろみに又とふ

ひがさまにこそ 源の御心有よしなり

かのおとゞも 内大臣

大將の ひげ黒

いとまがくしき 直ならず曲々しき内大臣のおぼし  
よりなりと源の宣なりと或人いへり

内大臣

あらはならんこと さあらぬ事顯れんと

おもひくまなしや いたらぬ隈もなく人のおもひはか

るものかなといふなり

夕霧 御氣色はげざやかなれど 夕霧源の御さまを思ふ

猶うたがひはおほかる 野分の朝見給ひし事あればな

りそを人々のうたがひとりなしいふなり

おとゞもさりや 是は源なり

あんに 人の推量になり

おつることあらましかば 玉かづらを源の物とし給

はゞとなり

けざやかなるまじくまきたるおぼえを さきの巻に宮

づかへ或は智とりなどしてうちくにおもひかはさ

ん歎など覺せしこと有しなり

むくつけく おそろしきなり

御ぶくなどぬぎ給て 八月なり

月たゝばなほまわり給はんこといみあるべし 九月は

いむ月なれば内に參るまじきなり

うちわらひて 源

御心ゆるして 實父の許

女は三に亥たがふ 細禮記に、婦人は從人者也、幼則

從父兄、嫁則從夫、夫死從子、

ついでを 定の親のおもはんことをおきてわがこゝろ

のまゝにせんは次第の違となり

うちくゝに 内大臣ののたまひし事を申給ふなり

やむごとなき 紫花散など

物し給はで 玉かづらをば

ゆづりつけ 内大臣に

大ぞうの 女御更衣などの御寵有べき筋にもあらぬ尙

侍の宮仕へなれば何方へもつかぬといふなり

らうろうせん 本ろうせんと有を用ゐて弄せんと云

意とすべし又らうろうならばらうはてうの誤にて嘲

哂なるべし或は用ゐがたし

おぼし置つる 源

よろこび申されける 非或説によろこびの語なしと可

然 夕霧

いとうるはしきさまに 夕霧

げにさは 源の心なり



心もとなく 参りの延たるを

聞え給ふ人々は 兵部卿の宮大將など

こゝろよせのよすがく 仲立どもなり

よしのゝたきを 六帖に「手をさへてよしのゝ流はせ

きつとも人の心をいかしたのまむ

中將も 夕霧

いかにおぼすらんと 玉かづらの

たはやすくかるらかにうち出ては 夕霧のさま

御はらから 玉の兄弟だち ほかからとは腹を共にす

るてふ語にて同母兄弟をいふなるを此程となりては

古語を考へずて書るものなりせうとの君だちとこそ

有べけれ

頭中將 柏木

人々はをかしかるに 玉かづらの女房など

殿の御つかひにておはしたり 内大臣より柏木を

猶もていでず 實の兄弟なるさまをうけはりて去給は

ぬなり

かつらのかけに 庭の桂の木なるべし

かくれて 柏木

みさゝ入べくも 始は隔て

すゑ奉る 柏木を

みづから聞え 玉かづらの

宰相の君して 夕顔のいとこ

なにがしを 柏木

たへぬたとひも 兄弟の事なり

こだいのことなれど 古めいたるいひごとなれどとな

たのもしくぞ 兄弟なれば頼む心なり

ものしと 人傳を

げに年ごろのつもりも 細玉かづらの返事

かくまでとがめ給も かくのたまへば却て隔てがまし

きとなり

なやましく 又柏木

よし／＼げにきこえさするも心ちなかりけり 入楚理り

を申も却て心なし申さじと恨たるなり

おとりの御せうそこ 内大臣よりの

まゐり給はんほどのあない 細いつ頃参り給べきぞと

なり 是より内大臣消息

うち／＼に 内々

きこえぬことをなん たいめんにはぬをなり

いづ方につけても 前に去らざりしことは今いふべき

ならねど今兄弟なる中にとりそへてさきの情をもか

ねてあはれとおぼすべきことなり

北おもてだつた 内々にむつまじき南を晴の方とす

る故なり

或説南を晴とすれば北面は内々にむつまじき方な

り

君だち こはよろしき女君だちこそおのれごときには

交らじと去給はめとなり

かくなんとときこゆ 柏木ののたまふさまを女房の玉か

づらへ申なり

げに人ぎきを 實は兄弟なりと去れしとて俄にさる様

にせんも人聞いかにぞやあれば年ごろ下にのみおも

ひむつびし心をも今いひ明らめぬは思ひしよりもた

がふこと多しとなり

まばゆくて 柏の

いもせ山 尋ねもてゆけば兄弟なればかく思ひたゆべ

きものぞとも去らでこひまどひつる事よとなりいも

せとは古書に兄弟姉妹をも夫婦をも云てこゝは兄弟

姉妹の意なり

人やりならず ふみまよひける事は我心がらぞと云也

まどひける道をば 兄弟なるよしを知たるわれはおく

りし文を戀の心のむつまじき方かとたどられしとな

り

いづかたのゆゑとなん 玉の歌の餘意を宰相の君がとり

て柏木にいふなり

おのづからかくのみも侍らじ 終には御むつましくな

る時有べしとなん

さることなれば 柏木の心理りと思ふなり

らうつもり 奉公の勞

格勤 考課令凡の官人の奉公に力を盡すを格

勤の善なども云たれど爰は同令に凡帳内及資人、毎

年本主草其行能功過立三等考第一格勤不懈、清廉

稱生爲上と云を本にて親王家大臣家などに仕る

帳内資人の勤功のよき功を得る意にて書り柏木のい

と卑下して却て恨る語なり

いとあてやかに 柏木

宰相の中將の 夕霧

かゝる御ながらひ 此院と三條殿の御ながらひに勝れ

たるかたの人々のいかで多きぞとなり此事前にも

侍りし

大將は ひげ黒

おとゞにも 内大臣

人がらもいとよく ひげ黒の事を内大臣のおぼすなり  
などかはあらんと覺しながら 智にてもなどは難あ  
らんとなり

おとゞの 源

さるやうある事 源の密心ある故に宮づかへに出し給  
はんと有らんと既に出たり

この大將は ひげ黒

東宮の女御 東宮の御母承香殿はひげ黒の御妹なり

おとゞだちをおき奉りて 源内大臣に次ての覺え

おほいきみ 兄弟の中のこのかみをいふ

おうなとつけて 和名抄には姫奈老女之稱也といへ

りおうなといふは音便なりをうなと書はかなあやま

れりそは小女の稱なり

こゝろにもいれず ひげ黒の

六條のおとゞ 大將の此御妻は紫上の御姉なれば更に

玉かづらをあはせん事をいとほしとおぼすなり

いろめかしく ひげ黒は

いみじくぞこゝろをつくし 玉かづらに  
かのおとゞもてはなれても 内大臣の心を髭黒のお  
もふなり

女は宮づかへを 玉かづらの事なり

おほとゝの 源

この辨の御もとも 玉の方にゐる媒の女

はつしも 和名抄に飄早霜なりと八豆といひ古今集にも

秋の末にはつしもとよめり

御うしろみどもの 艶書とり傳へる女ども

過行空の 十月は内に參り給ふべければその前にとお

もひたのめし九月も過行をなげくなり

數ならば 吾身數ならば九月はいむべきを此月たゞば

内へ參り給ふべければいみもやらずいかで此月うち

に得ん事を命がけて戀ふがはかなきたのめぞとなり

月たゞばとあるさだめを 細十月に内へ參り給ふ事を

よくきゝ給ふなるべしとなり

いふがひなき世は 文なり宮仕に出給ふを云

朝日さす すめらぎの御光にあたり給ふともわか思

ひし事をば忘れ給はずも哉といとせめてよめるなり

歌は神樂歌に朝日こがつかふ河邊に玉ざさの上にて

宮の御返りをと 兵部卿へのみ御かへり有ば玉の下に

おもひしも今はと思ふ給ふよりなり

心もて 我を心もて日向ふならねば霜をも心にはけ

だしと添たり 扱葵は孔子の鮑莊子智不<sub>レ</sub>及<sub>ニ</sub>葵能<sub>レ</sub>衛<sub>ニ</sub>

足てふ心を文集に傾<sub>レ</sub>心傾<sub>レ</sub>日葵といへるをとりたり

かゝる事とらずもあれかし中々にひくき事なり

みづからは 玉をさす

いとうれしかりけり 宮は

さまぐなる人々の 玉をおもふ人々の事なり

女を御心ばへにこの君をなん本に すべてをいふ 玉

戀を女のよきためしといふことは終にあやまちなく

て終れる物なり明石上もかけたる所みえねどこは外

より繁想もなければやすきなり

おとゞだち

源内大臣など

ふなどもてつゞけたり

いとかけたるしたをれ 篠なり

霜もをとさす 大和物語に松に雪のかゝりたるに歌つ

けて雪をおとさすもてまわれといひし事ありこは

御使さへぞうちあひたるや 或人いふいとかけたる

下をれのさゝに打合てやせゝにさゝやかなる使と

いふなるべし餘の使にはなき顔なるを遣したるが能

と世にいふがごとく物おもひに侘はつるよしを傳る

使にこえふとりてこゝちよげなる使はうちあはざる

べし

とのゝ上の 紫なり

思ひわびける 玉の事を

いとおほくうらみつゞけて 文

わすれなん 義孝集に「忘れぬをかくわするれどわす

られすいかさまにしていかさまにせんこれらを用ゐ

しなり

かみの色すみつき 右の文ども

人々も 媒のひとぐ

おぼしたえぬべかめる 内へ參り給ひなば御ふみども

も今を名残なるべきとなり

源氏物語新釋

眞木柱

卷の名は「今はとて宿かれぬともなれきつるまきの  
はしらは我をわするなてふにていへり此卷のはじめ  
に玉かづらの髣髴のめと成給ふ事ありさて或説に此  
卷は源氏卅六のとし十月より卅七の十一月までの事  
をかきて其後に秋の夕のたゞならぬにと書たるにま  
た一年の事をふくみて卅八の秋までの事有とすべし  
といへるによるべし

く覺えしも多きにそれへはならで中々に辨が男のさ  
まをも思ひやらす心淺き媒して祈りしに佛の驗見せ  
給ふとなり

心あさき人のためにこそ 辨をさす  
寺のげんも 石山寺  
おとゞも御心ゆかず 源なり

誰もくかくゆるしその 源と内大臣をいふ  
ゆるさぬけしきをみせんも 源の

人のためいとほしう 玉かづら又ひげ黒をかねて書る  
か

ぎしきいとなく 細智君の出入給ふ儀式などを調じ  
て

我殿に 細大將の我御方  
わたい奉らん事を 玉かづらを  
かるくしく 源

人の物し給なるが もとのたい  
なほ心のどかに 下心あれば  
なかるべくを 助辭なり

もてなし給へとぞ 玉へ内々にのたまふ  
内大臣  
父おとゞは 細内大臣の御心には後見なき宮仕よりは

いさめ 禁なり  
さしもえつゝみあへ給はず ひげ黒  
いさゝかうちとけたる 玉かづら  
いみじうつらしと 髣髴  
おもふだにも 今得ての上  
いし山の佛をも辨のおもとも 次の語をみるに是は  
即辨が祈しなり  
辨のおもと 玉の中たちの女房  
おぼしうとみにければ 辨を  
心ぐるしげなることゝも 懸想人の中に玉の心ぐるし

日に忌火御飯、十日神祇官に始供、御贖物、其外諸社  
の祭など多し  
内侍なども参りつゝ、 六條院玉かづらの里亭へ  
こもりおはするを 玉の方になり下にも有  
かむのきみは 玉かづら  
みやなどは 兵部卿  
兵衛のかみ 式部卿宮御子  
いもうとのきたのかたの 大將のさきの臺  
をこがましう 兵衛督の心  
あらざりしさまに 一本なかりしさま  
女は 玉かづら  
心もてあらぬさま 次に源を見て玉の泪こぼれたるな  
ど書る様をみるにもこゝは源にきたがはぬ玉の我心  
よりかゝる夫にもあふ事となれるをいふなり  
おとゞのおぼすらん 源 弄鬚黒になびくやおぼさ  
んがはづかしき  
宮の御心さまの 兵部卿宮  
物心つきなき 玉かづらの大將へ  
おぼしうたがひ 胡蝶の卷にさる事有  
今さらに人の心ぐせ ぬし定まれる女を今更に思ふは

大將の主つき給ふをよしと思ひ給ふなり

なまほのすいたる 物すきがましき宮仕なりといへり  
心ざしは有ながら 内大臣もてはやすべき心はあれど  
なり

女御 こきでん  
げにみかどと聞ゆとも 記者  
三日の夜の御せうそこ 三日の餅など  
聞えかはし給ける 源よりひげ黒へ  
つたへきゝ給て 内大臣  
このおとゞの 源なり

かう忍び給 記者の語 内にきこしめさん事など忍び  
給こと上に見ゆ

さおほしゝほいもあるを 御心かけさせられしをいふ  
宮づかへなど ぬし定りては上の御心かけ給はんにこ  
そ参りもせであらめ一度御おほしも有しをまゐらで  
ゐたまふべき事はとぶくませ給ふなり

かけくしき 御心を懸々敷なり  
霜月になりぬ 内侍のかみのもとへすけなど來りて事  
を云合すなり已上細 尚侍として里に居て事を行ふこ  
と是も臣の威つよれる時のわざなり十一月の神事一

かけくしき 御心を懸々敷なり  
霜月になりぬ 内侍のかみのもとへすけなど來りて事  
を云合すなり已上細 尚侍として里に居て事を行ふこ  
と是も臣の威つよれる時のわざなり十一月の神事一

かけくしき 御心を懸々敷なり  
霜月になりぬ 内侍のかみのもとへすけなど來りて事  
を云合すなり已上細 尚侍として里に居て事を行ふこ  
と是も臣の威つよれる時のわざなり十一月の神事一

かけくしき 御心を懸々敷なり  
霜月になりぬ 内侍のかみのもとへすけなど來りて事  
を云合すなり已上細 尚侍として里に居て事を行ふこ  
と是も臣の威つよれる時のわざなり十一月の神事一

かけくしき 御心を懸々敷なり  
霜月になりぬ 内侍のかみのもとへすけなど來りて事  
を云合すなり已上細 尚侍として里に居て事を行ふこ  
と是も臣の威つよれる時のわざなり十一月の神事一

よからぬ人のこゝろぐせよとおぼしながらとなり  
物のくるしう 忍びがたきになり

さてもやおぼしより 罨とりても密にはとおぼせし

こと上に有

おぼしもたへず 堪

かくわたり給へれば 源の

はたがくれて 前に出

けしき 嚴々しきといふなり上のをとめの巻にも此

詞ありてそこも同じ意なり

よのつねの人にならひて ひげくろ

御けはひ有さまを 源の

ちかき御けうそくに 源

いとをかしげに 玉かづらの

みまほしう 源の心

そひ給へるに 添

源 ありたちて わたり川は三途河のことにて夫婦なる人

の引わたすといふなり我は夫婦のかたらひはせねど

も終に人に引わたさせん物とは期せざりしをとなり

信明集に公平が三君を絶たる頭女「わびつゝも此世

はへなん渡り川後のふちせを誰にとはまし返し」此

世をばおひもかつぎてわたしてん後は初めの人を詩  
ねよ此歌どもを以て書たる物なり

玉 みつせ川 大將をばうとましく源にもまたがひがたき

身なれば三つせ川を誰にひかれて渡らんとも思はず

今さる事をやめてたゞ消失ばやとなり

源 心をななの御きえ所や こはみつせ川ならで泪川の泡

と消んとよみしを以てをさなの消所とは源の宜ふな

り且さやうによぎ逃んと思しても既大將はもとより

我もかく心に思ひむすびしからはえのがれ給はじお

ひもて渡すほどの我ならずとも御手の末ばかりはと

りてわたしたん物ぞといひてとかくはなれぬちぎり

有をいひふくめ給ふなり

よぎ道なかなるを 萬葉に曲道をよぎみちとよみ六帖

にも念川よぎ道なしなどとよめりよけて通る道なし

といふなり

ちゝみこの 愚癡

又うしろやすさも 源のおしたちわざせぬを云

さりとともとなん おぼし知るらんからは終に心よせ給

んものとしたのもしとなり

いとわりなく 玉

人の御心 北の方

女君 北方

ちゝみこの 先帝の親王式部卿宮

うつし心なき うつゝの心もなくみだれがはしきなり

御なかも 鬚黒と北方の御中の

あくがれて あくがれは常はうかれたるをいふをこゝ

には床はなれてまたしからぬにとる

やんごとなきものとは 此女君を大將の

めづらしう 玉に

御心うつるかたの 大將

なのためにだにあらず 大かたならず

人にすぐれ給へる 玉のかたち

かのかたのうたがひ 源と玉との中を

思ひまじきこえ給も 大將

式部卿の宮 北の方の御父

やさしかるべし こは萬葉にも古今にもはづかしきこ

とをいへり 式部卿

みやのひんがしのたいを

わたし奉らんと 北の方を

おやの御あたりといひながら 北方の心

いとほしうて 源玉の心を

猶あからさまに 細暫にてもまわり給へとなり

おのがものと 大將

思ひそめ聞えし心は 源の

二條のおとやは 三條に大宮のおはせし頃より此おと

どは二條に住給ひしを今も二條におはすなるべし

心ゆき給なれば 大將を罨にとれるを

あはれにもはづかしくも 玉かづら

いとかうおぼしたるさまの 玉かづらの思ひ屈したる

さま

おぼすさまにも 源

かしこに 鬚黒へ

ゆるしきこえ給まじき 源の

まかでさせ 大將の家へ

かく 大將は 玄ばしはもらさじと前に有し

玄のびかくろひ

すりし 修理 大將の

きたのかたの

ひたおもむきに まめ人の亂れ立たるはさるかたにも

ひたすらなるものなり

今はかばかりの身にて 　　としもねび御子だちも多くて  
 住なし給へる身を今更にはとなり  
 いと御心ちもあやまりて 　　ましてうつゝともなきな  
 り  
 うちはへ 　　萬葉に打延打、經など書てうちはへと訓り  
 ここは日久しく病ふして在をいふ  
 本性いとしづかに 　　北方の  
 こめき 　　女兒  
 心あやまりして 　　歌ごゝろなきをいふ  
 すまひなどのあやしう 　　うつゝ心なければ  
 玉をみがけるめうつしに 　　玉かづらの住居  
 心もとまらねど 　　ひげくろの  
 昨日けふの 　　是よりは北方の式部卿宮へわたり給はん  
 とあるをいひなためらるゝ也 　　よろしきゝはになれ  
 ばとは然るべき人といふに成てはとの意なり  
 みなおもひのどむるかたありて 　　物をけしきさばみさる  
 事をも見とがめなどするはよからぬ人のことぞとな  
 り  
 見はなつなれ 　　見しらぬやうにても有なり  
 いと身もくるしげに 　　北方は

よの人にも似ぬ 　　歌心なくて  
 えさしもありはつまじき 　　はなれて宮の方へかへらん  
 の意  
 おぼしうとむな 　　此<sup>オカレ</sup>なは莫の意にあらずうとみ給ひけ  
 るよてふ辭なり  
 女の御心のみだりがはしき 　　みだり心ちなくはおもひ  
 のどめておはすべきをとなり  
 一わたり見さだめ給はぬほど 　　大將の末長き心を  
 まかせてこそ 　　たゞ我に  
 おぼしおきつる 　　宮の 　　或人云實に離別し給はんとの  
 式部卿の意か又まばしこらさんとての勘當かとなり  
 かうじ 　　勘  
 いとねたげに 　　北の方御心 　　大將の言給ふを北方は  
 嘲咲してのたまふと思ひ給ふなり  
 御めしうどだちて 　　てかけものゝやうなる人々  
 もくの君中將の 　　もくの君は大將の御方の女房中將は  
 北方にさむらふなり  
 やすからず 　　玉かづらの事を  
 うつし心物し給ふ程にて 　　病をさまりたる時  
 みづから 　　北の方

おぼけたり 　　老  
 もり聞給はんは 　　宮の  
 うき身のゆかりかるゝしきやうなるみゝなれにて侍  
 わがかゝるうき身故にそのゆかりの宮までもひが  
 ひがしき筋にのたまふこともまた耳なれつれば今更  
 のうさにもあらずとなり然れば前々にも大將さる様  
 のことばも有しを思はする語なり  
 けうらにて 　　きよらの音便なり  
 もてやつし給へれば 　　病故に  
 みやの御ことを 　　大將のこたへ  
 こしらへて 　　いひなだむ  
 かのかひ侍るところの 　　玉かづらのかた  
 うひくしう 　　大將のみづからをいふ  
 きすくなる 　　信縮  
 心やすく 　　玉かづらをこなたに  
 おほきおとゝ 　　源  
 にくげなることもり聞えは 　　玉かづらをむかふるにつ  
 けて北方のそむき給ふことの源氏の方へきこえんは  
 苦しからんとなり  
 いとほしう 　　北のかたの爲

御なかよくて 　　玉かづらと  
 わするゝことは 　　我は  
 今さらに 　　かく年へて後にかゝるなめげなる事にあひ  
 給ふとなり  
 へだゝる事 　　隔  
 まろがためにも 　　大將  
 かたみに 　　大將と北方  
 人の御つらさは 　　大將をつらしといふ事は思ひわかず  
 となり  
 いかでか見え奉らん 　　歸りて父宮へ  
 大殿の北のかた 　　紫上  
 こと人にやは 　　此北方と兄弟なり  
 かればまらぬさまにて 　　紫はおほばより源に傳へてそ  
 だて給へば宮の御方にてはまらぬ給はぬが如し  
 かく人の親だち 　　玉かづらは源の御むすめとして大將  
 へ物し給へば紫も母めきてこと行ひ給ふ事と宮の御  
 かたにてはうらみ給ふなり  
 おもほし宣ふ 　　式部卿のなり  
 こゝには 　　北方は  
 記者  
 いとしよう 　　かく宣ふまではよろしかれどまたうつゝな

さの出こんと下に有ことをふくみいふ

おほとのお、 大將のこたへ

北のかたの 紫

いつきむすめのやうに 紫は今も

おとされたる人の 大將卑下の語のみ

きこえあらば 源へ

心もそらに 大將

この御けしきも 北の方

むかひ火つくりて かなたのおもひの火に對てこなた

にもむねやくをいふさて此語は景行記に日本武尊駿

河國にて夷が野に火をつけしをこなたにも火をうち

て向焼といへり後にもある事なり

いかにせん 玉かづらへ行ことを

さながら そのまゝおろさぬなり

きたのかたけしきをみて 玉へ行まくおもふ

そゝのかし給 行給へとすゝむるなり

今はかぎり 北の方今はなれんとするきはなればこよ

ひばかりといむともとなり

思ひめぐらし給へる 北方の

かゝるにはいかでかと 大將此雪には

なほ此ごろばかり心の程を 物のはじめなれば我淺か

らぬ心をば去らで侍ふ人などとかくいふべく其上に

御おや達のおぼさん事もあれば暫夜をへだてがたし

となり

おとゞだちも 源と内大臣

おもひしづめて 北のかたの心をしづめ我行末の玄わ

ざを

猶見はて給へ 我行末のしわざを

わたしては 玉かづらを

世のつねなる御けしき 病をさまりて

たちとまり給ひても 北方

袖の水りも なみだのひまを袖の水のとくるといふ也

「おもひつゝねなくにあくる冬の夜は袖の水のとけ

ずも有哉

御火とりめして 北方火とりをめしよせて鬘黒にたき

しめさするなり和名薰爐比度

みづからはなへたる御ぞどもに 北の方

つみなうおぼして 大將の

いかで過しつる年月ぞと 玉かづらにあひ初てより此

北の方を見てよくとし月を過しつると思はるゝとな

りさてかくとで心のうつりたるは我ながらかるくよばひのゝじり 北方の

しき事とおもひながらもかなたへ心はすゝめるよしうたれひかれ 行者のうちたゝきなどするなり

なり かしこへ御ふみたてまつれ給 大將玉かづらへ

さらなげきをうちしつゝ、 心のすゝまぬさまにもてな 御心をばさる物にて 玉の

すなり 前のは臥籠の火取是は袖 心さへ ひとりさえつるは雪の夜に獨ねして神の河し

ちいさきひとりとりよせて 香爐成べし

御ひかりにこそ 源なり 雪もよに 雪の夜といふに同じかく様の毛は皆之なる

中將もくなど 大將のおもひ人北方のことよせて私の ひとり 獨 火取

ゑんじも有べし 例萬葉後撰にもみゆ

さうじみは 北の方 さえつる 河

おほきなるこの 伏せ籠和名火籠多岐毛今薫籠也 づしやかに 玄かと書なり

とのゝうしろによりて 大將 ざえかしこく 大將

ざといかけ給ほど 沃懸 かく心ときめきし給へるを 大將

やゝ見あふる 人の見あへる隙も無ければといめもあ けうとさかなと 花氣疎なり

へぬなり へぬなり 玉かづらの方へ

めはなにもいりて 大將 れいのいそぎいで給 玉かづらの方へ

たちさわぎて 女房 めやすくも玄なし給はず 北方現なくて事執給ねば

さよらをつくし給わたるに 細玉かづらの渡り うちあはぬさまに 装束の

心たがひとはいひながら 例の物ぐるほしきを云 むづかり給れ 大將

あざやかなる なほしはあざやかによろしけれどかさ

ねなどのよくとり合ぬを云  
やけとほりて 火取にて

うつりがもまみたり 焦くさき香なり

うむじ 倦

御ゆどのなど 大將

ひとりゐて 火取の居とそへたり 歌は北の方の御心

をことわり次のことばは私のうらみもふくめるさま

なり

なごりなき御もてなしは もくの君の詞なり

まみいといたし 北方の事をいひながら杳君が下心の

あればさかさまの目見にこもてり見ゆるをいふ

されどいかなる心にて 大將玉かづらを見る目うつし

に杳君などは目につかず成たればなり

なさけなきことよ 大將さすく人なれば却てうつり心

の強と記者の言

大將の返 北方の現なさのうきを思ひさわぐが

うき事をおもひ 北方の現なさのうきを思ひさわぐが

うへに火取いかくる様のことさへ出来て今は何にか

くむつびけんとかゆるとなり右の杳君に物いひしを

悔たるをもちねたり

くゆるけぶり 悔

ことのほかなる事どものもしきこえあらばちうげん

北方はうとく又此こと聞えは玉の方にもいとほれて

いづれにもつかずはしに我身はなりぬべしとなり

一夜ばかりのへだてだに 玉かづらの方

おぼえ驗有さまに 玉かづらの

心うければ 北方の操練ましきなり

久しうこもり給へり 玉かづらの方に

す法などしきわげど 北方

聞給へば 大將

あるまじきききすもつき ひとりいかけられしにこりた

るなり

とのにわたり給ときも 大將の我殿なり

ことかたにはなれる給て 北方とは

女ところ 眞木柱の上なり

御中もへだたり 北方と

やんごとなうたちならぶかたなくて 本臺なれば

さぶらふ人々 北方に

ちみやき給ひて 式部卿宮

かけはなれて 大將の

心づよくものし給 北方の

いとおもなう 面無なり

御むかへあり 北の方を

かくと聞え給へれば 御迎の参りたるよし

去ひてたちとまりて 北方

御せうとの君たち 北方の兄弟

兵衛督は 上に式部卿宮子

たびすみに かりの住をいふ

去づまらせ給なんになどさめく

にこんとなり

君達は 大將の

姫君は 眞木柱の姫君の事

となるも 左

かうなるも 右

をとこ君達は 今具して歸るべきが此上父の御方へま

うですはえ有べからずされど父君のとより立てもめぐ

み給はじとなり

人の心とやめ 大將をさす

式部卿 宮のおはせん 宮の世におはせん程は此君達うちなど

へ参て交りをするも

かたのやうに 形ばかりと云なり

かのおとやだちの 天下の事は源と内大臣の心なり

さすがにゑられて 是も大將の子ぞと世にゑられて成

出ん事はかたしとなり

ひきいりつゝまじらん 世に佐しきがまじりてあらん

こといふ成べし

みなふかき心はおもひわかねど せさなき御子たち

昔物語 住吉のひめ君を父はめぐ思ひしかど繼母の

言によりておろそかに成し事なり

かたのやうにて 母と云形ばかりにても猶かくみるま

へにだにと云ならん

いたうあれ侍なん 風雪

姫君 眞木柱

見たてまつらでは 今より父君を

今なども聞えて 父に今は

こしらへ聞え給 北の方

たやいまもわたり給はなんと 大將を

かく暮なんに 記者

つねにより給 姫君

ひはだ色 檜皮色は黒く紫なるにきばみあるなり

今はとて 眞木柱

まきのはしらは 眞木とは楡をいふなり  
は、昔いでやとて 今更に歎べきなげきはてふ意に

ていでやとはのたまへり歌も即そのこゝろなり  
なれきとは 北方

戀しからん事と 立はなれて後  
もくの君は 大將の女房なり

中將のおもと 北方の女房 本君によみかく  
あさけれど 本をそへたり

かくてわかれ奉らんことよと 本はとゞまり中將は北  
の方にて歸れば

ともかくも いはんかたなき世にあひて我もえすみは  
つまじきとなり

いでやとてうちなく おもひがけん物かはと云なり  
かくるゝまでぞかへり見 拾遺に 「君がすむ宿の梢

を行々もかくるゝまでにかへりみしはや  
きみがすむゆゑにはあらで 人戀しきにはあらぬをい

ふ 母北のかた 北方の母  
おほきおとゞを 源氏  
あたかたきにか 敬

女御をもことにふれはしたなく 前々此事見ゆ  
御中のうらみ 須磨の時疎かりし

おぼし宜ふ 式部卿宮の  
ひとひとりを 紫をさす

ほとりまでもにほふためしこそ こゝもむさしのゝ一  
本故をいひかへしのみ

まゝこかしづき 玉かづら  
おのれふるし給へる 前にも此北の方かくのたまひた

り よになん 難なり  
おとゞを 源

かしこき人は 源のまわざを  
ふかう 不幸

つれなうてみなかのしづみ 須磨の時つかへぬ人のけ  
ちめをさりげなくて見せ給ひし事前には有

思ひわたいたい 渡し  
おのれひとり 式部卿

ゆかりと思ひて 紫の上の  
世のひゞきに 賀をまわりし事

いよゝはらだちて 北の方

まがくしきこと 契紀に禍の字まがと訓祝詞に悪事  
古語登 萬葉に托言といへり  
このおほきたのかたぞ 大將の北方の母  
きゝて 玉の方にて  
さうじみは 北の方をさす  
かむのきみに 玉かづらなり  
よきうへの御ぞ 大將

今までもたちとまるべくやはある 離たて留るべから  
すと云なり  
いと思ひのまゝならん人は 心づよく隨意ならん人は  
今まで見過して有べきかはとなり  
さうじみは 北方は  
いたづら人と 現なきをいふ  
たいめし給べくもあらず 大將の北方  
なにかたゝとぎにうつる心の 北方へ父宮母北方のい  
さめ給ふ  
年ごろ 玉かづら  
ひがくしき 物のけの  
いさめ申給ことわりなり 父母の  
いとわかしくしき 大將のたまふ  
おもほしすつまじき 御子たち  
つみさり所なう こは下へつけて世人の判断にもとか  
く大將のわろしてふに定りて後にこそかく立さりな  
どもし給ふべきなれ玉かづらをむかふるも北方の現  
なき故なればひたぶるの罪とは判り侍らじその外と  
し月に見過せし心ながさを思ひ知給ひて今はなだ  
らかにおぼしゆるして住給ふべきなるをとなり

あをにびのきの 青いろにくろみ少しかけたるなり總  
てにびいろといふはくろみ有をいふ是を或説に花だ  
色なりといへるは誤れり  
などかはにげなからんと 玉かづらに雙べて  
宮にうらみきこえんとて 大將  
とのに 我殿  
をしくねんじ給へど 大將のさま  
さても世の人 としつきにかの物のけをも見過して有  
つる我心ざしをもおもひ去らでとなり

つる我心ざしをもおもひ去らでとなり



をとこ君たち 後に藤中納言  
つぎの君は 後に左大辨  
姫君におぼえたれば あね君に似たるなり  
宮にも御けしき給はらせ給へど 式部卿宮へ對面の事  
いひ入るをいふ  
いで給ぬ 大將  
六條殿 玉かづらの方を云  
えゐておはせねば 男君たちをば  
殿にとめて 大將の  
うちながめて 君たち  
見おくりたるさまなども 大將六條院へ行給ふを  
女君の 玉かづら  
ひがくしき御さまを 本の北方の事となり  
宮にはいみじう 式部卿  
春の上にも 紫上  
こゝにさへうらみらるゝ 前に大北方の宣ひしが如し  
おとやの君 源  
かたき事なり 難儀の事となり  
心ひとつにもあらぬ 例のかくはのたまへど皆源の心  
なり 實の父のおもむけ給ふ事前に見ゆ  
うちにも 今上  
兵部卿のみや 螢  
きゝあきらめ 源の心のみならぬ事を  
かんの君の 玉かづらの  
この参り給はんと 内侍のかみとなれるよろこび申に  
玉の参り給ふべきをいふさるをさまたげとやむれば  
今上にはなめしとおぼし且内に御心あるをいとひて  
参らせぬを心有さまに聞しめしとはいひ且人々もお  
ぼす所あらんとは即内の御心あるにつけては中后女  
御たちの御爲わろしと源も内大臣もおぼすなり  
なめ、 無禮  
おほやけ人をたのみたる人は 大將の心なり 尙侍に  
有ながら臣の妻なる例おほしとなり  
参らせ 玉をうちへ  
ぎしきといかめしく 玉の入内  
おとやだち 源内大臣  
さい相中將 夕霧  
せうとの君たちも 柏木など  
ついでせうしよりて 玉に  
承香殿のひがしおもて 承香殿は東宮の御母女御のお

はしますがその東面に玉かづらは局し給ふなり 或  
説西宮抄を引て内侍督のよろこび申にはぬほどの、  
陣まで参りて内侍佐其よしを奏して主上は御らんせ  
られず女房の装束を給りて退出するなり玉盞の君は  
やがてうちすみま給べきよしみえたり  
宮の女御は 式部卿宮の御女の女御  
御心の中ははるかにへだたりけんかし 宮の女御は  
大將の前の北方の御妹なれば  
みだりがはしきかういだし さしもなき人をいふ  
中宮 秋好  
こき殿の女御 内大臣の女  
この宮の女御 式部卿  
中納言 たれともなし  
宰相のむすめふたりばかりぞ 更衣なるべし  
さとへまわり 女官の里にある女も物見にまゐるなり  
こちたく 此頃は数いと多く重ねしをいふなるべし  
承香殿 朱雀院の女御黒黒の妹春宮の御母ぎみな  
宮はまだわかく 東宮  
御前 主上  
中宮の御かた 秋好  
まありて 踏歌の  
東宮の御かたぐ  
たけ川うたひける 踏歌の人  
八郎君はむかひばら 内大臣の八男藤裏葉の行幸に賀  
玉恩をまひしも此人なり母は柏木におなじ  
大將殿の太郎君 前に十ばかりにて殿上せしと有  
よそ人と 何も  
この御つぼねの 玉かづら  
さうじみ 玉かづら  
まばしはすぐい 内に  
おなじごと 如なり  
かつけわた 祿の綿  
わたのさまもにほひ 白綿なる中にもよろしきを云な  
らん  
玉かづらの方  
こなたは水うとやなりけれど 男踏歌は御前院中宮東  
宮などへ参りての次には時にとりてかゝる尙侍など  
の方へもめぐり來ること定めなきなるべし  
よういありてなん 酒肴のみなれどよろしうせしとな

大將殿 ひげ黒

とのゐ所に給て 大將の宿直

夜さりまかでさせ 今夜玉かづらを

御返なし 玉燈は

さぶらふ人々ぞ 玉の女房たちのこたへを申なり

おとゞの 源

心あわたしきほどならで とりあへぬさまにまかで

給ふはよろしからじ上の御心にならせ給ふほどつか

うまつりて御ゆるされの後まかで給へと源ののたま

ひしなり

いとつらしと 大將

さばかり聞えし かねて

兵部卿宮 蝋

御前の御あそびに 踏歌の後宴にや

聞え給へり 文を

大將はつかさの御さうし 大將の直序 西宮抄に左大

將宿所<sup>在</sup>宜陽門内廊、右大將宿所<sup>在</sup>陽明門内廊、

といへり

それよりとて 兵部卿宮のふみを大將の方よりとてつ

かはすなり

まぶしに見給ふ 玉の

兵部卿 山木に 山木をしもとり出たるは古歌によれるか

さへづる聲も 古今百千鳥さへづる春は物ごとにあら

たまれども我ぞふり行くてふをいふか

いとほしう 玉の心

うへわたらせ給 今上

たゞかのおとゞの 源

かの御心ばへは 源

これはなかはさしもおぼえさせ給はん 似させ給は

んといふなり或説はわろし 上の御かたちは源に似

させ給へど源は親と聞ゆれば物むづかしうおもひし

を上の御けさうはなとか源に似させ給はん玉の心の

ひかれ奉るといふなり

おもておかむかたなく 玉

あやしうおぼつかなき 勅誥なり

加階 よろこびなども 玉かづら従三位し給ふ事次の歌にみ

ゆ

かゝる御くせ 前に夕ぎりを御使にて仰ごとの有し時

の御こたへもなかりしなどを今のさまに合せてかゝ

るくせとはのたまはするか

うちゑみて 主上

うれふべき人あらば 玉かづらは尙侍なれば總ての女

官の年齒ありても色ゆるされぬうれへ申などをこと

わるべきによせ給ひて上のはやくよりのたまひうれ

へさせ給ふ臆をばおきて人に色ゆるして後となりて

心に染んとの事はおくれかひなし此うれへ申す人

おらばいかさまに判断給はんそのよし聞ばやと御戯

めきて恨み給はするなり人とはたとひをのたまふに

て實は御みづからの事なり

えおぼすさまなる 上

かくわたらせ給へるを 上の

いそぎまどはし給 退出の事を

みづからも 玉の

心うきにえのどの 上の強ごとなど

まかでさせ 大將

ちゝおとゞなどかしくくたばかり 内大臣も玉に上の

御心うつらせ給はんを玉御の爲にいとへば大將と同

じ心にことをはかりてまかでさせらるゝなり

さらばものこりして 勅なり

又いだしたてぬ人も 大將

などてかく かく逢ふまじき人をなどて深くはおもひし

めけんとのたまふ事を三位のきる紫を詞とし且灰汁

を合せて染る物なるに這逢意をそへさせ給へり萬葉

に紫はひさす物を榊市のやそのちまたにあひし

こやたれ

こくなりほつまじきにや かくては終にも深き中とは

ならではでんにやとなげき給ふことを三位は淺紫な

ればそへてのたまふ

いとわかく 上の御さま

はづかしきを 玉の

たがひ給へるところやは 源の形と

きこえ給 御返しを

みやづかへのらうもなくて 次の歌の一二句に此意あ

り

かゝい 加階

いかならん色とも 何のわかちも煮らで有しをかゝる

御惠の有しこそ忝なけれとなりよりて今より云々と

いへり

心してこそ 深き恵をいへり

今よりなん 此御惠を

人よりさきに 勅

むかしのながしが 或註に後撰に大納言國經の朝臣

きびしきちかきまもり 近衛大将の職といへどもきびし過たりと御戯をまじへのたまはするなり

の家侍ける女に平貞文いとしのびてかたらひ侍て

九重に 今まかでへだたりなば二度かくばかりのまゐりもせじやなごりふかくおぼすなり

行末まで契侍ける頃此女にはかに贈太政大臣にむか

へられたりければ「昔せし我かねごとのかなしきは

いかに契りし名残なるらん返し「うつゝにて誰契り

けん定めなき夢路にまがふ我はわれかは此事かとい

へり次の我はわれと有語を思ふに此ことなり

ひきいでつべき 大将に物ごりせさせじとおぼすをの

たまふ

かたじけなう 玉の心に

我はわれと 右の女の我は我かと思ひたどるよしを

いひたるをうけて玉かづらはかく忝きにつけても既

によるべ定りたるわれはうきすぐせの我ぞと思ひは

てゝある物をといふ意なり此下に帝の御文の有し時

玉の身をうき物に思ひしみ給ひてかやうのすさみご

ともあいなくおぼしたればと有をむかへ見るべし

こなたかなたの御かしづき 源内大臣大将の人も有べ

えおはしまし 上卿

し

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

は

さすがにかけはなれぬ

たまふなり

やがて 即

かの殿にと 大将の亭に玉燈を渡さんと

かねてはゆるされあるまじきにより かねてより源に聞

えは

にはかに 大将の源へのたまひやる

よそノにては 玉かづらを

人の心おくべしと 大将をいふ

もとよりまたいならぬ人の 實方の進退ならぬ人と也

六條殿ぞ 源氏

ゆくりなく 不意

などかさほあらん 源の今更とやめがたきなり

女も汐やく 古今に「須磨の海士のしはやく煙風をい

たみ思はぬかたにたな引にけり

ぬすみもて 大将の心なり 大将はぬすみて來たる心

をなして心おちわたるとなり

かのいりむさせ 上の

ゑんじきこえさせ 大将の

心づきなく 女は

なほくしき こゝはことに内の御前よりまかで直ち

なればいよく大将をばなほ人の如く玉の見給ふな

かのみやにも 式部卿宮かの北の方の事を

たえておとづれず 大将は

たゆめられたる 大将に

そひわたらんに 玉かづらの

たはぶれごとも 文やり給はんも

かやうのつれんも 源の

わたり給て 玉かづらへ

おもはん事を 右近がなり

おもはせたる 詞にふくめて

かきたれて 源

ふるさと人を 源みづから

いかでか聞ゆべからん いかにしてか此おもひをまの

あたり聞ゆるよしあらんやなり

打なきて 玉かづら

思ひ出られ給御さまを 源を

いかでみ奉らんなどはえ宣はぬおやにて 實の父なら

ねば逢見奉らんとはいひがたきおやなり

げにいかでか 御文をうけて

ときくむづかしかりし 源の

このひとにも 右近なり

いかなりけると 右近

御かへり聞ゆるも 玉かづら

ながめする 長雨と物思ひ有て長日するとをかぬ

うたかた 和名抄に沫雨雨濛上<sup>ハナ</sup>一<sup>ツ</sup>殺<sup>レ</sup>益<sup>テ</sup>ふ大きな

沫の事にてまばしのほどに消ればまばしばかりの意

にもかりなる事にもはかなき意にも萬葉に用ゐたる

歌多し伊勢が歌にうたかた人を小大君がうたかた花

をなどよめるは皆まばしも人をまばしも花をなどの

意にてこゝも同じうたかたの下にて少し切て人とよ

むべしついで意得たるは誤れり

ほどふるころはげに 長雨と使りの間の久しきをかぬ

いやしく 敬

ひきひろげて 源

玉水のこぼるゝやうに 軒の半とある歌よりかけり

むねにみつ心ちして 泪の

昔のかんの君 朧月夜も玉かづらも共に尙侍なり

朱雀院の后の 太后

さしあたりたる 玉かづらの事は今

よづかすぞ すべてに似ぬを云

さましわび給て みづから

なつかしう 玉の

あづまのしらべを 和琴

玉藻はなかりそ 或説に云風俗の上野歌にをしたかべ

かもさへきぬる原の池のやのや玉もはまねかりそお

ひもすがねやまねかりそやと云なりと是をうたひ給

ふ意は契沖云此まねかりそと有は日本紀に勿の字を

まなとみしは即なかれの意なりなとねと五音通へば

まねはまなにて只なと云に同じければこゝになかり

そと書る成べし枕草紙に池はと有るつゝきに原の池

玉もはなかりそといひけんもをかすと書けり六帖に

「原の池におふる玉ものかりそめに君を我思ふ物な

らなくは是も風俗の歌よりよめる歟今風俗をうたひ

給ふはおいもすがねやをおいもするがにといふ心に

取歟その心今おひと書は誤にておいに玉もを薙は

てずしておかば老るまでさても有るにこゝろ見るべ

ければなかりそと云成べし六帖に「我せこがおゆる

がをしささだの池の玉もにもがな薙みはやさん此歌

女めくこそ笑べき事なれ

御ふみはまのびくに 帝より

身をうき物に 玉かづら

色に衣を 六帖に「口なしの色に衣をそめしよりいは

で心に物をこそおもへ玉かづらを山吹にたとへたり

しなり

おもはずに井での中道 思ひもよらず玉との中をへた

たりてなげくとだにえ云出す心にむせびて有となり

かほにみえつゝ 面影に見ゆるなり

六帖「夕されば野べに鳴てふ良鳥のかほにみえつゝ

忘れなくに

げにあやしき 源の御心くせを云

かりの子のいとおほかなるを かるがもの子なり古へ

は是をまかりといひし事萬葉其外古き書どもに多し

御覽じて 源の

かうじ 柑子

まぎらはして 鴨の子を菓子にまぎらはしてなり

たてまつり給 玉かづらへ

めだつるなど

おもはずなる 目立 餘りに疎ければ

玉もの老るは猶ければ又若きが生出れば玉にもが

なといへり萬葉第二に生てなびける玉藻もぞたゆれ

ば生る打橋に生をせれる川藻もぞかるればはゆると

めるに似たり大將のかたへ玉かづらを渡したるは玉

もをかりはてたるに似たれば下の心のたとひ成べし

又かく大將はゐて渡さるゝとも玉かづらの心に我

を忘れはてすはからぬ玉ものたゆるまでさて有如く

心ばかりは通ふ中らひならんの心歟細流に是藻の故

事を引給へるは叶はずと云り

こひしき人に 玉かづらをいふ

御かたちありさま 玉かづらの

あかもたれひき 萬葉十一「立て思ひのてもぞ思ふく

れなるのあかもすそ引いにし姿を玉のまかでし時の

すがたを忘れ給はざるなり萬葉に此語多きが皆あか

もすそ引と字にも假字にもありて右の一首のみ赤裳

下引と書しを外を照し見ずしてたれひきと書たる物

なり例に依て下引をもすそひきとよむべき事なり

にくげなるふる事なれど 古へは丈夫は丈夫の心こと

ばにてこそよみたれ後世の女心にくげなりといへ

るはいふにもたらぬ事成を今は八束ひげおへる男の

御心ひとつにのみは 大將の心をかぬればなり  
 おなじすに 同じすに云々といふからは多の卵の中に  
 つたれが手にとりかくしけんたえて見えぬといひ  
 て餘りに疎きを恨るなり  
 かひの 卵  
 などがさしもなど 人の妻と成しとてもなか親のか  
 たへときぞとなり次の詞にてしる  
 女はまことの 詩に女子有行遠父母兄弟  
 にくしとき給 女は  
 まる聞えんと 大將の  
 かたはらいたしや 玉かづら  
 すがくれて いかなる人か手にゝざるらんと有にこた  
 へてもとよりすがくれて敷にもあらぬ我身なればと  
 りかくす人はなきとなり  
 よろしからぬ御けしきに 文  
 この大將の 源のたまふ  
 おほかたのとぶらひ 北の方へ  
 えしもかけはなれ給はず 北の方  
 たえて見せ奉り給はず 北の方  
 わかき御心のうちに 姫君

なつかしうなんし給 玉  
 うらやまし 眞木ばしら  
 やすらかにふるまふ 男ならぬをなげき給ふなり  
 あやしうをとこ女に なげき給ふ男はさきくいと多  
 に見ゆ女にはもとの北方大北方此眞木柱なども事こ  
 そかはれ玉かづら故に物をおぼすめり  
 其年の十一月に こは末の事をあらかじめ書りとい  
 ふ説あれど末の事書たる文のさまにあらすた今十  
 一月なりと意得べし此下に秋の夕のたゝならぬてふ  
 詞有は此間に又一とせをこめたりてふ説を用ゆべし  
 そのほどの 玉の産  
 きんだちにも 弘徽殿など  
 御かたちなどは 玉かづら  
 頭の中將も 柏木  
 さすがなる御けしき 上の  
 宮仕にかひありて 細今をのこ子を生給へるにも宮仕  
 ならば皇子をもまうけ給ふべき物をとなり  
 今までみこだちの 上に  
 おほやけごとは 玉の今内侍なれば  
 煮り給ひなどしつゝ、 ことを執をいふ

参り給ふ事ぞ かく其職の事は里ながら執て即此まゝ  
 にまうのぼり給ふことはやみぬべしとなり  
 やがて 即  
 さてもありぬべき 入かやうにも有べき事かとなり  
 さるものゝくせ さやうにをこ人のくせなればこのま  
 しき心となり  
 もてわづらひ給ふ 内大臣の  
 今はなまじらひ 女御の御かたのにて人中に出でまじ  
 らひそとのたまふなり  
 この女御の御かたにまゐりて 内にて弘徽殿の御方な  
 り  
 秋の夕のただならぬに 或説に彼十一月は源氏卅七の  
 事にて此秋の夕と書出たるにて又一年をたて、源氏  
 卅八の秋と見るべしといふをよしとす此近江の君の  
 事を別に添て中にいかなるをりにか有けんなど書る  
 もそのよしあり  
 宰相の中將も 夕霧は  
 れいならずみだれて 常の實なるに違へて  
 人々めづらしがりて こきでんにさぶらふ人々  
 もとめつるに 出

あなうたてや 御かたの人々  
 これぞなくとめでて 夕霧をさして  
 こゑいとさはやかにて 近江  
 おきつぶね おきつ舟よるべ浪路とは雲の鴈をおほ  
 すことかなはずは我がたへさしよせてとまりとせよ  
 となり  
 たなゝしをぶね 「ほり江こぐたなゝし小舟こぎかへり  
 おなじ人にや戀わたるべき夕霧の雲の鴈をのみ戀わ  
 たり給ふはあなわろやとなり  
 いとあやしう 夕心  
 よるべなみ 夕霧

源氏物語新釋

梅枝

卷の名は辨少將拍子をとりに梅がえをうたふといひ又齋院より散すぎたる梅の枝に付たる御ふみその外御前の紅梅の事などもあればかれ是をかねて梅がえとはいへるなるべし源卅九のとしの正月より三月までの事なり末に花ざかり過て淺みどりなる空うららかなるにとあればなり

御裳着の事 細明石の姫君十二に成給ふうつぼのあて宮も十二にてもぎの事有なぞらへたるか

御心おきて 源氏

東宮も 細十三に成らせ給ふ

おなじきさらぎに御かうぶりの事 或説に冷泉院春宮

時應和三年二月廿八日に御元服あり東宮は朱雀院の皇子とし十二御元服は廿餘日のほどと下にいへり

御まゐりもうちつくべき 萬水明石姫君東宮への

む月のつごもりなれば 御裳着は二月十一日なるをか

ねて其御料のたきものをあはせ給ふなり

おほやけわたくしのどやかなる 公事どもはてへ

大貳の奉れるかうども もろこしより便り有故なりなほいにしへのには 今わたりの香の具どもその外錦綾なども

とりわたさせ 六條院へ 香具はもとより 姫君の御前の調度どもの

肥なり 玄とねなどのほしどもに 縁なり

こまうどのたてまつれりける 萬水 源を鴻臚館にて相

せし時奉りし物なるべし 河緋金錦 金を織付たる錦にて金襴の類なるべし

猶さまん御らんじあてつ、 そのものくりに似あは

このたびのあやうす物など 大貳の奉れる

おくり物 御裳着の かなうす 香具を甘露煎にて濕はせて後に鐵の臼に入

て皮の蓋をして其蓋に杵を入る穴をなしさて水青の杵にて二千杵つくなり但香によりて杵の數の多少あり或説に五百杵といへるはおぼつかなし

おといは 源

そうわ 是は承和にて仁明天皇の年號なりさて雜要抄

を考るに鳥方侍従の二方は男につたふべからずと承

和のみかどの御いましめ有てふを源氏のいかで傳へ

給ひけんといふなり或本に是をそんわうと有はわを

王と見てそうをもそんとせしならん此説花鳥なり

うへは 紫

はなちいで 放出は最屋にも對にもありてさし出して

作れるをいふこゝは東のとあれば東對歟或説にもや

の内を障子へだてたる所を云といふはわろし放出て

ふ名をも思ふべし

御まづらひ 几帳とばりなど

八條の式部卿 こは右の承和の皇子式部卿本康親王な

り此御女は藤原時平大臣の室にて是に式部卿宮の傳

へられしをその末を紫上は傳へうけ給へるよしなり

是も雜要抄に見ゆさて同方ならいさゝか香具の違

ともあればかちまけは有べし

ひし給へば 河秘

おとりのたまふ 源

あまたならず ひそかに合せ給へば

かうごの御はこども 雅亮抄に母屋の帳臺の外にちひ

さき厨子一よろひの置物どもの事書る中に云其ひん

がしの厨子の上のこしに香ごの篋二合云々かうごの

篋には白がねにてみの壺の大きなつぼを二合に四

つづゝ入て薫物を入れる料なり此たきもの梅花荷葉侍

従黒方を入べきなり扱此壺のなかにきらゝのつぼ一

つ有べしと類聚雜要にその厨子よりはじめて置物内

の小篋つぼどもの様は委し

つぼのすがた 其篋の中の壺なり

ひとりの心ばへも 火取もその上の籠などの様を云

めなれぬさまに すべてをいふ

所々の 御かたぐ

かきあはせていれんと その壺どもにおのく入るを

いふ

御いそぎのけふあすに もきの

むかしよりとりわきたる御中なれば 源と宮

前齋院より 朝がほなり

ちりすぎたる 下の歌の本をいはん料なり 既にちり

過たる梅がえにつけたるは歌に花の香は散にし枝に

とまらねどといはん料なり拾遺に「春過て散はてに

ける梅の花たゞ香ばかりぞ枝にのこれるてふ歌を取  
かへたるものなり然るを或説に此詞を散透スチたると思  
得て右の拾遺の二の句をも散透スチにたると書て證と引  
るはひが事をかざらんとてひがことをかさぬるなり

宮きこしめす事も 源の懸想を

すゝみまゐれる おなたより

ほゝゑみて 源

いとなれくしき 薫物の事

まめやかに 朝顔の

るりのつき 一宮の中に坏二つに薰二くさなり たき

物を常は蓋に入るをこゝには坏ツキと有はめづらしめに

せられしか

心葉 こは常には物の中心に立る枝をいへり然るを是

はぢんの宮の内なる坏の心葉なり又五葉ウツと梅を彫て

ともあれば雜要抄にか様に宮の内なるつぼなどには

上におさへの板を置いてそれに梅花様の座をうちて組

を付たるをも心葉といへり

こんるりには 坏

ひきむすびたるいとのおさまも 組はめなれたればより

糸を用られし心か

えんなる物のさまかなとて 兵部卿の宮  
花ハナの香は わが合せし薫物は匂もなければどうつし給

はん袖からこそ深き香は有べけれど下りてよみ給へ

りさて此本をいはんとてちり過たる梅がえにはつけ

たり

ほのかなるを 文の末に少しはなちて歌をかきたれば

よそめながら宮の見つけ給ふにや

ことくしうすし給 其歌を

宰相中將 夕霧

ゑはし給 酒

こうばいがさねの 女のさうぞくと云につやく 五つ

衣とほそ長なり文の隔句を意得ぬ人はまどへり

かうのほそなが 或説に香と有ぞよき

そのいろの 紅梅のうすやうなり

何事かは侍らん 源

くまぐしく 隠れたる事あるをいふ

御視のついでに 此御返しはかたむきあなじもせず打

出給ふてふ意にてついでにといふか且下にとや有つ

らむと書るは歌をも定には見せ給はぬをよそめに見

ていひ傳たる意なるべし

源の花のえに ことばは古今に「梅の花立よるばかり有し

より人のとがむる香にぞしみるてふをもて此の贈

り物をめでおくり給ふをうけてさて人のとがめんを

も忍びあへすいと齋院に心まむとなり

まめやかに 源の宮にのたまふ事

すきくしきやうなれど かゝる薫物など集るは

又もながめる人のうへにて 姫君只一所おはせるをい

ふ

これこそは 我ながら

いと見にくければ 姫君の形を卑下していふ

中宮まかでさせ 秋好中宮を御こしゆひひとなり

はづかしき所の 秋好は

かたじけなくてなん 心づかひし給ふとなり

あえ物もげに 宮 秋好は中宮とならせ給へばあやか

りものにとなり

ことわり申給 中宮をと源のおぼすは理なりとなり

あはせ給ふとも たき物

この夕暮のまゆりに 春雨の夕

これわかせ給へ 兵部卿宮にかちまけを判給へと源の

のたまふ

たれにかみせんときこえ給ひて 古今に君ならで云々

色をもかをもの詞をとれり

去る人にもあらずやと 兵部卿又右の歌のことばもて

こたへたまふ

いひしらぬ匂ひどもの 記者説 あながちにおとりま

さり云々と云に依によろしき中に一種なんどおくれ

たる有をも強てことわり給ふと云なりさて此一種と

いふは其一香の中には沈のすゝみ過丁子のおくれ

たるなどやうにいふ意なりといへる説はよし

とうで 取出

右近の陣のみかは水に 或説承和の御時右近の陣の御

溝ツツミの邊にうづまる後代相傳へて其所をたがへすとい

へり

西のわたどのゝしたより 入楚 或説右近陣は西の方な

れば六條院にも西のわた殿の下と云なり

惟光の宰相 細これみつ參議に任せられし事爰にはじ

めて見ゆ

兵衛のぞう 幼女の巻に童にてありし人なり

宰相中將 夕霧

宮いとくるしきはんざにも 源のをことわるにつけて

わび給ふなり

同じ方こそは こゝも前にさうわの御いましめの二つのほうをいかでか御耳には傳へ給ひけんといふを本としていへるなり

さいるんの 権

さいへども 細或説源も紫上も黒方を合せ給へれど是はいづれよりもまづやかなるけの有てすぐれたるとなり黒方のふりはか様に有べき事とぞ

おとりの御は 源氏なり

たいのうへのおんは 紫上は侍從黒方梅花三種なりはやく心まらびをそへて 匂のすゝみたるなり

或説梅花方沈香八兩二分占唐一分二朱甲香三兩一分廿松

一分白檀三分二朱丁子一分麝香二分二朱以上十五兩三分寛教僧都が説春は丁子加増有べしと見えたりかやうの香を過されたる歟眞淵いふ雜要抄一劑丁子二兩二分半劑一兩一分なりこの注は誤なり

此ごろの風にたぐへんには 梅花は即此香によせて合すると雜要抄にいへり

夏の御かたには 花ちる里

かすくにも立出すやと 御かたはくはくさくの方

をあはせ給ふべけれどそれにあらそひ出べき我ならずとてたい荷葉一方を合せ給へり右に烟をさへ思ひ消と書り

荷葉を一くさ 荷葉方雜要抄に廿松一分沈七兩二分甲二

兩二分白檀三朱或熟金二分鶴香四分四朱一分二概二兩二分以上十三兩二分天慶六年二月廿一日甲午公忠朝臣所獻之

冬の御かたにも 明石上

時々によれるにはひの 春夏によりたる梅花荷葉などを云

宇多上皇なり

さきのすぎく院のをうつさせ給ひて 承平のみかどをさし奉るなり 前朱雀院の御方を其後の公忠朝臣して摸し合せ給ふ時に朝臣こと更に撰考て合せしくのえ香の百歩の外もかをる方といふなりさて此前朱雀院は寛平上皇をさし奉て其方うつさせられしは承平の帝朱雀なるべし公忠朝臣は光孝の御孫にて延喜承平に至る人ながら前の朱雀と書るはその後に朱雀天皇のますに對たる語と見ゆればなり

百歩の方 繪合巻に香壺の筥ども世の常ならず種々の御たき物どもくぬえ香またなき様に百歩の外をおほ

く過にほふまで心こととのへさせ給へりてふに

て此くぬえかうは焼ずしてことに遠くかをる事明らかし且此香の事よもぎふ繪合初音など卷々に委しくいへり方は雜要抄に見ゆ

おもひえて 是ぞはへ有べしと

すぐれたりと 西宮抄にも書たり

むとくならず 不無徳

心ぎたなき 源のたまふ

きらひ給ふ かく有べうもなしわらひ給ふと有しをき

らひと書そこなへるものなり

月さしいでぬれば 前に二月十日と有

おとりのあたり 殿なり

藏人所 或人云執柄大臣家にもあり殿上の次の間に布障子を隔て藏人所はあり地下の者さぶらふところなり

あすの御あそびの 御裳着の御遊

御ことゝものさうぞくなどして 絛かけ柱つけなど

頭中將 柏木

辨少將 柏の弟

げさんばかりにて とひ來し人の名をまゐるして主人に

見するのみ

宮の御まへには 蝋

おとりに 源

頭中將 柏木

宰相中將 夕霧

をりにあひたるしらべ 或云春は雙調歎

梅がえいだしたる 梅がえにさゝる鶯春かけてはれ

一段春かけてなげどもいまだ雪はふりつゝ二段

たかさごうたひし君なり 神の巻に在

さしいらへし給ひて 助音

鶯の さらでも心をしめらるゝこの殿のあたりにいよ

ゝこの詠曲にあくがれて千代もへぬべき心ちすと

ちよも經ぬべし 古今に「いつまでか野べに心のあく

がれん花しちらすはちよも經ぬべし

いろも香も 色にも香にもそむばかりにとなり

かれずもあらなん 常かくておはせかしとなり

宰相中將 夕霧

鶯の 絲竹の音の妙なるには雲をとめ草木をなびか

すよしいへば先ははめてよめるなりさて次の二首の



様雲の雁の事を下に思へりと見ゆさらば是もその  
添ことなるべし

心ありて風のよぐめる おもては明らけし是もあなが  
ちに我をよぎいとへるかたへよぎも堪へぬばかりい  
ひよるべきかと云なり  
なさけなくと 花の爲なり

霞だに 霞みて月花もわかぬ故にまだ夜深しとおもひ  
て鶯も鳴出ぬとおもてをいひて下には此へだてなく  
て雲居雁に住給ふ様になりなば我らもよろこびなん  
といふなるべしまことに明がたに成てとは此歌のお  
きての語につきて書るのみ

みづからの御れうの 源の  
花の香を 花の香は薫物えならぬ仙はまゐらせし装束  
なりかたぐい成色香にまみけんと妹がねたみて  
んかしとなりくしたりやとは妹に心をおきたるをい  
ふ

御車かくる程に 牛をなり  
めづらしと 右の妹やとがめんとよみ給ふにつけて此  
とがむる妹のあればこそ玉かづらをばまゐらせざり  
しなりさてけふの花の香まめたる衣をば錦着てかへ

り給ふところ家人はめで奉らめと戯てよみ給へり故  
に宮はからがり給ふと書たり此歌を常さまに見ては  
かなはず

又なき事と 即源  
いといたう 宮  
西のおとくに 入秋好の坤の殿なり  
わたり給ふ 御裳着の爲  
宮のおはします 中宮

にしのはなちいで にしのたいの放出なり  
御ぐしあげの内侍 けふは内侍のつとむるなり かく  
はいへど此時髪をあげらるゝとも見えすたゞかんざ  
しするのみ歎さて中宮の御ぐしとる内侍をけふ姫君  
の御爲に用らるればかくいひつゞけしならん  
こなたにまゐれり 此宮へ  
うへも 紫

御かたぐいの女房 宮と紫の女房だち  
御裳たてまつる 姫君に  
おぼしすつまじきをたのみにて 源中宮へ申給ふ  
なめげなるすがた 此中宮は御よそ人ならぬまゝにか  
くは申うけつれど童姿にて中宮の御前へ姫君の進み

出んがかしこきをまして此事によりて行啓を申すは  
後代かろくしきかたの例にもやならんと忍びつゝ  
まれ侍るとなり

中宮  
宮いかなるべき事とも 右のなめげなる又後の代のた  
めしにやなど様のことはいかならんとおもひわか  
ざりしをとのたまひ且萬づを殿かにし給ふはもとよ  
り御またしき間に中々心おかるゝとのたまひなどし  
て御みづからのたふとさをいひけち給ふなり

あはひめでたくおぼさる 宮と姫君と紫とをいふ  
母君の 明石上  
かゝるところの 記者語  
よろしきに 世の常の所のだにかゝる儀式は事おほく  
てゑるすもうるさきにましてけふはとなり

東宮の御元服 朱雀院の皇子明石姫君に御とし一つま  
さらせ給ふかみをつくしの巻をむかへ見よ  
おぼしきさすさまの 其御心ざし有よしなり  
左のおとく 梅がえの左大臣  
左大将 誰ともなし

きやうさく 考課選叙令などに景跡といふは行跡の善  
をいふを轉じて事もなくよろしき姫君てふ意にとれ

り  
聞き召て 源  
御参りのびぬ 明石姫君の

つぎ／＼にもとまづめ 左大臣も右大将も明石の姫君  
のつぎ／＼に参らせんとおぼせしをかく源氏のた  
まふを聞てまづ左大臣の御むすめ参らせらる  
梅がえ  
左大臣殿の三の君 是はやどり木の巻に藤壺の女御と  
あるは此麗景殿にや年経て後の事なれば藤つぼにう  
つり給へるにや

まげいさを 桐壺  
御まゐりのびぬるを 四月云々に隔てつゞく  
宮にも 東宮  
四月にとさだめさせ給ふ 或説陽明門院の萬壽四年四  
月廿二日に太子宮に十五にて参り給ふ例といへり

御みづから 源氏  
物のまたかた 下形  
さうしの宮 雑要抄に御厨子におく草紙の宮には萬葉  
古今後撰集を入れられし也此物語には萬葉と古今集  
と二つ見ゆ天曆より前なるさまにわざとせし成べし  
これ古今は延喜の御筆のなりとすれば延喜五年より

中宮の 秋好

母みやす所の 六條

わざとならぬをえて 源氏の

おぼえしはや 者よなり

さてあるまじき 右御息所の事を源のおぼし出るなり

くやしき事に 御息所は

宮にかくうしろみ 秋好

心ふかうおはせしかば 御息所

宮の御手は 秋好

かどやおくれたらんと 手のかたの

故入道 薄雲

よはき所ありて匂ひぞすくなかりし 花はじめよりう

つくしびれてよはくとしたるは歌も音曲も何も餘

情なしつよき所有をよくならはし得ればおのづから

にはひの有なり

院の内侍のかみ 朧月夜

そぼれて 亂

かの君と 朧月夜

前齋院と 權齋院

こゝにとこそは 紫上

よほど後のさまなり

やがて木にも 手本なり

よろづのこと 紫上に源の語り給ふ

かなな 此は假字てふ語を音便にてかななといへり眞

字をまんなどいふも同じくとなへかかのみなりさて

假字とは他國の字音をかりてこゝの語を去るすをい

ふ譬は安末乃波良と書く類也是を字の文字にかくを

女手といふあまのはらと書が如し又眞字とは天之原

と書をいふを是を草には天之原と書り此文の頃に草

にもかなにもといへる草は即此草也かなとは右にい

ふ如く字音をかりて安末乃波良と書く類をいへり

いときはなく よく成たるなり

ひとすぢにかよひて 筆法皆相似たりとなり

たへに 妙になり

をかしき事は 愛なり

とよりて 或説古によりたる事をば奥よりてといへば

とよりては外よりてにて末の世によりたるをいふと

いへりさも有べし

女手を心にいれて 假字を草の草に書をいふ

こともなきてほん 難なきを萬葉にことなきとよめり

このかすには 紫上

いたうなすぐし給そ 卑下を過すもわろきなり

にごやか 和

まんなのすゝみたるほどに まんなは眞字なりされど

行字草字などをこゝにはまんなと云成べしさて此時

かななど云は上にいふ如く草の草にて書ざま一つの

躰と成し故かなはかなと心入てならはざればよろ

しからぬ事後々もさある事なり

まじるめれとて たま／＼交るなるべし

さうしどもつくり 此中に女がたも有なり下にて見ゆ

こはさうし宮に入べき料なり扱さうしは冊子をのべ

ていへり造紙草紙雙紙など書は推量の事のみ

左衛門督 誰ともなし

物せん あつらへ書せんとなり

みづから 源

ひとよろひはかくべし 一部をいふべし

けしきばみいますがりとも 源みづからの事を戯ての

たまへりいますがりは濁るべしいせ物語古本に在の

字をよめり

われほめ 自讃

すみふでならびなくえり出て 或説にはあつらへ給ふ

かた／＼へ贈らん料かと云りされどこゝの文は隔句

がちに書なしたれば源の御料なるべし筆は人々の手

にかなふをこそ用ゐめ

たゞならぬ御せうをこあれば なほざりならずたのみ

給ふなり

人々かたき事におぼして 此御料にならん事のかたき

なり

こまのかみの 高麗

宰相の中將 夕霧

兵衛のかみ 紫上の兄弟

頭中將 柏木

あしでうたゑ こゝの説々はあたらす下のあしでのさ

うし云々と有所にいふをまつべし

れいの玄ん殿にはなれおはしまして 薫物合せ給ひし

同じ所なり

花ざかりすぎて 三月末

さうのもたゞのも 右にいふ如く草とは字義にて草に

書をいひただのとは假字にて且草の草をいふなるべ

しさて同じ草ながら女手にかくなり

いかにぞやなどえり出給ふに口をしからぬ 此歌はい  
かがあらんそれやよからんなど仰合さるゝなり 右  
歌共の中によしあしをいひ合せて撰出給ふにかひあ  
る女房たちを近く侍らはせらるゝとなり  
別記 是は御厨子におかるもさうしの筈に入べき料  
なり其料雑要抄には萬葉抄古今抄後撰抄と云るせし  
なり抄は後世は注の事とすれば右三集のうら書有本  
を云にやとも思ひつるをこゝのさま古集の中より撰  
て書出したるを此度の御料とし給ふなり然ればかの  
抄と有も書ぬきの事成べし抄の字のものと意にもか  
なふなり

けうそくの上 源氏

玄ろきあかき 色紙なり

けちえんなるひらは 色紙の白きと赤きには書たる字  
の掲焉掲げにまぎれなく見ゆる物なればことに心して書  
給ふとなりひらは紙の枚なり

おどろきて 源

御なほしたてまつり 松風の巻にうちぎのみにておほ  
せしこと見ゆこゝもさる故に直衣まゐるなり

御玄とねまゐりそへ 源は前より齒にませば宮の御料

なるを敷そへさせ給ふなり

つれづれにこもり侍るも 源

すぐれてしもあらぬ御手を 宮の手

たゞかたかどに 帚木の物語の條に其かたかどにな  
きはあらんやと有に同じくこゝは筆すみたるを得た  
るかたにいふべし

すみたるけしきありて 歌のそばみたる古ことゝ云に

類ひたる様なり

歌もことさらめきて 手のすみたるにつきて歌も古風

にからびてたけ高きをとさらしに撰みて書給ふとい  
ふなり

ふることも 古言

たい三くだり 歌一首の事さうしのひらごと三くだ

りにても有べし

もじづくに 假字がちなるなり

かゝる御中に 源の御もとめの中どもにさし出んをも

はぢすおもつれなう筆を下してまゐらすはさは有

ともいかでよろしうと思ひても書侍りしと宮の戯て

のたまふなり

かき給へる 源の

かくし給ふべきならねば 御玄たしければなり

すくみたるに 紙の體色などもすくくとして艶なら

ぬをいふなるべしこまの紙の和わうなつかしきと對へ

ればなり

さうに書給へる こは萬葉の歌を草に書なるべし古今

などはかな多に書く事古へよりみゆ

めでたしとみ給に 笠の

こまのかみの 高麗紙

はだ 膚

なごう 和やかなるなり

み給ふ人の涙さへ水ぐきに めづる餘に 或云獲麟一

句涙興筆白氏文集中務集「なき人の書きとゞめける水

ぐきを見るに涙のながれぬる哉此歌中務集に見えず

齋宮女御集に「いにしへのなきにながるゝ水ぐきは

跡こそ袖のうらによりけれ

かむやのまきし 北野の紙屋河にすく紙なり

さうの歌を さうは文字の草なり

まどろもどろに 即みだれ書をいふ 六帖「まめなれ

どよき名はたゝずかるかやのいざみだれなんまどろ

もどろに

さらのこりどもに 所々より參らせしは

ふでのおきてすまぬ心ちして ふかく習得ずしてつく

ろひいたはりて書く故に筆の蹟静まらぬなり

ことさらめきて たくみ有てまづまらず心高からぬを

まだしきほどの人は中々よき歌と思ふものなり

女のはまほにも 女君たちの書き給へるは

齋院のなどは 朝がほ

あしでのさうしどもぞ心々にはかなうをかき夕霧幸相中將

のは水のいきほひゆたかにかきなし こゝの様は水な

どは常の繪に書て歌を芦の形に書けるなるべし又は

いかめしう引かへてといふは世はなれたる山を繪に

書て詩を岩などの形に書たらんこのみ書とは物ずき

のからめいてことなる枚も有といふなるべし是らに

てあし手書てふことはまらるその中に此はじめはか

の芦の葉様に書しよりことおこりたればあし手てふ

名は有なるべし且歌繪と云は歌の意を常の繪に書て

歌をも常ざまに書き加ふるを云又あし手歌繪といふ

時はもとより歌の意を繪にもかきて且歌をも芦の葉

の形に書てまじへたるをいふなるべし上にあらぬ物

のかたどもを書を歌繪といふといへる説はいかにぞ

や

そ、けたる芦のおひさま 草字を芦の形とせしかば葉のなよ、かならぬなり  
なにはのうらにかよひて 芦手なればいふ  
こなたかなたゆきまじりて 芦のいきほひ芦の生さまなり

もしやう石などの 文字にて岩をかけるなり

これはいとまぬべきものかなと 字を繪の形に作り  
なすは大かたにては作り得まじければ書ぬるに日を  
經ぬべしといふなり

なに事もものごのみしえんがりおはするみこにて 兵部卿の事

つぎがみのほんども 續紙の卷物の古き手本なり

御子の侍従して 兵部卿宮の御子

古萬葉集 今萬葉集は二十卷あれども是は家持卿の家に古歌どもを集たるがすべて廿卷とはなれるなりけりされば古萬葉といふは彼廿卷の中に一二の卷なり榮花物語に諸兄公の撰といへるは是成べし三の卷より下は家々の集なりその一二の卷の中なる歌を又撰出してさがの天皇のか、せ給ふ四まき有といふなり

り

古今和歌集 延喜の御代に撰られたる集なれば宸筆もあるやうに此文に書きなせるのみ成べし

からのあさはなだのかみ 唐の淺縹の紙  
きのへうし 綺の表紙

おなじき玉のちく 淺縹のおなじ色なり今えぞの鳥より出るといふ玉此色なり

だんのからくみのひも 段々にいろくにて染たるなり

まきごとに御手のすぢをかへ 或説行成卿は十二の樣をかけりなどいへるが如くくさくの體を書給ひしと云なるべし

おほとなぶらみじかく 切灯臺なり

つきせぬものかな 限りなき風情なり

とめたてまつり給 源へまゐらせ給ふなり

女ごなどを 兵部卿

ましてくちぬべきをなど 女子は持給はねば

侍従に 宮の御子

からの本などの 是も手本なるべし

こまぶえそへて奉れ給 源より

此御はこには 明石姫君の御料の御厨子のさうし筥に入る萬葉古今などの事をこにもいふなり

人のみかどまで こゝの寶ものはもとよりにてもろこしなどまでかけて世にまれなる物ども有といふを略きて書るなるべし

かの須磨の日記 既繪合の時須磨明石の二卷は出し給へれど猶同じ類ひの繪多きなるべし

今すこし世をもおぼしきなりと 明石姫君

人のうへにて 雲井雁をえ參らせぬ事をおぼすなり

ひめぎみの御ありさま 雲井雁

あたらしうつくしげなり 内に參らせぬが惜なり

かの人の御けしき 夕霧をいふ

心よわくすゝみよらむも 内大臣より

一かたにつみをも 夕霧にのみは

宰相のきみは 夕霧

ほかさまの心は 雲井の外には

たはぶれにくき いと前にも有し語なり こはかのありぬやと心見がてら云々てふ歌の語を用ゐたりさて

えももてなしとづめては居がたきを有るをいふ

あさみどり聞えごちし 六位過せといひし

おとやは 源なり

あやしうきたるさまかなと 夕霧の獨住を

かのわたりの事 雲井の雁の事

右のおとや 誰ともなし

けしきばみ 夕霧をむこにと

ものも聞え給はず 夕

かやうのことは 源の夕への仰

かしこき御をしへに 源の御父帝の

ながきためしにはありけれ 後代のためしぞとなり

つれなくと物すれば 夕霧の獨すみ

思ふ心あるにや 或抄にあるは時につけて心ゆかぬふ

しもある歎又好ましき方にて内のおぼす女がたなど

に心をかくるにやと人のおしはかりもこちたからん

となるべし

ゑりびに びはぶりの反なり 後手といふ事を萬葉に

ゑりぶりとよめる即是なり

いみじう みづからの心は

心にしもかなはず 思ふにかなはぬ世のならひぞとな

ものから 故

いはけなきより 源のみづから  
 とがをおひて 須磨のうつろひ  
 くらゐあさく 位浅きほどは心もあさくて溢らしやす  
 きものなり  
 おこりぬれば 起なり  
 思ひまづむべきくさはひなき時 一人におもひとまる  
 所もなき時なり  
 さるまじきことに心をつけて 六條の御息所をさすべ  
 し  
 つひのほだしと成ける 菩提までの事か  
 わがこゝろにかなはず 葵上を下に思して宜ふか  
 去のばんこと 堪忍がたくとも  
 もしはおやの心にゆづり 女のおやのむこをかしく  
 をいふ  
 世中かたほにありとも 花散末つむなどの心あり  
 かやうなる御いさめにつきて 夕霧の心  
 女もつねより 雲井雁  
 おとこの 内大臣  
 うへはつれなく 拾遺戀「芦根はふうきはうへこそつ  
 れなければ下はえならず思ふ心を

御文は 夕霧より  
 たがまことをか 雲井雁の心 古今に「偽と思ふ物か  
 ら今さらにたがまことをか我はたのまんでふ如く夕  
 霧の文はいつはりごとくも思へどさらばとて又の人  
 を思ひたのむ心もなきとなり  
 哀と見給ふしおほかり 雲井は夕の文を  
 おとこのひきかへし 内大臣  
 おとこのくちいれ 源の  
 去うねかりきとて 我  
 姫君 雲井雁  
 いかにせまし 内大臣の心  
 やがてはしちかうながめ給 雲井雁  
 御文あり 夕より  
 さすがにぞみ給 つらきものから  
 つれなさは 雲井雁のつれなさは世中のつね人の如く  
 いやくつれなく成を我のみは世のならひとことに  
 て忘れずとなり  
 人にことなる 夕のみづからいふ  
 かすめぬつれなさよと かの中務宮の御かたの事を  
 かぎりとして 夕の世にすして忘すと有をうけて忘れ

がたく思ふらんを強てわすれ行て外へうつり給ふか  
 らは世中になびく心にぞあらんとなり  
 とあるをあやしと 中務宮のかたの事は夕霧は心にも  
 入ねばまして雲井の聞給へるとも去らねば此返しを  
 うたがふなり

源氏物語新釋

藤裏葉

此卷は御ときよくさうどきて藤のうら葉のとうちずし給ふてふ詞もて名づけしなり且此卷には源氏の卅九の三月より十二月までの事見えて梅がえの同じ年の事なり

御いそぎのほど 明石姫君東宮へ御参りのあらまし事なり

宰相の中將は 夕霧

ながめがちにて 例の雲井鷹によれり

かつはあやしく 恨あれば思ひ絶べき人なるをとしへてかくおもふをいふ

關守の 古今「人ぞれぬ我かよひ路の關守はよひくごとくにうちもねなゝん

おもひよはりたなるをさゝながら おとゝのゝたまへる事上の卷に見ゆ

女君も 雲む

もしさもあらば 夕の中務宮の聲となりなば

おとゝも 内大臣

たけからぬにおぼしわづらひて つよき心を通すほどのよき事も出来ぬをいふ

又とかくあらため こと人をむこにせん事なり人のためもくるしう 夕霧はよそ人ならねばおとゝのさすがに心苦しきなり

わが御かたざまにも おとゝも雲むもかねいふことあやまりも 前に夕霧とあひし事

うへはつれなくて 内大臣のみづからはさる物にて夕霧の下にうらみ思ふ人なれば不意におとゝの打出しにくきなり

ことくしく 今更

三月廿日 藤ばかりの卷に此御服を四月といふは誤なる事こゝにてみゆ

極樂寺 諸説に昭宣公の建られしより世々に藤原大臣家の墓所とすといへる委しからず宇治拾遺に極樂寺は堀河太政大臣兼通公の建給ふと見えたり又榮花物がたりにこばたと云所は太政大臣もつねのおとど

のてんじおかせ給へりし所なり藤氏の御墓とおぼしおきてたりける所にと云々かくあれば昭宣公は只墓所を點じ定められしのみ

宰相中將 夕霧

おとゝもつねより かの御下心あれば

とりもちて ことに御母代のおほば宮なれば

宰相も 夕

ながめいりて 猶おもふ事有る様

心ときめきに 内の大臣はかのこと云出んとおぼすにつけて夕霧のむかし去たひ給ふけしきを見とりてけ

ふの御法のえといひより給ふなり

袖をひきよせて 夕の袖を

かうじ去たまへる 勘當なり

みのりのえをも 法縁なり

のこりすくなくなりゆく 内大臣の齡

うちかしこまりて 夕霧

過にし御おもむけ 萬故大宮もよろづの事内大臣を頼

めと様に仰られしとなり

君いかにおもひて 夕霧も同じく歸りておぼすさま也

よとゝもに 萬世とゝもになり

四月ついたち頃の 下に七日の夕月夜と書り

おまへの藤の花 内大臣の庭

頭の中將して御せうをこあり 柏木御使にて夕霧へ

一日の花のかけ 極樂寺にて

わがやどの 内大臣

げにいとおもしろき 藤の色こきと有歌をいふ

待つ給へるも心ときめき 夕霧の心にさればこそゆ

るし給はんよと思給ふなり

なか／＼に 或説おとゝの俄に名殘なくゆるし給へば

かへりて心まどひするといへり

おくしにけれ 憶なり

とりなほし給へよと 柏木に此歌の詞をなほし給はれ

といふなり

御ともにごそと 頭中將

わづらはしきすいじん 夕霧

おとゝのおまへに 源なり

おもふやうありて 源のゝたまふ

すぎにしかたのけう 興

御心おごり これも源をいふ かくかなたよりすゝみ

てのたまふにはこそあらめとおぼす御心のほどをい

ふ

さしも侍らじ 夕霧申給ふ

わざとつかひ 源 使

なほしこそあまりこくて なみくなる家からの人の  
わかてまだ宰相ならぬほどこそ二あるはよきを夕  
霧は源の御子といひ宰相にもあればふさはしからず  
けふは引つくらふべきものとてたまへり源の御料な  
ればうすはなだなるべし

わが御かたにて 夕の所  
なほ人にすぐれて 夕霧

御かうむり 内大臣

かうざく 景跡の字音にてこゝは人がらのよろしきを

いふ

かれはたい 源

あいきやう 敬

ことわりぞかし 源は皇子なれば

これはざえのきはも 夕霧をのたまふ

をしく 雄々

春の花いづれとなく 内大臣花を評せらるゝなり

心みじかく 花の

此はなのひとり 藤

いろもはたなつかしき ゆるし給はん下の心此詞にこ

もれり

月はさし出ぬれど 下になの日ころのゆふ月よといへ

みだりがはしく 夕霧に

さる心して 夕霧

きみはすゑの世には 内大臣の夕霧をさしてのたまふ

なり

よはひふりぬる人 おとゞみづからを云

文籍にも家禮 或説云文籍は史記をこゝにてはいへり

高祖紀に六年高祖五日一朝太公如家人父子禮

云々

よくおぼしゑるらんと 儒教なり

いかでかむかしをおもふ給へいづる御かはりどもには

外祖父母だちさておとゞは夕霧の外男なれば父に准

すべきを却て心なやまし給ふとなり是も打とけての

御物語のみ

御ときよくさうどきて 内大臣のをりよくとりさわぎ

もてなすなり

藤のうらは 後撰に「はるびさす藤のうらはのうらと

けて君し思はゞ我もたのまん是をもて相ともに頼む

心のたとへとし給へり

頭中將 柏

取てもてなやむに 盃は必歌よみてさす例なりことに

藤の花をも給へるにおとゞの御歌もなければことの

心も得ずもてわづらふなり是を見ておとゞ歌よみか

け給へり

内大臣 心くらべにこなたのまけたるはねたけれ

むらさきに ど御むすめ故なれば今はうらみも残らず解たりとの

たまふなり

宰相さかづきをもちながらけしきばかりはいし 御母

方のをちの聲とりの盃なれば立て一拜し給へるなる

べし

いくかへり 夕霧 かくよみかけて盃をさし給へるな

り

たをやめの 柏木

はかしくしからで 次々に歌よみて盃はさし流せしが

其歌は器となり

七日の夕月夜 上についたち頃といへる是なり

げにまた 上に心短く打捨て散ぬるか云より夏に咲

かゝると云までをうけてげにといへりさてまだほの

かなる木末とはさくらはほのかに残れど色もうせた

るを云ならん

かゝれる花の 藤

れいの辨の少將 聲有人なり

あしがきをうたふ さいばらにあしがきまがきかきわ

けててふこすとおひこすとわれ一段てふこすとたれ

か此事をおやにまうよこしけらし二段とゞろける此

家の弟よめおやにまうよこしけらしも三段下畧此と

ゞろけるは弟よめが物とゞろきするくせをいふを此

家とつゞきたるをいみてとしへにけるとうたひなほ

し給ふにやさて辨のかくうたふはこなたのまけたる

をふかくねたむ故なり下に中將すらねたのわざやと

ありすべておとゞの歌もことばも此意なりされどか

くいひはらして物思ひ残らず成ぬといへり

としへにける此家のと 時にとりてうたひかふる事此

文にもかたゞ見ゆ

ほとくしう 更たる夜道を酔過してあやうく堪がた

しと云なり或説におどろしくと云は誤なりおど

ろくしくは史の宣命に驚と書り

おとゞ 内大臣

朝臣や 頭中將をさす

むらい 無禮

花のかげの かりそめの御心やりよと少し心まらびし

ていふなり

松にちぎれる 六帖「常磐なる松に契れる藤なれどお

のが頃とぞ花は咲けるてふをとれり

ゆゝしやとせめ給 花のかげと云を物の始にいみ給へ

り

人さまの 夕霧の様

をとこ君は 夕霧

いつかしうぞ 夕霧みづから身のおぼえ高きをおぼす

なり

女は 雲の馬

よのためしにも 六帖「戀しきにまぬるものとはきはき

ねども世のためしにも成ぬべきかな後撰には此意なれ

ば戀死ぬべかりしを終にいかで逢まらせんと心を

やりてながらへ侍ればとなり

少將のすゝみいだしつる 夕霧猶のたまふなり

いたきぬとかな 右にけやけうも仕りけるといふに同

川口のとこそ さいばらに川口の關の疎離アラクキやせきのあ

らかきや守れどもわれ一段まもれども出て我ぬぬや

いで、われ寝ぬや關のあらかき二段此歌もていらへ

まほしかりしはさのみ關人ならばつよくせけかしあ

らかきしておろそか成りし故に女も心あはせて出て

あひしぞとをこになりてこたへんとおもひしとなり

淺き名を 雲のこは右によりて雲のあらそひことわる事

と思へる説は皆わろした、われらが心をきなく淺は

かなりし事の名をたて、人口にいひながされしはい

か、つゝみもらせしにかありけん人口はおぞましき

ものなりとみづからなげく故に女子してなだらかな

りと男もおぼすさまなりあさましはをぞましこめき

たりは女子らしきてふ事成こといと前にもいひしが

如し後人此語をも思ひ誤故に歌をもとき違へり

少 もりにける くきたの關と云は物に見えずなみだの關

を見そこなひて書るなるべしさて女君のはかなだち

てなだらかにいひ給ひし故に男君の心もなごみて少

しわらひてこは人口の淺くいひなせしとのみおぼし

てもとは我思ひの餘りに泪せきあへずもらせし故に

あらはれしものなりけりと今はをれてのたまひたる

なりかくとかでは此すこしわらひてと有も聞ゆべか

らす

くきたの關 久岐田 伊勢

人々聞えわづらふを 侍ふ人々おどろかし申せどえお

き出給はず

されどあかしはて、ぞいで給 花明しはてずしてなり

ねくたれのあさがほ 六帖「ねくたれの朝顔の花秋霧

におもがくしつゝ見えぬ君かな

なほまのびたりつる 亥たりがほならんはいかにぞや

とての心づかひか

中々けふは 女君

えきこえ給はぬを はぢて御こたへを

つきせざりつる 夕霧の文

中々いとい思ひまらるゝ 昔より六位すぐせなどいひ

うとまれしに今ゆるされてもかくつれなきに中々い

とい思ひまらるゝ身のほどなり

不堪 ぬ心に又きえぬべきに 年月うとまるゝうき身の

ほどを思へばえ賦がたき心ながらにけさはそれが上

にかくてもつれなうおはすに身も消ぬべきにもえ消

がたかくてかくいひやるをとよむなよと歌まで引つけ

て見るべしさて年月忍びにをりしも今はえせきかね

て涙こぼすぞとなり

とがむなよ 夕霧

いとなれがほなり 歌の意におのづからなれくしき

さまあり

うちゑみて 内府

昔の名残なし むつかり給ひし

見ぐるしや おそきはわろしといふ意にてかくはいふ

なり

わたり給ひぬ 歸り

中將 柏木

右近のぞうなる人 夕霧今は左中將なれど家人の右近

將監なるを使としたまふにや

宰相 夕霧

うちまもり給ひて 源

御心とおぼえける 是までは夕を源のほめ給ふなり

よの人もいひいづる事あらんや 先の様にも似ず

わがたたけう 夕の心おごりし給ふなどなり

すきくしき心ばへ 女をあなづりてあだめくすき心

などし給ふなどなり

さこそおひらかに 内大臣の心は



おだしからず 不穩

もうちあひ 内大臣と夕霧の御中を

御子とも見えす 或云夕霧十九源氏は卅九なれども源

氏わかくて御兄弟のやうなり

このかみ 兄

おなじかほを 源と夕となり

おまへにてはさまぐ 源と直に見くらぶる時は

おとどは 源

うすき御なほし 薄花田なり

御ぞの 衣なり

もんげざやかにつやぐとすきたる けもん綾なるべ

しかれば文のところをすかして織たるをけもんと

いふなりけり既に野分にけもんれうと有所にこゝを

引く委しくいひたり

すこし色ふかき御なほしに こき花田

丁子ぞめ 或云かさねなり 香に黒みある色といへり

されどこがるゝまでといへば赤き氣の深きなるべし

まろきあやの 或説に丁子染をかさねといへれどけう

滋佛によりて下襲着給んか猶いかかと覺ゆ河内本に

こゝのあやのなつかしきと有によるべし

ことさらめきて にひむこの引つくりひたるをいふか

くわん佛 きのおふ七日の夕月夜と有ての明る日なり類

衆國史に承和七年四月八日請傳燈大法師位靜安於清

涼殿始行灌佛事 抄昔より諸寺におこなふ佛生會は

推古天皇よりはじめられ灌佛とて内裏又親王大臣家

までおこなはるゝは承和七年よりはじめられ

御導師 佛生會の

御かたぐより 女君たちより

わらべ 女の童

ふせなど 江次第に布施の様委し別記にあり

おまへの 内を申

御前よりも 内の

心づかひせられて 此院にては

さい相は 夕霧

いよぐけさうじ 既こと更めきさうぞき給へど

ひきつくりひて出給 雲の鴈へ

なされた給ふわが人は 惟光の女の内侍のすけの類

猶も有べし

水ももらんやは いかでかくあふこがたみになりぬら

ん水もらさじとむすびし物を

物御覽すべき 加茂祭

御かたぐの女房云々 外の御かたぐは立出給はね

ば此御方々とあるは紫上と明石姫君とをいひて其女

房たちの車引つづけたるを云なるべしさて御前所

所しめたるといふは源紫上姫君などおのゝ別にし

めたるなりさてよきさすきは所しめて草木を植など

する事有其上に車を左右に立なめてそれとしるきな

り

おとどは 源氏

中宮の御母みやす所の むかしの六條御息所

おしきけられ 押避

時による心おごりして 葵上

さやうなる事なん 他をおしけちなど

なさけなき事なりける 心やりなきなり

こよなくおもひけちたりし 他をば

人も 葵

なげきおふふにて 其けたれし人のなげきを負なり

なくなりなきと 身まかり

その程はの宣ひ なくなりたる事の様はいはんもこと

更めき且いましくもあればはぶき給ふとなり

ちかまさりを 夕霧の

まめやかなる 夕の

おぼしゆるす 内大臣

はなやかにめでたく 雲の鴈

北方さぶらふ人々などは 雲の鴈の織母がた

なにのくるしき事かあらん 夕霧の爲に

あせちの北方なども 雲の鴈の實母

六條院の御いそぎは 明石姫君の御参りの事

廿日あまりの程 一に廿餘日のほど

禁上 たいのうへみあれに 加茂の祭の日御形の神館にまう

で給なり 花みあれは玉依姫の別雷神をうみ給ひし

所を云にやさて御生とも書なりすなはちかたちをあ

らはし給へる故に御形とも書り神館は糺と御祖との

あひだにおきみちといふ所にあるといへり

例の御かたぐ 花散里などを云成べし

御車廿ばかりにて 人給など

事そぎたるしもけはひことなり 少なけれど人を撰な

どし給へば

まつりの日曉に 西の日の曉

かへさには 御あれの神館拜給ひて

のこりとまれる 其葵の末をいふ  
 宮はならびなきすぢにて かのおしけたれし御息所の  
 御子の秋好は中宮にたちて  
 すべていと定めなき世なれば云々 かの一所の末を見  
 て源の御身の末且紫のおくれて残り給ん時の爲をお  
 ぼす故に今御心にまかせて勢ひにつのる事をつし  
 み給ふとなり 上にもさる心して外の御かたぐへ  
 もあはれをかはし給へ末のためぞとをしへ給ふなり  
 この君心おごりの事は見えねど物ねたみにつけてさ  
 ることも有べし  
 のこり給はんすゑの世などの 紫の  
 打かたらひ給て 紫上のさすきに源の渡り給てこの事  
 あり  
 御さじきに 源の  
 そなたに出給ぬ 源の我御さすきへ  
 近衛づかさの使 或説賀茂の祭春日祭の使近衛づかさ  
 を用らるゝは東遊を奉らるゝ故なり舞人陪従は近衛  
 づかさの被官なるによてなり使の出たちまたかへり  
 だちに様々の儀式ある事なり  
 頭中將なりけり 柏木なり

かの大殿にて 内大臣の亭  
 出たつ所より 入柏木頭中將にて祭の使なれば内大臣  
 の亭より出立なりよりて右の上達部そこへおはして  
 それより此源の御さすきへ参り給へるなりけり  
 藤内侍のすけも使なりけり 惟光が娘夕霧の心がけ給  
 ふ人けふの祭の内侍使に立り  
 おぼえごとにて 源がたなれば  
 宰相中將いでたちの所にさへ 夕霧藤内侍のすけの出  
 立を  
 とぶらひ給へり 夕霧文して  
 うちとげずあはれをかはし 餘りなれしき様なら  
 で思ひかはすなり  
 かくやんごとなきかたに 雲の鴈  
 たいならず 典侍は  
 夕霧 何とかや けふのかざしをば且見れど名を何とかや忘  
 るゝまでに成しとてあふ事の中たえをなげき給ふよ  
 しなり  
 けふのかざしに 葵なり  
 藤内侍 かざしても けふみづからかざしながらも猶我こそあ  
 ふひてふ事はたどらるれ物知給ふ我身は去り給ひな

んと云てかくへだたるは御心よりなりとかこつなり  
 且かつらも葵も共に祭に用る物なればよせていへり  
 さて桂を折とは菅書齋曰臣對策爲天下第一猶桂林  
 一枝崑山片玉てふを以て對策及第の事にとりて拾遺  
 集に菅原大臣かうぶりし侍ける夜母のよみ侍りける  
 「久堅の月の桂もをるばかり家の風をもふかせてし  
 がな  
 ねたきいらへとおぼす 夕霧  
 猶この内侍にぞ 雲井に心さだまれどもまだ云々と也  
 かくて御まゐりには 明石姫君  
 北の方 紫上  
 かの御うしろみをや 明石上  
 おぼす 源の  
 うへも 紫上も  
 あるべき事の 姫君に添給ふ事は  
 かの人も 明石上  
 この御心にも 姫君をいふ  
 そへ奉り給へ 明石上を姫君に  
 あえかなるほども 姫君の  
 見およぶ事の心いたるかぎりあるを まのあたりの至

りはあれどふかき心しらびあらじとなり  
 みづからは 紫の  
 いつとしも 常にはなり  
 うしろやすかるべう 明石の添ゐなば  
 おぼして 源の  
 あなたにも 明石上へ  
 いみじくうれしく 明石  
 あま君なん 明石上の母さみ  
 いかにしてかはと思ふもかなし 此度は尼君は参り給  
 ふまじければなり  
 其夜は 御参りの夜  
 うへそひて  
 御手車にも 或説手車は姫君の車の事なるべし紫上は  
 同車して参内有なり末の詞に紫の上の葎ゆるされ給  
 ふ事をいへり又古は女房も葎をゆるされぬ程は宮門  
 よりおりて道の程は几帳をさへせてまゐりけるなり  
 たちくだり 明石の上は  
 うちあゆみなど 宮門より下て歩をいふ  
 わがかくながらふるを 明石上餘り有心やりなり  
 おぼしつゝめと 源の

うへはまことに 紫の心に姫君を

人にゆづるまじう 紫上の御はならましければ

うへはまかでさせ給ふ 紫上

たちかはりて 明石上

御たいめあり 紫上と明石と

かくおとなび給ふけちめよ 紫上の語 姫君をわが養

ひたて、かく参り給ふ迄とりなし奉りつるけちめを

見給は、わがうとからぬ心もおぼし知給ふべければ

過し年月に見奉らせぬ恨も此度晴給はんと紫の宜ふ

なり是は少しうちとけたる御物語なれば次にさる語

を書たるなり

物語などし給ふ 紫と明石上と

物などうちひたるけはひ 明石上の

うべこそはと 源の心とめ給ふを

又いとけだかう 明石上の 紫上をおぼす

そこの御なかにと 明石上の心

御心ざしにて 源

さだまり 紫上に

いで給ぎしきの 紫の

御てぐるまなどゆるされ 紫なり

女御の御ありさまに 大かたの女御をいふ

さすがなる身 前には紫に立ならぶ心せしを此まか

で給ふ禁などの様を見るにまかしながらわが身の品

下りしをおもひまらるゝとなり

いとうつくしげに 姫君を明石の上のめづらしく見奉

りて

ひとつ物とも 「うれしきもうきも心はひとつにてわか

れぬ物は涙なりけりてふ歌の語によりて今は過しほ

どのうかりつる其一つ身とも見えぬと外より見るさ

まと明石上の心とをかねていふなるべし

としごろよろづに 猶明石上

住吉の神もおろかならず 前に出たり又次の若菜の卷

しも

思ふさまにかしづき聞えて 姫君を明石上の思ふさま

に紫のかしづきたてしをいふ

をさくなき人のらうくしさ 姫君の生たち上臈し

きなり

おほかたのよせおぼへよりはじめ 源の姫君といふよ

せのおもきなり

御ありさまかたちなるを 姫君の

宮も 東宮なり

いとみ給へる御かたぐ

り

このは、ぎみの 明石上

それにつたるべくもあらず おとりばらの母のつき奉

るとてもおとりの御むすめといひ宮の御おぼしもこ

とにてはた此母君のとりなしことよろしければな

どの事かねいふならん

いまめかしく 是より明石の上の姫君をもてなし給ふ

さま

もてなしきこえ 明石上の

いどみ所にて 風流の

女房のようい 御方の

うへも 紫上

御なからひありまほしく 紫上明石は

さしすぎ 明石上は

ながからずのみおぼさるゝ 源の御命

御世のこなたにと 尖給はぬ前をいふ

みたてまつり 源の

心がらなれど 夕霧の一人すみし給ひしほどの事なり

思ひなく 雲の鴈に定りて

今はほいもとげなむと 世を通んこと

たいのうへの 紫上

中宮おはしませば 秋好は紫上の養奉る御子分なれば

御此かたにも 姫君

まづおもひきこえ 紫を

太上天皇になすらる御位 おりゐのすべらきならね

ばなすらる御位といふされど太上天皇の御封は二千

戸に勅旨田千町なり又太政大臣は祿令に三千戸とあ

れば既に源氏は三千戸なるべきに今准太上天皇となり

て御封加りと書しは其三千戸の上に又加へ給ひしと

いふにやあらん

つかさかうむり 年官年符なり 此は太上天皇の年官

と云は諸司の允一人諸國の掾一人目一人一分三人を

給ひ年符と云は五位符を一人補し給ふを云

かゝらでも 源氏政を執給ひつれば

昔の例を 太政大臣の時の例を改めたまひて院司など

もなりて殿に成しと云なり

いつくしくなりそひたまへば 殿重

うちにまわり給べきこと かるくしく

みかどは 今上  
ゆづり聞え給はぬ 源に  
内大臣あがり給て 内大臣は太政大臣に成給なり  
さい相の中將 夕霧  
御よるこびに 任中納言の慶賀  
あるじのおとゞも 今の犬との  
女君のたいふのめのと 雲の鷹の乳母  
六位すぐせと 幼女卷に有り  
ものゝをりくくに 夕霧  
うつろひたるを こは白ぎくのうつろひて紫になれる  
をわざといふからは此時までも唯白ぎくのみや有け  
む家集の中に一もとぎくといふは紫なるよしなれど  
それは稀なりしにや  
夕霧  
あさみどり 淺みどりは七位こき紫は一位の色なれど  
も歌にはさのみはよまれねば語のよりくるにまかせ  
て大かたをよめるなり 後撰に庶明の參議中納言に  
なる時九條右大臣うへのきぬをつかはすとこきむ  
らさきとよみ給へるがごとし  
はづかしう 大輔  
ふたばより 大輔

名だたるその 源の御子を云  
あさきいろわく露もなかりき いくとして猶ことわり  
なし  
御いきほひまさりて 夕霧  
かゝる御すまひも 雲の鷹の方  
三條殿 大宮の住給し  
宮のおはしまして 大宮  
むかしおぼえて 祖父のおとゞの榮を云  
せんざいども 樂天 童稚盡成人園林半喬木例の是を  
もていふなり  
ひとむらすき 君がうゑし一むらすき虫のねの云  
々をとれり  
ふた所ながめ給ひて 夕雲  
あさましかりし世の かの忍び事の願れてををましか  
りし時をいふ  
こひしき事もおほく 大宮又は葵上など  
人のおもひけんことも その時  
ふる人どもの 大宮の時の人々  
なれこそは むかしのまゝの庭の清水をもてかの老人  
どもの残りて有をもそへ給ふなるべしまじし水は眞清

水なり増水といふは誤れり 六帖に「我門のいさゝ  
小川のまし水のましてぞ思ふ君獨をばといふは眞清  
水のましを増に轉じてかさねたる物を本語をまらで  
まどへる説あり  
なき人はかげだにみえず 大宮などの御かけはたえて  
見えぬをやり水のみおのれつれなく心ゆくさまに見  
ゆるはとなり是も彼老人のうれしむを大宮ならまし  
かばとおほすより出たるならん  
おとゞ 内大臣  
わたり給へり 三條宮へ  
むかしおはしまし 今の犬との御父  
中納言も 夕霧  
かほすこしあかみて 大宮の事など歌にもよみ思ひ出  
てなき給べきさまなり  
ふる人どもおまへに所えて 夕霧雲などの御前也  
ありつる御手ならひ 前のやり水の御歌どもをおとゞ  
の  
そのかみの 御父母などの今はかげだになきはことわ  
りなりその子の我だに今は老たりとのたまふなりか  
の水の心も尋ねまほしき云々とは二人の如く我もむ

かしまたふ心をいはんとすれど老の泪もいまくし  
ければとて年月の過行ことわりのみをよみ給ふなる  
べし  
をとこ君の宰相のめのと 夕霧の乳母  
つらかりし御心も 細おとゞをうらめしと思ひし事な  
り  
宰相乳母  
いづれをも 二葉よりの御契りにてこそかくは成給へ  
るをあやなくさけ給ひし事よと思ふなり  
老人ども云々 ふる御だちどもは始よりの事を知て乳  
母の歌の如く二葉よりの事をよみつらん故に男君は  
をかしと聞女君ははぢ給ふなり  
女君はあいなく 堪遮  
神無月の云々 康保二年十月廿三日村上天皇朱雀院に  
行幸の例をうつしてかけるなり  
御せうそこありて 内より  
あるじの院がたも 六條院  
左右のつかさの御馬 是も康保二年の行幸に左右の近  
衛將監以下近衛以上各廿人御馬を馳する事ありし  
あやめ 五日の縁語  
ひつじくだるほどに 未の刻

道のほども 庭道のうへの布單には兩面錦をしくなり  
せじよう 軟障

御づし所 御厨子所の別當有て膳部瀧口廿人鶴飼四人  
所々の禁河等を預るなり

うかひのをさ 鶴飼長  
院のうかひを 六條院のなり

すぎさせたまふみちの 馬場殿より寢殿に渡り給ふ御  
道のほど

にしのおまへ 中宮の御方 古今おなじ枝をわきて木  
の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけてふ意

にて秋好中宮の住給ふかたは西の町をえめ給ふなり  
御座ふたつ 主上と院と

あるじの 源  
なほさせ給ふ程 准太上皇なれば

かぎり有いやくしさを 朝親行幸にはみかど上皇を  
拜し給ふ事ありさる様にもとおぼすなるべし

池のうを、左の少將 或説 御記延喜八年五月廿八  
日從神泉苑西掖門入御狩殿左大臣仰令捕池魚

左衛門督清經朝臣捧所捕得魚奏覽則御前料理  
供膳餘給侍臣下事

藏人所のたかひ 令には主應司とて別に有しを其後

藏人所にかねさせられし成べし 或説捕鳥奏階下事  
延喜廿年十月十八日權中納言藤原朝臣着小鳥於菊枝

立階前奏之  
鳥一つがひを右のすけさへげて 或抄に問此作法さだ

まれる儀か又鶴は左とあり應よりあがるべきにや答  
さだまれる式はなし鶴鷹の勝劣も時によるなり此魚

は御前の池にてとるによりてけふは鶴を賞せらるゝ  
にや 上に左の少將と書しによりてこゝは畧し書し

なれば右近少將なるべし  
おももの 御膳

みこだちかん達部などの御まうけ  
こは設といひめづらしざまにこゝをもかへとも

いへば六條院にての饗をいふなり下につかうまつら  
せ給ふと云は院司以下に仰られてせさせ給ふ故のこ

とばなるを是によりて王臣だちの獻物といふは誤れ  
り

御ゑひ 醉 樂所  
かくそのひとめす 今上

色まさるまがきの菊も 袖打かけしとは袖ふれて菊を

折しをいひてさて相ともに折かざして舞しことをお  
とゝの今かくゆまさりさかえ給へども猶むかしをば

おぼすらんとなり  
おとゝそのをりはおなじまひに かの紅葉賀

われも人に さきく源と立ならびて舞し事などの時  
よりいどみ給ひしに終に太政大臣までは成しかど源

の院と聞え給ふきはにいたりて及ばざるをおぼすな  
り

時雨をりしりがほなり 玄ぐれば感を添る物にて且歌  
に雲をいひ菊の紫にうつろへるなどにより所あり

紫の雲にまがへる 白菊の紫にうつろひたると又「久  
かたの雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれけ

るてふことをもてついでてさて紫の雲にまがへると  
は源の太上天皇に准給ふ事をそへて且明らかなる時

によりて源のかゝる御さかえもおぼすらんといふな  
り

ときこそありけれ 古今亭子院に奉る歌「秋をおきて  
時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされば

夕かせの 地

ふきしく 類 花御道の渡殿に錦

にしきをまきたるわたどのうへ  
を敷たるよし上に見ゆ

あをきあかきあらつるばみ 青白椽赤白椽なりさて舞  
童の左は赤き色にすはうの下襷右は青色にえびぞめ

の下がさね右左とわかるゝ時常の事なり  
例のみづらにひたひばかりの云々 天冠のみをきさせ

て外の傍をせぬなり  
みじかきものどもを 小樂なり

をしげなり 惜  
かくそ 樂所

おどろくしくはせず 太鼓など打亂聲などせぬなる  
べし

後宮職員令に書司は供奉内典經籍及  
紙筆墨几案絲竹之事を掌と見ゆ

けうせちなる 興切  
和琴の名 此は高名の日本琴なり檜の木して作ると

うだの法し いへり一條院御時に焼うせしといふ  
すぎくゐんはいとめづらしく おりる給ひては此もの

めづらしければむかしおぼし出るよしなり

朱雀 秋をへて わが御代の間にはかく興ある行幸もなかり

今上 しをと思しうらみ給ふなり

よのつねのみみち云々 けふのみみちにわが行幸有も

先代の御例によりてこそあれいかで恨めしげにおほ

すらんとなり

ためしにひける 紅葉賀をいへり

御かたち 今上

たいひとつものと 源と

中納言 夕霧

めざましかめれ 皆似させ給へばかくれなきをいふ

あてにめでたき 今上と夕霧

おとりまさらん みかどには

あざやかに 夕霧

さうがの 唱歌

辨の少將の 柏木の弟なり

なほさるべきにこそと 此大きおとりの御子たちの筋

をいふ

源氏物語新釋

若菜上

此卷は左大將の北の方 玉がら 源氏へ四十の御賀ま

わり又末にも朱雀院の五十の御賀奉らせ給ふ事あれ

ば名とせりさて源氏卅九のとしより四十一の三月ま

で三とせの間の事を書り其間に女三の宮御裳着の事

明石中宮御懐妊の事同じ御産の事もあり

ありしみゆきのうち 六條院へ

あつしく 戸合に篤疾の名ありよりであつきやまひと

いふことゝはみゆ諸説はあらぬ事共なり

おこなひの 御出家

きさいの宮 弘徽殿の太后の既崩給ひし事爰にはじめ

ていひたり

みこだちは東宮を 朱雀院の皇子たちの御中に皇子は

今の東宮にます外は皆皇女なり

女宮だちなん四所 女一宮落葉宮女三宮四宮是なり

藤つぼと 或云薄雲女院の御妹也式部卿の宮杯兄弟也

先帝の 桐壺

また坊と聞えさせしとき 朱雀の東宮の御時より此源

氏の宮は入内なり

たかき位にも 此朱雀院の御宇に彼藤つぼこそは后に

立給ふべきなるを帝の御心よわくませば大后方には

ばかり給ひたりさらば朧月の立べきも源の名たちた

れば女御とだに聞えず侍るなど旁にて立后なしとみ

ゆこれ又皇位のおとろへさせ給ひて臣の我まゝせら

るゝを顯はし書るものなり

はゝかたも 藤壺の御母は先帝の更衣となり

内侍のかみ 朧月夜

けおされて 藤壺は

みかども御心のうちに 朱雀院の御心よわくおはしま

す故なり

おりゐさせ給りしかば 朱雀院の御おりゐはみをつく

しの巻に有

世中をうらみたるやうにて 源氏の宮

女三宮を 此宮をいひ出べきとて書なり

御とし十三四ばかりに 女三宮

いまはとそむきすて 朱雀の御おほし

たちとまりて 女三宮

にし山なる御寺 花新國史曰仁和四年八月十七日於

新造西山御願寺一行先帝周忌御齋會云々今案西山  
 なる御寺とは仁和寺をいふなり光孝天皇の御願寺と  
 して仁和年中に作られしによりて仁和寺とは號せり  
 則光孝天皇の一周忌の御齋會をかの寺にして行はる  
 又宇多天皇御出家の後延喜元年十二月に御室を仁和  
 寺にたてらる同四年圓堂を作らる供養あり本尊は金  
 剛界會の三摩耶形也又承平帝天曆六年三月に御出家  
 ありて四月に仁和寺に遷御あり  
 つくりはて、一本つくり出たとあり  
 うつろはせ 朱雀院  
 又この宮の 女三

宮にもよろづのこと 朱の東宮に示させ給ふ  
 御年のほどよりは 東宮  
 御うしろみども、 明石中宮など其外も  
 この世にうらみのこる事も 朱雀院の仰  
 さらぬわかれにも 老ぬればさらぬわかれのありとい  
 へばてふごとく死別は去がたき事  
 思ふやうならん御世には 御位につき給はよとなり  
 その中にうしろみなど 女二女四などは御母かたのよ  
 ろしきふるべし  
 たゞひとりやを 朱雀ばかりを  
 うちすて、むのちの世に 御出家の、ち  
 女御にも 承香殿  
 されどは、女御の 女三宮の御母藤つぼの女御  
 みないどみかはし給ひし 承香殿ともいどみ給ひしと  
 なり

たゞ此御かたにと 女三へ重寶はまゐらせらるゝなり  
 此注もと孟津の文なり眞淵手筆の本には抹したり  
 そうぶん 處分  
 東宮は 今の  
 御なやみに 朱雀院の  
 は、女御もそひ聞えさせ 承香殿の女御ひげ黒のいも  
 うと  
 宮のかくて 東宮  
 としごろの御物語 朱雀と女御と

この御事を 女三の事  
 今もなつかしく 御宇の時ことに仕奉りし臣たち  
 中納言の君 夕霧  
 故院のうへの 桐壺  
 このあんの御事 源なり

いまのうちの御事なん 冷泉院  
 おほやけとなりて 朱雀御位につき給ひて  
 ことかぎりありければ おほやけの事の大法ある心な  
 り  
 はかなき事のおやまりに 朧月の事  
 心おかれ奉る事も 源氏に  
 その御心ばへほころぶべからんと 下のうらみいつか  
 とけん  
 東宮などにも心をよせ これはまへくより大かたの  
 源の心よせの事なり  
 又なくまたしかるべきなかととなり 明石の姫君をまゐ  
 らせ給ふなり  
 かぎりなく心にはおもひながら 源氏の御心よせを朱  
 雀の御満足ながらとなり  
 本性のおろかなるに 朱雀の御事下  
 この道のやみ 朱雀の我御心さくらぬが上に子をおも  
 ふやみのまどひをそへてかたぐ御口ませし給は  
 中々よろしからじとて東宮の御事をば源にまかせ参  
 らせ給ふとなり  
 うちの御事は 冷泉院の御事なり

かの御遺言たがへす 桐壺の御ゆいごんのまゝに世を  
 ゆづり給ひしとなり  
 きしかたの 朱雀院の御世の  
 此秋の行幸 藤のうら葉に有し行幸なり十月なれども  
 秋と書るはもみちによれる故か  
 たいめに聞ゆべき 源氏へ  
 みづからとぶらひ 源氏に  
 過侍にけん すまなどのをりの事はをさなきにゆづり  
 ておぼめき申けちたまふさまなり  
 としまかりいり侍て 夕霧のとし行てといふ心なり  
 大小の事につけても 世間の大事小事に付て源氏と物  
 がたりの事なり  
 いにしへのうれはしき 前にはかなきことのおやまり  
 に心おかれ奉る事と仰られしをさも侍りしといふこ  
 とわりを御物がたりに申なり  
 うちかすめ 源氏の  
 かくおほやけの 源氏の  
 御位におはしまし 朱雀の  
 かみの人々 源よりも上の人  
 今かく政をさりて 或説に朱雀の御事なりといへどさ  
 ら

らば今少し書べき様こそあらめ政をさるとは源にていふ語なり然れば源は政をさりて君も位おりさせ給ひて閑におはしますと頃と二つにみるべしかくはぶける文も例多きなり

所せきみの 源の院號をかうぶりなど

廿にもまだわづかなる 夕霧今年十九歳

御目にとめて 朱の

ひめ宮の 女三

おほきおとりのわたりに 朱雀院の仰

とし頃心得ぬさまに 雲ををばしゆるし給はざりし

事なり

いかにのたまはするにかと 夕霧

この姫宮を 女三

かの院の 源

きこしめして 朱の

うるはしだちて 嚴かなる公事などのかた

ひとつあまりて 廿

すゝみにためるは 十九にて中納言なり

これもをさく 夕霧

あやまりてもおよすけまさり 夕のあまりにはやく中

納言に成たるを源氏のわかきほどに卑下して淺位にて在しよりみればあやまりたりとはいふべけれど猶夕はよろづにおとなしければさも有べきとのたまふなるべし

姫宮のいとつくしげにて 女三宮

みたてまつり給しも 朱雀の

みはやしたてまつり 女三宮を

御もぎのほどの事など 女三宮の

六條のおとりの 朱雀の

式部卿のみこのむすめ 紫上

中宮さぶらひ給 秋好

うしろみ すべらぎの皇女にうしろみなきなどいふと

おほん代のおとろへいとまかしこくこそ

この權中納言の朝臣の 夕霧

きやうざくに 景跡

中納言はもとより 御乳母

かのわたりに 雲の鷹

かの院こそ 六條院

やんごとなき御ねがひ 紫上の外に本堂を求め給ふ心のあるとなり

前齋院などを 權なり

いでその 是より朱雀の仰

げにあまたの中にかゝづらひてめざましかるべき思ひ

是より朱雀の御心中を記者書り 此下に倘左様にお

はしますやうもあらばいみじき人と聞ゆるも立なら

びておしだち給ふ事はえあらじとおしはからるれど

猶いかゞとはいかるそ有てなんと辨がいへるを思へ

ばこゝは紫上などの女三をもなめげにせん時はとの

意なり

猶やがて 卽

おやぎまに 六條院を女三宮のおやのやうにとととな

り まことにすこしも 朱雀院御詞なり

かの人の 源

ふればはせ 干按萬葉二飛鳥のも流觸經ナカシラカス 古事記雄略

條の歌ほづえのえのうらばは中つえにおちふらはへ

是を以て流觸經もながれふらはへと訓りこゝの事も

相似たり

心ゆく有さま われ女ならばとのたまふよりみれば源

を夫として女三の御心ゆきて世を過し給はんをのた

まふなり

われ女ならば 朱雀の御身

同じはらから 此文の末にことばらにもあらば懸想せ

んをなど様に書しをおもふにこゝも異母はもとより

同母兄弟なりともてふ意にて書るなり

かんの君の 朧月夜

左中辨 誰ともなし

かの院の 六條院

この宮にも 女三宮

まわりたるに 左中辨

あひて めのとの

みこだちはひとりおはし 古は専ら皇女は后などに立

給へり此頃となりては臣より后と爲給ひて皇女をば

獨おはすべき様になれるを例の事と書るは時の様を

かけるのみなりこれ作者の意にあはぬ故に此ものが

たりには皇女を多く后とは玄奉りたり

ま心 眞心

わが心ひとつにしもあらで 御乳母一人にもあらず其

外の女房達もあればなり おもはずに御名立事も有てはとな



御らんずる世に 朱雀のかく御座して  
かしこき筋と聞ゆれど 皇女といへども女の終のあり  
つきは定めがたきなればよろづにおもひなげかるゝ  
となり

猶いかゞとはからるゝ もし紫は相立ならび奉らん  
や

かくあまたの御中に 皇女四人あり  
とりわき 女三を  
ちりもす奉らじと ちりばかりも人にあしく思はせ  
じと也 古今に「ちりをだにす奉じとぞ思ふ咲しよ  
りいもとわがぬる床夏の花てふ詞をとりて此身にけ  
がらはしき御名少しもあらせ奉らじとするといふ也  
辨いかなるべき御事にかあらん 更におもひわきまへが  
たくていふ語

此世のさかえ 源の御榮花  
女のすぢにて 御息所朧月などにつけてそしりをうけ  
又末摘花などの事の御心ぐるしきをおぼすべし  
わが心にも 源氏  
おぼしのたまはするに 源の  
げにおのれらが 辨  
かぎりあるたゞ人どもにて云々 諸の説に今の源に比  
べき人にあらずとなりとのみいへるはこと蓋す中頃  
よりは后にしも大臣の姫君の立つをならはしとする  
を六條院の紫花散里は親王の姫君にて親王は大臣の  
上に立つこと此ものがたりの様なれば爰は記者の意  
得有之書るなるべしそのよしは前々にいふごとく此  
物語の後は皆先帝の皇女或は前坊の皇女今又明石中  
宮も准太上皇の御女なり是によるに今准太上皇に配  
すべきは皇女ならでは専らの御むかひめならずとす  
れば況や后は皇女を立給はんこと、記者のおもへる  
にや

やんごとなくおぼしたるは 紫上  
ひとかたなめれば 紫上の外はなし  
ことよりて やんごとなき紫一人  
かひなげなる 外は  
御すぐせありて 女三の  
いみじき人と 紫上をさす  
たちならびて 女三に

院の御ありさまに 六條院なり

ぐしたるやは 其  
めのと又このついでに 女三宮の御めのと左中辨と  
かたらひしことを朱雀へ申すなり  
まかなくなん 如此々々てふ語にて云々と書に同じ  
なにがしの朝臣に 左中辨をさす  
とし頃の御ほいかなひて 或抄に前にわが心にあかぬ  
事有とつねに内々のすさびごとにもおぼし宣はする  
といひしにつけてなり  
こなたの御ゆるしまことにありぬべくは 朱雀院の實  
に源へと思召さば源へ傳へ申さんと辨が申たるなり  
いかなるべきことにか侍らん ことをさだめずわが心  
に疑ふよしに先いふ語なり  
ほどくにつけて 源は人の程々をよくわきまへても  
のし給ふ人なれば今皇女の御事をばことにし給ふべ  
きものながら又世間の様を思ふに今更まかりとて紫  
などいとおとしめ給ふまじくて立ならびてあらん時  
はみ意の満足なる事ならねばいかせさせ給はん  
なり

さかしまいへど  
御心おきてに 御自の  
さかしきしも人 下人のさかしきのみにてはかひなき  
なり

ありがたき御心さまに 源の御事なり  
めざましきこともや侍らん 紫上の猶専らとあらんと侍らめ  
さはいへど

御うしろみのぞみ給ふ人々は 女三をのぞむ人は柏木  
大納言をはじめありとなり  
かぎりなき人と 此皇女のごときやんごとなしといへ  
どなり  
いまの世のやうとて むかしは人ごとに心直ければた  
だ大どかにましますもよき事なるを今の世はよろづ  
に心づかひさてはやんごとなき皇女といへどことゆ  
き侍らぬなるに此女みこはあまりにさる御心のおほ  
せすとなり扱ほがらかに云々とは心明らかにして時  
の様をもみづから知てことを爲給ふといふなり女三  
のおぼつかなきとは暗きかたにいふにむかへて明と  
いふのみ  
いふのみ  
姫宮は 女三の御事なり  
つかうまつるかぎりこそ侍らめ おふなく 忠誠をつ  
くすとも  
御心おきてに 御自の  
さかしきしも人 下人のさかしきのみにてはかひなき  
なり

とりたてたる 女三に  
 猶心ぼそき 　　まだ下なる人は  
 宏かおもひ 　　朱雀の仰なり  
 みこ達の 　　さまぐとおもひわづらひ給ふとなり  
 父母など 　　さるべき人にたちおくれ 　　又男に見ゆれば物思ひある  
 よとて女の一人うるはしうてのみはありがたきもの  
 となり  
 世にゆるさるまじき 　　世人の上ならずとする事をばせ  
 ずとなり  
 けふはなほくしく 　　親などなく成て  
 いひもてゆけば皆同じ 　　帝のみこといへどみな同じこ  
 となり  
 さるべき人の 　　男  
 ゆるしおきたる 　　親の  
 ありへてこよなきさいはひ 　　こは次にのたまふなる親  
 に差らせずさるべき人もゆるさぬを我心づから忍び  
 わざしたる女の有へてこよなきさいはひありめやす  
 き事になるもあれどことのはじめふと聞つけたる時  
 は心づきなくおぼゆるとなり  
 はなれて 　　離

おもふ心より外に人にもみえずぐせの 　　或説に心より  
 外に人にみえなどするもいひもてゆけば我心がらな  
 りと云り扱我本意にもあらずなほくしき人にみえ  
 などしてさばかりの前世の縁ある女にこそと外人に  
 我すぐせのほどをさだめられなどし惣てかろくし  
 き事となり  
 おしはからるゝ事なるを 　　淺くおしはからるゝことゝ  
 なり  
 あやしく 　　女三宮  
 これかれの 　　めのと遠  
 見すてたてまつり給はん後の世を 　　朱雀遁世まして  
 いやゝわづらはしく 　　乳母  
 今すこし物をもおもひしり 　　朱雀の女三をのたまふ  
 ふかきほいも 　　御遁世  
 かの六條のおとやは 　　源  
 さりととも物の心得て 　　かたぐ多く物せらるれど  
 あまた物せらるべき 　　それにかゝはるべき事にもあら  
 ずさる中にもいかにも有べくはその人の心がらなり  
 のどかにおちゐて 　　源  
 さらによろしかるべき人 　　源にあらで

兵部卿宮 　　螽  
 おなじきすぢにと 　　兵部卿宮は御ことばらの御弟なり  
 大納言の朝臣 　　此下に藤大納言はとし頃院の別當にて  
 亥たしくつかふまつりてとある同じ人と見ゆ是も今  
 大納言にしもあれば御うしろみを望むなれど臣にて  
 は柏木の家よりはひくきよしなるべし扱此所の文地  
 なく聞ゆ右は御うしろみといふを院の少しおとしめ  
 て家づかさ望とは仰られたるなり次に記者の書しに  
 は御うしろみとあり  
 おしなべたるきは、 　　右の大納言をさす  
 むかしもかやう 　　或説嵯峨天皇の御女潔姫太政大臣藤  
 原朝臣良房嫁之延喜皇女康子内親王配九條右丞相師  
 輔  
 右衛門督 　　柏木こゝにはじめて右衛門督とみゆ  
 亥たにわぶなるよし 　　内々に女三宮をこひ佐るとなり  
 内侍のかみ 　　此内侍は朧月夜の事にて柏木の母の妹な  
 り  
 その人ばかりなん 　　柏木  
 などかはとも 　　などゆるさゝらんとなり  
 こともなく 　　難なきをいふ

かぎりぞあるやと 　　かぎりなき人とはいはれぬとなり  
 御さゝめき事どもの 　　女三の御事を乳母などと  
 おほきおとやも 　　柏木の父  
 かゝる御さだめ 　　女三の御後見の事  
 めしよせられたらるとき 　　柏木を女三のかたへ  
 内侍督の君には 　　朧月夜  
 あねの北の方 　　前に出  
 御けしき給はらせ給ふ 　　朱雀院の御けしきをうかゞふ  
 をいふ  
 兵部卿宮は 　　螽  
 左大將の 　　ひげくろなり  
 北方を聞えはづし給て 　　玉かづらの事  
 き、給はん所も 　　玉かづらのき、給はんところもあれ  
 ば大かた人にてのとなり  
 いかゞは御心のうごかさゝらん 　　女三の事に  
 藤大納言は 　　前に出し同じ人なり  
 年頃院の別當にて 　　朱雀院の勅別當  
 御山ごもり 　　朱雀院の  
 この宮の 　　女三  
 御うしろみに 　　こゝは記者のいへればかくあるなり

給はり給なるべし 伺ふといはんがごとし

權中納言も 夕霧

かゝる事どもをきゝ給ふに 柏木盛大納言などの望む

ことを

さばかりおもむけさせ給へりし 前に有しなり

御けしきを 朱の

女君の 雲井鷹

にはかに物をや 「かねてよりつらさを我にならばさで

俄にものをおもはする哉

今考ふるに此歌物に見えず歌の様もおぼつかなし例

の事歟

なのめならず 女三宮の御事なり

ひだり右に 女三と雲井の事

すきくしからぬ 夕霧

後の世のためし 後代の例

まぢきかせ給ても 朱雀の

御心だたせ給て おぼしたつよしなり

まづかの辨して まへの左中辨

あない 案内

この宮の御事 女三

皆聞おき給へれば 六條院

心ぐるしき御事 是より源の詞なり

いくばく立おくれ 源氏卅九朱雀四十二三にならせ給

ふ

げにまだいをあやまたぬにて 年の

不定なる世のさだめなりやと 此不定世間のはかなき

をいひ次のさだめは判きはむることをいへり

ましてひとへにたのまれ 入楚前にかくとりわきて聞

置奉りてんとは大かたの御後見の事なり此ましてと

いふは源へ北方とてゆづり給はんは源のほだしとも

なるべきとの事なり

うちつゞき世をさらむ 源氏も廿歳ばかりより出家の

こゝろありしなればほどなく世をのがれんときとな

り

中納言などは 夕霧

などがこよなからん いかで大きに似つかざらんなり

思ふ人さだまりにて 雲井鷹 にては去の略

辨も 左中辨

おぼろげの御さだめにもあらぬをかく宜へば 大方に

御おぼし定めてのたまはする事にもあらぬを今いな

み給は、院の御心もいたはしくわが心にも口をしと  
なり

いとかなしく 源

たいうちにこそ 入内

さきの人々 先参りし

よしなきことなり 御心おかせ給ふべき故なしとなり

おろかなるやうもなし 龍の

故院の御ときに 桐壺

大后の こは桐つぼ帝の坊と申とき参給へば初の巻に

も人よりさきに参給ひてと書しなり

いさまき はら立て息をむねにせきあげたるをいふ

入道のみやに 薄雲

女三のこの御母 女三の母と薄雲と姉妹なる事なり

かの宮の うす雲なり

かたちもさしつぎには 薄雲に次ては

このひめ宮 女三

いふかしくは 源の語よりつゞけて記者のいふなり

源も此皇女をばゆかしくおぼすならんとなり

御裳着の事 或云昌子内親王御袴着の例をおもへり朱

雀院皇女云々李部王記天曆六年十一月廿八日昌子内

源氏物語新釋 若菜上

五千百九十七

親王初服袴主上親結腰又曰同記云天曆六年八月廿  
七日太上皇御乳母加賀命婦告送云院御惱彌重又云同  
十四日落傍入道これは承平の帝御惱によりて御落傍  
の事なり

かへ殿 柏梁殿朱雀院にあり 柏殿者皇后御在所也見

九條右丞相曆記 柏にてつくるなりかえとよむべ

し

もろこしの后のかざり 河嵯峨天皇弘仁八年男女衣服

用唐法周禮王后六服といふは袴衣褌袷袷袴衣展

衣襟衣といへり今思ふにかくはあれどけふはからさ

うぞくにはあらじから后のさるべきおり物を用ゐら

れしのみなるべし

御こしゆひには 李部王記云承平三年八月二十七日康

子内親王初着裳戌一點小一條左大臣親王外舅結御裳

腰

おほきおとを 二條太政大臣なり

ことくしくおはする人にて やうがましき人なれば

ゐんの 朱雀

いま二所の大匠だち 左右大臣

内東宮ものこらず 内裏又東宮の殿上人

<p>院の御車はこのたびこそとちめなれと 朱雀院にての大祭は此たびばかりなるべしとなり</p>	<p>かゝる事ぞ 院の御らんすべき心なる歌を中にそへられしなり</p>
<p>蔵人所をさめどの 桐つぼの巻に出たり</p>	<p>秋好 さしながら さしながらはしかしながらてふ語なるを</p>
<p>尊者の大臣の 花是は大饗の例をもて御もぎのこしゆひを尊者と書りおほよそ唐朝には徳爵齡の三の中に一もあれば尊者といへるなり</p>	<p>さながらてふ意として且くしの語をそへたり扱むかし給はりしをつたへて今まゐらするなれば久しうなりてふりにたるとなり</p>
<p>かの院 六條院</p>	<p>院御らんじつけて 朱雀院なり</p>
<p>中宮よりも 秋好</p>	<p>あはれにおぼし出らるゝ 秋好に御心がかかりし故</p>
<p>くしのはこ心ことに 花御もぎには先髪上の儀式あれ</p>	<p>あえ物 應神紀に宵をあえとよみてあやかり物てふ意なりさて秋好はさいはひ人におはしませばなり</p>
<p>よくしの宮ももとよりなり</p>	<p>ゆづりきこえ 女三八</p>
<p>かの昔の御ぐしあげの具 こは繪合巻に秋好中宮御入内し給ひし時朱雀院より御ぐしのはこうちみだりの</p>	<p>むかしのあはれをば 御心とまりつる事繪合の巻の御歌にみゆ</p>
<p>はこなどまゐらせ給ひし事ありそれにくはへもし或はかつくは改めたれどその本のなりとまゐるき様に</p>	<p>さしつぎに 朱の御返 細中宮のさしつぎに女三のさいはひをもみるものにもがなとなり神さぶるまでとは久しきよはひをもいはひ給へり</p>
<p>て奉らせ給へるなり扱此中宮御さいはひ人におはせばあえ物げしくはあらじとゆづり聞え給へるとかけり或説に齋宮御別れのくしの事といふはいかにぞや</p>	<p>御心ち 朱</p>
<p>その日の夕つかた奉らせ給ふ 女三八なり</p>	<p>この御いそぎ 御裳着</p>
<p>みやの権のすけ 中宮権亮</p>	<p>よろしきほどの 大かたの</p>
<p>院の殿上にも 此権亮が朱雀院の殿上人にてもあるか</p>	<p>御かたぐもおぼしまどふ 朱雀の女御更衣達</p>

<p>内侍のかんのきみは 朧月夜</p>	<p>にあらす</p>
<p>こしらへかね給て 朱の仰なぐさめかね給ふなり</p>	<p>うげばり給はず 太上天皇のさまし給はぬなり</p>
<p>子をおもふみちはかぎりあり 女三などの御子の別の</p>	<p>ことぐしからぬ御車 花西宮抄に太上天皇行幸<small>供奉</small></p>
<p>かなしみはかぎりあり朧月夜の歎き給ふ別のかなしみはかぎりなしとなり</p>	<p>東<small>東</small>時<small>東</small>上<small>上</small>皇<small>皇</small>乗<small>乗</small>車<small>車</small> <small>檜柳朱雀院初令出天</small>これをそぎ給ふ</p>
<p>かくおもひしみ 朧の</p>	<p>ならば御車はびりやうげにて金筋をのぞき給ふにや</p>
<p>御けうそくに 朱雀の御惱中の御さま</p>	<p>唐底などは其後出来しことなればもとより有べから</p>
<p>山の座主よりはじめて 河李部王記云天曆六年三月十</p>	<p>かんだちめなど 行幸の儀式ならば公卿は馬にて供奉</p>
<p>四日亥時太上天皇朱雀落傍入道延暦寺座主権大僧都</p>	<p>すべきに是は替め成べし</p>
<p>延昌爲和上法性寺座主権律師鎮朝爲親教師一刺</p>	<p>院には 朱雀</p>
<p>御髮運照阿闍梨勢祐己講爲唄師</p>	<p>たおはしますかたへ 抄朱雀の常の御座のかたなり</p>
<p>御いむ事のあざり 細受戒の阿闍梨なり</p>	<p>御病中又御隔心なきさまなり</p>
<p>いと心あわたしく 朱雀の御心</p>	<p>かはり給へる 或人いふおりるさせ給ひて物心ほそく</p>
<p>かゝらでしづやかなるところに かくさわがしからで</p>	<p>御ありさままだにあるにまして御くしおろし給ふを御</p>
<p>をさなき宮に 女三</p>	<p>らんずる御心ちといか許りならん忘れては夢かどぞ</p>
<p>うちより 今上</p>	<p>おもふなどいへるをりの類なるべし</p>
<p>御心ちよろしくと 朱雀御出家の後</p>	<p>とみにもえたためらひ給はず 源の御落涙のすゝむさま</p>
<p>御たうばりのみふ 太上天皇封戸二千戸勅旨田千町藤</p>	<p>なり 故院に 源の申給へる詞</p>
<p>裏葉にくはし且封戸の事或説にいとおろかなる問答</p>	<p>このかたのほいふかく 細出家の志</p>
<p>あれど令條にくはしくみえて問答に及ぶまでのこと</p>	<p>五千百九十九</p>